デビルメイクライ4

DEVIL MAY CRY® 4

—Deadly Fortune—1

森橋ビンゴ　原作／カプコン　小説ストーリー協力／安井健太郎



大人気ゲーム

完全ノベライズ！

スニーカー文庫

若き戦士、ネロ。デビルハンター、ダンテ。
ふたりの邂逅が、世界を揺るがす！

●森橋ビンゴ
2002年から4年間、株式会社カプコンに在籍、「デビルメイクライ」シリーズの開発に関わるかたわら、小説執筆活動を行う。現在はカプコンを退社し、フリーランス。

この本が出る頃には東京への移住が完了している予定。さようなら青春の大阪。

カバーイラスト／THORES柴本
カバーデザイン／中デザイン事務所



S
211-1
Y571
森橋ビンゴ 著
カプコン 原作
安井健太郎 小説ストーリー協力
デビルメイクライ4
-Deadly Fortune-1
角川スニーカー文庫

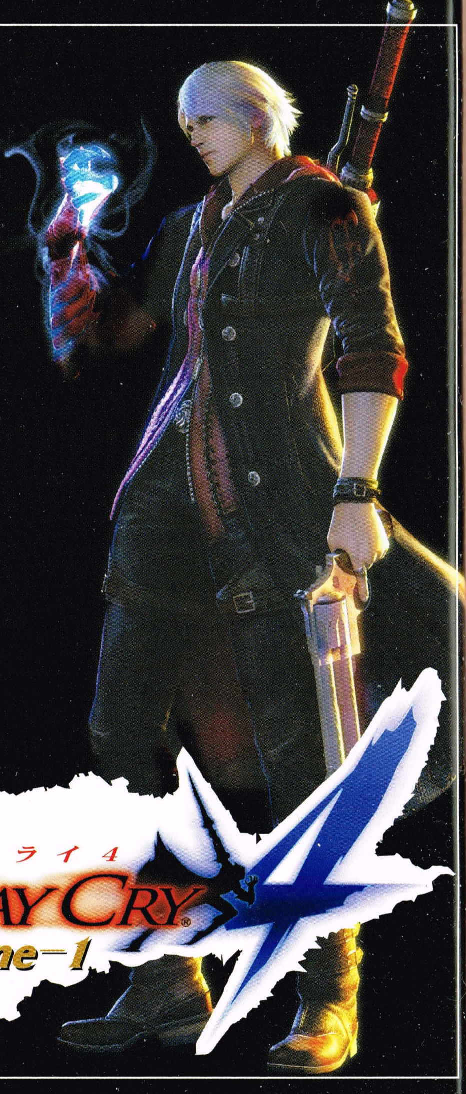
ISBN978-4-04-419222-8
C0193 ¥571E
定価：本体571円（税別）

城塞都市フォルトゥナ。そこで信仰される魔剣教団の若き教団騎士ネロは、ずば抜けた実力を持ちながら、その孤高の性格ゆえに周囲から疎んじられていた。任務をこなしながらも鬱屈とした日々を送っていたネロだったが、ある日教団の教皇が暗殺されるという事件が起こる。犯人は、深紅のコートに身を包んだ銀髪の男。ネロは男を追跡するが——。全世界でヒットした超人気ゲームシリーズの最新作が、待望の小説版で登場！

NERO

ネロ

〝魔剣教団〟に所属する若き教団騎士。その抜きんでた実力と、他者を容易に近づけない性格から、周囲からは距離を置かれている。



デビルメイクライ4

DEVIL MAY CRY®

—Deadly Fortune—1

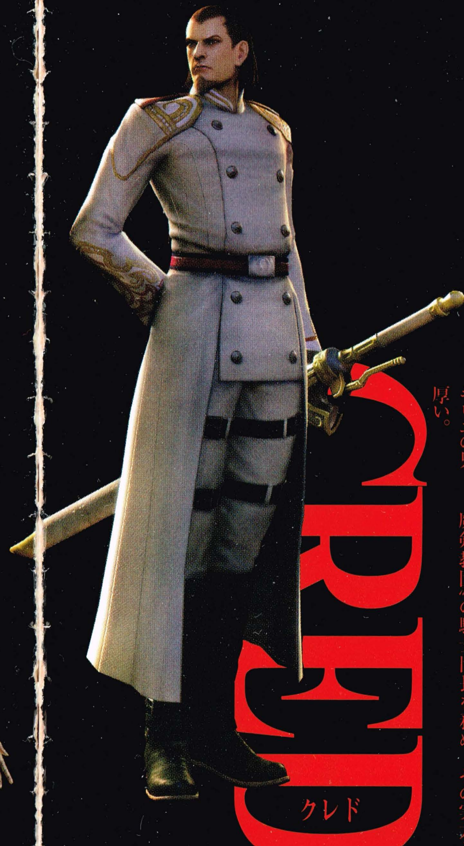
KYRIE
キリエ

騎士団長クレドを兄にもつ少女。ネロと家族同様に育ち、彼にとっては姉、あるいは母親のような存在。



CREDO
クレド

キリエの兄。〝魔剣教団〟の騎士団長を務め、その実力と統率力から人望も厚い。



SANCTUS
サンクトゥス

〝魔剣教団〟の教皇。



AGNUS
アグナス

〝魔剣教団〟の技術局の長。悪魔に対抗するための武器を開発しているが、研究に没頭しているためにその姿を知る者は少ない。



GLORIA
グロリア

〝魔剣教団〟の幹部。教団に入信後、わずかな期間で幹部になったという事実から、教団内ではよからぬ噂もささやかれている。



デビルメイクライ 4

-Deadly Fortune-1

著/森橋ビンゴ
原作/カプコン
小説ストーリー協力/安井健太郎

角川文庫 15646

DANTE

ダンテ

かつて魔界の帝王を倒し、魔界を封じた英雄、魔剣士スパーダの息子。自らも悪魔を狩ることを生業としているハンターで、その実力は父をも超えると噂されている。



CONTENTS

DEVIL MAY CRY® 4
—Deadly Fortune—1

本文イラスト　THORES柴本
口絵・本文デザイン　中デザイン事務所



STAGE 01



中天に浮かぶ月の明かりは、薄い膜を張るようにフォルトゥナの街を照らしていた。

悪魔が時折現れるために、この街では夜半に外を出歩く人間は稀だった。それが、この地方では凶兆とされる赤い月の出ている夜ならば尚更だ。だがそんな迷信を嘲笑うかのように、一人の美しいブロンドヘアの女が堂々とした様子で夜の街路を歩いていた。

黒いレザー製のビスチェとパンツという姿は、信心深く慎ましやかな生活を送るフォルトゥナにはあまりに不似合いな服装だったが、彼女はそれすら気にする様子もなく街の片隅にある街路樹の下に辿り着くとその幹に背を預けた。

「……もう少しムードのある場所を選べなかったの？」

彼女――トリッシュは独り言のようにそう呟いた。それを受けて、木の枝に腰掛けていた一人の男が飛び降りてくる。

男もまた、フォルトゥナの街には不似合いな赤いレザーコートを羽織っていた。
「仕方ないだろ。着いたばっかりなんだ。目印らしい物が思い付かなかった」
男の言葉に、トリッシュは小さく溜め息を吐く。
「まあいいわ。議論している時間はないし。とりあえず報告を済ませるわよ？」
男は頷いた。彼の名はダンテ——フォルトゥナより遥か離れた地で、悪魔を狩る事を生業とする男だった。
「聞かせてくれ。ただしできるだけ簡潔にな。長旅で疲れてる」
ダンテはトリッシュの言葉に肩を竦めた。
言葉とは裏腹に、ダンテはまるで疲れてなどいない様子であったが、トリッシュはそれについて何も言わなかった。ダンテは体調がどうであれ、他人の長話をおとなしく聞くような男ではない事を、彼女はよく知っていた。
「……教団は悪魔を呼び出してその力を人間に移植するという実験を繰り返してるわ。その指示を出しているのは教団のトップである教皇様」
「……それで？」
「彼らの最終的な目標は、悪人なら誰しもが思い付くものよ。この世界の支配……ただ、宗教という皮を被っている分、他の悪人よりもタチが悪いと言えない事もないわね。教皇にしろその側近にしろ、自分達の行いを正しいものだと考えてるわ。堕落したこの世界を救済する、っ

てね」
ダンテはうんざりした様子で溜め息を吐いた。
「またその手合いか……いい加減、絶滅した人種だと思ってた」
「貴方にやる気がないなら、私だけでやってもいいわよ？」
トリッシュは悪戯っぽく微笑んだ。文句を言ったところで、ダンテが悪魔絡みの仕事を投げ出すはずなどない事も、彼女は承知している。
「……やるさ。やらない理由もないだろ？」
案の定、ダンテはそう言い放つ。トリッシュは自分の右手の方角にそびえる荘厳な雰囲気の建物を指差した。
「明日、あの建物で魔剣祭が行われるわ。主だった教団の人間は皆出席する。勿論、教皇もね」
トリッシュの言葉に、ダンテはその建物——大歌劇場を見やった。中世に建てられたと思しきそれは、古風な雰囲気を残す街の中にあって一際目立って見える。
それがこの街で信仰されている魔剣教と呼ばれる宗教にとっても重要な意味を持つ建造物である事は、想像に難くなかった。
「で？　魔剣祭ってのは何をやるんだ？　出店でも出るんなら少しは楽しめるんだがな」
ダンテが問うと、トリッシュは首を横に振った。

「そういう娯楽的な要素はないそうよ。歌姫がスパーダを讃える歌を歌って、教皇が説法をして、皆で祈りを捧げて……それでおしまい」
ダンテはやれやれだと言わんばかりに空を仰いだ。
「何が面白いんだ、その祭り」
「宗教的な意味合いが強いお祭りなのよ。どちらかと言うとミサに近いわね」
「ふうん……」
宗教というものに懐疑的なダンテは興味なさそうにそう呟くだけであった。
「重要なのは、日頃殆ど姿を見せない教皇がその祭には現れるという事よ」
「そこを狙う、か」
言いながら、ダンテは懐から銃を引き抜く。黒い銃身にピアノの鍵盤の刻印がなされたその銃は「エボニー」と呼ばれている。
エボニーを指にかけ、クルクルと回し弄んだ後で、ダンテは目を細めた。
「……その教皇ってのがもう人間じゃなくなってるのは間違いないんだな？」
ダンテの問いに、トリッシュは小さく頷いた。
その遠方で、赤い月を見た犬が二度、高らかな吠え声を上げた。



STAGE 02



目覚めると、やはり右腕はそのままの状態だった。一カ月前に変わり果てたままの。
全てが夢だったらと願った事もあるが、現実ってのは残酷だった。
いつものように右腕を覆う包帯を取り去ると、そこには人の肌とは思えない色の、鱗か外殻を思わせる質感の物体が存在していた。
それが自分の腕なのかどうかも分からない。自分の意思で動かす事はできる。感覚もある。
だがこれは俺の腕なのか？　もはや朝の日課のようになってしまったその自問を繰り返していると、ドアをノックする音が聞こえた。
俺は慌てて右腕に包帯を巻き付け直した。こんな腕を誰かに見られるわけにはいかなかった。見られれば、おそらく俺は悪魔だと判断されるだろう。
悪魔……そう、悪魔だ。
俺の右腕は今、悪魔のような様相に変わり果ててしまっているのだ。

あの日から。

ベッドから降り立ちドアを開けると、そこにはキリエが立っていた。

あの日以来、欠かさず俺の見舞いに来てくれる。俺の右腕は、周囲の人間には怪我をしたと伝えているから、そのせいだ。

実際、あの日に右腕に怪我をしたのは事実だった。だから嘘を吐いたわけじゃない。だがあの日の傷は本当に小さなかすり傷程度のもので、一ヵ月も完治しないようなものではなかった。それが今やこの有様だ。

悪魔の毒にでもやられたか、それとも悪魔に憑かれたってやつなのか。それは分からない。ただいずれにせよ、キリエにだけはこの腕の有様を見せるわけにはいかなかった。余計な心配はかけたくない。

「おはよう、ネロ」

俺の顔を見ると、キリエは優しく微笑み挨拶してくる。

「……おはよう」

頭を掻きながらそれに応える。キリエは今度はおかしそうに小さく笑った。

「髪が跳ねてる」

「今起きたばっかりなんだ」

「ちゃんと直さなきゃ駄目よ？　今日は大事な日なんだから……」

キリエはそう言って俺の髪を撫ぜた。

「分かってる……子供じゃないんだ。自分でできる」

キリエの手を静かに遠ざけて、俺は言った。

幼い頃から付き合いがある上に、キリエは俺よりもひとつ年上だ。事ある毎にそうやって俺を子供扱いする。

「だったらいいんだけど……右腕の怪我は平気？」

包帯に包まれた右腕に目を落としながら、キリエは言った。俺は肩を竦める。

「……大丈夫だよ。大した傷じゃない」

「でも、治りが遅いみたいだから……」

心配そうに呟くキリエの声が、心に刺さった。だが真実を伝えるわけにもいかない。伝えれば、おそらく今以上に深い心配をかける事になる。

「それより、今日は舞台に立つんだろ？　準備に行かなくて大丈夫か？」

俺が尋ねると、キリエは俯いた。

「ちょっと……緊張してて……」

今日は魔剣祭と呼ばれる祭事の日だ。一年に一度しかないこの催しが、魔剣教団の唯一絶対の行事と言っていい。祭りと言っても、歌姫による聖歌を聞き、教皇の説法に耳を傾けるくらいしかやる事はないのだが——キリエは今年の歌姫に選ばれていた。ただ観衆として参加して

いた例年とは、少し勝手が違うのだろう。
「大丈夫だよ。歌うだけだ。いつも教会でやってるだろ？」
俺の言葉に、キリエは頭を振り、力ない微笑みを浮かべた。
「街中の人の前で歌うのよ？　いつもとは違うわ」
心なしかその笑顔は引きつっているように見える。何とかして勇気付けてやりたいとは思ったが、うまい言葉が見付からなかった。
「……でもネロと話してたら少し気が楽になったわ。ありがとう」
俺の心情を察してか、キリエはそんな事を言う。何もしていないのにそう言われると、却って心苦しい感じがしたが、キリエなりに気を使っての言葉なんだろう。
「今年はちゃんと参加してね？」
「分かってるよ」
魔剣祭は重大な行事ではあっても参加を強制されるものじゃない。だから毎年何だかんだと理由を付けては参加を見合わせていたのだ。正直なところ、俺はあまり敬虔な信徒ではない。寧ろ教団の教えには否定的な感情さえ持っている。だが無垢に「神」を信仰するキリエを前に、そんな事は口が裂けても言えなかった。
「それから……兄さんが一度、我刀院に顔を出すように、って」
「ああ、分かった」

頷き、キリエが去っていくのを見届けてから、俺はドアを閉めた。
どうにか今日も右腕の事がバレずに済んだ。その事に安堵しながらも、言い知れぬ不安が込み上げてくる。
この右腕は、果たして元に戻るのだろうか？
俺は再度、包帯を取り払って右腕を見つめた。脈動するように青白い光を放っているその腕は、もはやすっかり俺の身体と馴染んでしまっている。
やはりあの時の怪我が原因なのか。
俺は一カ月前の事件に思いを馳せた。



郊外の森林部に悪魔が発生したというのが事の始まりだった。
そういった悪魔絡みの事件そのものは、別段珍しい話ではなかった。魔剣士スパーダ縁の地であるせいか、それとも他に理由があるのかは定かではないが、フォルトゥナは世界的に見てもかなり頻繁に悪魔が出現する土地だった。
そしてそれ故に、悪魔に対処する術も心得ている。
それが教団騎士の存在だ。

悪魔から住民を守るために結成された騎士団の歴史は古く、教団が創設されたのとほぼ同時期から存在していたらしい。

魔剣教団の名の通りに剣を携え、揃いのコスチュームに身を包んだ様は、まるで中世から飛び出してきたような時代錯誤な外観だが、それも伝統と格式を持つからこそのものだろう。

そんな教団騎士がいるからこそ、フォルトゥナで悪魔が現れたとしてもそれ程心配するには及ばない。報告を受ければ騎士が駆け付け、悪魔を打ち倒す。

一ヵ月前も、そんな些細な事件で終わるはずだった。

だが予想外だったのは、悪魔の数が異常なまでに多かった事だ。

比較的頻繁に悪魔が出現すると言っても、それは一匹や二匹というレベルの話でしかない。

だからその日も、悪魔が現れたという森林部に差し向けられたのは、たった三人の騎士だったそうだ。

俺はその時、街の外れの小さな工房にいた。

俺もまた教団騎士ではあったが、些細な事件で呼び出しを受ける事はなかった。協調性がない、という理由のせいだ。伝統だの格式だのなんて言葉は苦手で、定められた制服さえ着用していない俺の存在は、騎士団にとってはあまり好ましいものではないらしかった。

市民にとって、教団騎士の存在は「英雄」でなくてはならない。

俺の存在は、英雄からは程遠いというわけだ。

おかげで、複数人で行動するような任務からは俺は必ず外され、頼まれる仕事と言えば単独でひっそりと行わなくてはいけないようなものばかりだった。

騎士団にも、あまり市民には見せられない類の仕事って奴は存在する。

例えば悪魔憑きの市民を処理するなんてのがそうだ。

悪魔そのものが出現する事も勿論多いが、時折、人間に憑依した悪魔なんてものが現れる。

そういう存在は、正直市民には隠しておきたい代物だ。

悪魔が人間に憑依する事自体は認識されていても、それが自分達の身に及ぶなんて事はフォルトゥナの人間は想像もしていない。自分達は敬虔な魔剣教の信徒であり、神であるスパーダの威光に守られていると信じているからだ。

教団としても、そう信じていてもらわなくては困るって事なんだろう。

いくら崇めても悪魔に憑依されてしまうというんじゃ、教団の存在意義が揺らいでしまう。

だから悪魔憑きの人間は、秘密裏に処理されなくてはならない。

人目に付かぬよう、複数での行動を避け、単独で、ひっそりと、だ。

俺の仕事は、専らそういうものばかりだった。

いわゆる汚れ仕事って奴だ。

かつて人間だった存在を殺す事に抵抗がないと言えば嘘にはなるが、それでも悪魔に憑かれた人間を元に戻す方法がない以上、そうするしかないのだ。誰かがそれをせねばならないとい

うのなら、俺がやればいい。
逆に言えば、そういう仕事以外、教団で俺がやるべき仕事はなかった。
その日工房にいたのは、そういう理由からだ。
工房では主に銃をいじって時間を過ごしていた。
この銃という存在も、俺が教団で疎まれる理由のひとつではあった。
魔剣教団の名の通り、教団では「剣」という存在が非常に重んじられている。
神と崇められる魔剣士スパーダが一振りの剣でもって悪魔の軍勢を打ち倒したという伝説があり、その伝説を元に創られた教団も、「携えるべきは一振りの剣」という概念を持っているのだ。
銃なんていう近代の武器は、邪道であり外道だと、教団騎士の先輩に罵られた事もある。
だが俺に言わせれば使えるものは何でも使えばいいのだ。妙なこだわりのせいで悪魔を倒せませんでした、ってオチになるよりはずっといい。
とは言え、並の銃では悪魔には通用しないというのも事実だ。だからわざわざ工房でそうやって銃を改造しなくてはいけなかった。誰かに頼もうにも、銃を扱ってくれる人間はフォルトゥナにはいないから、全て自分でやるしかない。
俺が使う銃は、大口径のリボルバーを元に改造していったものだが、もはや元の銃の原形は何ひとつ留めていない。何せ銃口からしてふたつある。デリンジャーというタイプの銃に二連

装バレルのものがあるが、形状はそれを参考にした。ただ、デリンジャーがあくまで一発ずつの弾丸をそれぞれのバレルから発射させるのに対し、俺の改造した銃は二発の弾丸をほぼ同時に発射する。
いろいろ試行錯誤した結果、悪魔どもに効果的なダメージを与えるにはそれが最適だという結論に達したからだ。
それは一発よりも二発の方が破壊力がある、なんて単純な理由からじゃない。
俺の銃は二発の弾丸を〝ほぼ〟同時に発射する。その〝ほぼ〟というのがミソだ。実際にはほんの僅かなタイムラグがある。時間にすればコンマ何秒という程度の差だが、この微妙な差によって、相手に着弾するまでの時間に開きが出るわけだ。
悪魔というのは往々にして硬い外殻に身を包んでいるような連中が多い。普通の銃では傷一つ与えられない、なんて奴もいる。そんな奴らに対抗するためには使用する銃の口径を大きくし、より強力な弾丸を発射してやればいい。
例えばショットガンだ。ショットガンは狩猟に使う銃だが、散弾を広範囲に撒き散らし、素早く動く相手にも効率的に弾丸を当てられる。至近距離で発射すればその散弾が拡散する前に命中するから無数の散弾によって相手に絶大なダメージを与えられる。
だが裏を返せばショットガンは離れた相手には少しのダメージしか与えられないという事でもある。鴨や鹿ならそれでも充分だが、悪魔にはそうもいかない。破壊力のために距離のアド

バンテージを失うのではそもそも銃を使う意味がない。

かと言って、狙撃用のライフルなんてのも駄目だ。勿論、破壊力はあるし狙撃用だけあって長距離でも威力を失う事はないが、血気盛んに襲い掛かってくる悪魔相手にいちいち銃をセットして相手を狙うなんて暇はない。大型過ぎて持ち運びに不便だというのも具合が悪い。

ミサイルランチャーを使うなんて事を考えてみたりもしたが、それも馬鹿げた話だ。悪魔を倒すために町を破壊してちゃ、何のための教団騎士だって話になる。まして俺は汚れ仕事専門だ。悪魔を倒すのにいちいちそんなドカドカ爆音を響かせるわけにもいかない。

結局、選択肢はハンドガンだ。携帯しやすく、混戦の最中でも使いやすい。

だがハンドガンの口径では通用しない悪魔もいる。

そのための連装バレルなのだ。

タイムラグのある弾丸には、それぞれ別種類のものを使用している。

ひとつは相手の体表に大きくダメージを与えるタイプの弾丸だ。この弾丸がまず先に発射され、相手の外殻に亀裂を生じさせる。この弾丸自体に強い殺傷能力はないが（それでも弱い悪魔には充分に効果的な代物だが）、これで強固な殻を傷物にしてしまうのだ。

そしてふたつめの弾丸は貫通力が高いタイプ。こちらの弾丸が一発目に着弾した弾丸の直後に命中する事になる。相手がどれだけ硬い外殻を持っていたとしても、一発目で外殻そのものにダメージを与えてあるから容易に撃ち抜けるというわけだ。

縦にふたつ並ぶバレルから発射される弾丸を効果的に同一箇所に命中させるのは少し曲芸じみた芸当ではあるが、それも何度か試射しているうちにコツは掴めた。体を動かす事全般に関して、昔から飲み込みは早い方なのだ。

そんなわけで、俺が改造したその銃は悪魔相手にも充分役に立ってくれる。

難があるとしたらシリンダーに二種類の弾丸をセットしなくてはいけない事だが、それもクイックローダーにあらかじめ仕込んでおけば多少は改善される。オートマチックの銃を使えれば尚良かったのかもしれないが、俺の技術で扱えるのはリボルバーが限界だった。多少人よりは器用だとしても、俺は銃職人でも何でもない。

俺はその日も工房で銃をいじっていた。改造の類はもう終わってしまっていたから、やる事と言えば素っ気ない銃身にレリーフを刻む事くらいだった。別段、そんな事をしようがすまいが銃の威力が変わるわけじゃないが、そんな些細な事で銃により強い愛着が湧くのならやっておいて損はないと思ったのだ。

自分の銃に、俺は「ブルーローズ」という銘を付けていた。

青い薔薇は遺伝学的にはあり得ない存在だという事を、何かの本で読んだ記憶があったからだ。俺の銃も、普通ならばあり得ない形状をしている。人間相手にはそんな改造など施す必要はない。悪魔という特異な存在を相手にするために生まれた、あり得ない銃。

そんな銃に付けるには、いい名前だと思った。

だから銃身には薔薇をモチーフにしたレリーフを彫ると決めていた。
深く彫り過ぎれば強度に影響を及ぼすから、微かに、しかしくっきりとその意匠が分かるように、俺は注意深く銃身にその紋様を刻んでいた。
グラインダーを扱う右手は汗でじっとりと濡れていた。
右手――右手だ。あの時の俺の右手は、まだ今のように悪魔じみた外観をしてはいなかった。
レリーフの作業が終わりかけた頃、時刻は夕方を過ぎていたと思う。
工房に突然、シェスタが駆け込んで来た。
シェスタは俺が世話になった孤児院の院長だ。年齢は知らない。俺が子供の頃から婆さんだったが、今になってもまるで見た目が変わっていないのはちょっとしたミステリーだ。
魔剣教団の敬虔な使徒でもあるシェスタは、日頃からまるで私服のように身に纏っている礼服を振り乱しながら、俺の姿を見るなり、
「ネロ！」
と叫んだ。
俺はまた説教か、と思った。彼女にはガキの頃から叱られてばかりだったが、それは孤児院を出、独立した段になっても変わらなかった。俺の教団騎士としての噂だの何だのを耳にしては怒鳴り込んできた、なんて事は一度や二度の話じゃない。
「……シェスタ、説教なら後にしてくれよ。今大事な仕上げのところなんだ」

火花や金属片から目を守るためのゴーグルを外しながら俺が言うと、シェスタは肩で息をしており、次の言葉を吐くのにさえ小休止を必要としているような有様だった。説教をしにきたと言うには、あまりに急き込んでいる。
「……何かあったのか？」
グラインダーを床に置き、立ち上がりながら尋ねると、シェスタはよろよろと俺の方に近付き、俺の肩を抱いた。
「キリエが……キリエが森に……」
キリエがその日、孤児院の子供達を連れてミティスの森に行くという話は、キリエ自身から聞かされていた。俺も誘われたのだが、俺はあまり子供の相手が得意ではないからやんわりと断ったのだ。
「森に……って、それがどうかしたのか？　いつものハイキングだろ？」
だがシェスタは激しく首を振るとこう続けた。
「も、森に、悪魔が現れたそうなの……教団騎士の方々が討伐に出て下さってるけど、心配で……だから、ネロ、貴方にも様子を見に行って欲しいのよ……」
荒い息のせいで言葉を途絶え途絶えにさせながらシェスタは抱いている俺の肩にきつく指を喰い込ませた。常日頃俺の騎士としてのあり方に文句を言う割には、こういう時に頼ってくる。
ムシのいい頼みだとは思いつつも、キリエが関わっているのなら無下に断るわけにもいかなか

った。

「……分かった。すぐ行くよ」

「……ありがとう、ネロ。子供達をお願いね。あの子達に何かあったら、私は……！」

口やかましくはあるが、それでも彼女が孤児院の子供達を心から愛している事は俺もよく知っている。

俺は仕上げの終わっていないレリーフもそのままに、ブルーローズを懐にしまい、工房の片隅に立て掛けてあるレッドクイーンを担いだ。教団から支給されている対悪魔用の剣だが、ブルーローズ同様に様々な改造をした結果、これも既に原形を留めていない。

「気を付けて、ネロ……貴方に神の御加護があらん事を」

出口に向けて歩き出した俺の背に、シェスタがそう呟く。

本当に神がいるなら、俺達がいる意味なんてないだろうに、と、そう思いながら俺はミティスの森に急いだ。

森に悪魔が出現したという報告は、どうやら街中に知れ渡っているようだった。いつもなら人が出歩く商業区にも、人影ひとつ見当たらなかった。市街地と森とは結構な距離があるが、それでも悪魔の運動能力を考えればいつ被害が街に及ばないとも限らない。皆、経験からそれを知っているから、悪魔が出たとなれば家に引きこもってしまう。

できるだけ急ぎたい身にとっては、それは好都合だった。人を押し分けながら走る必要もな

いし、少々無茶をして家屋の屋根を走ってもお咎めがない。結構な話だ。

屋根の上にいれば市街地の様子をある程度一望できる。

おかげで、迷う事もなく悪魔達を発見できた。

懸念していた通り、悪魔は既に森を抜けて市街地に到達していたのだ。

だが距離が遠く、銃弾も届くかどうかは危うい。俺は屋根を伝い、その現場へと急いだ。

人気のない市街地に、聞き慣れた起動音が何度となく響いていた。

教団騎士は皆、対悪魔用に生み出された剣を持っている。

俺のレッドクイーンもそうだが、その剣には「イクシード」と呼ばれる、剣撃の速度を向上させるための推進剤噴射装置が備え付けられている。剣の柄がバイクのアクセルのような構造になっており、その柄を捻る事で装置が燃焼、そして柄の根元に併設されたクラッチレバーを握る事で推進剤が噴射されるのだ。

その際、イクシードはバイクのエンジン音にも似た轟音を発する。俺の耳に届く音は、まさにその音だった。俺のいる場所からは見えないが、おそらく派遣された教団騎士もすぐ側にいるのだ。

キリエ達は、まだ森の中なのか。それとも騎士団と一緒にいるのか。

それを確認できないまま、焦りだけが募った。

レッドクイーンを右手で担いだまま、左手で銃の撃鉄を起こす。

イクシードの音と合わせて、子供の悲鳴らしき声も聞こえてきた事で、俺の心に安堵と、より一層の焦燥が生まれた。少なくともキリエ達もこの市街地にまで戻ってきてはいる。だがその安否までは分からない。

屋根から屋根を伝い、先を急ぐと、ようやく彼らの姿を目にする事ができた。

三人の教団騎士。そして彼らに守られるように押し固まっている子供達と、キリエの姿。

その数を目で追う。子供達は全員無事のようだった。キリエも怪我をしている様子はない。

一方で、教団騎士の一人は既に傷付いており、構える剣先がだらしなく下がっている。白い騎士服の肩口は、赤く染まっていた。顔は騎士服のフードのせいで分からないが、背格好から、おそらくジョシュだろうと思った。教団騎士の中でも相当に小柄なだけに、フードを被っていてもすぐにそれと分かる。となると、この騎士団のメンバーはジョシュ、サガン、トニオのチームだろう。俺と同期入団の一隊だ。あまり気に食わない連中ではあるが、助けないというわけにもいかない。

周囲を取り囲んでいたのは、スケアクロウと呼ばれている、ズダ袋に虫が詰まったような悪魔だった。経験上、一体や二体ならどうって事はない連中だが、ジョシュ達を囲んでいるのは尋常な数ではなかった。少なく見積もっても三十はいる。たかだか三人のチームで討伐するようなレベルじゃない。俺がこれまで見聞きしてきた中でも、これだけの悪魔が同時に出現したなんて事例はなかった。

取り囲むスケアクロウのうちの一体が、ジョシュ達の方に向かって飛び掛かろうとしていた。サガンとトニオは前面のスケアクロウの相手に気を取られている。このままでは子供達に被害が及ぶのは明白だった。

「ジョシュ！　伏せろ！」

着地を待っている暇はない。空中で落下しながら、俺は銃を構えて叫んだ。

俺の声に気付いたジョシュが、俺の方に視線を向け、そして慌てたように頭を下げる。そのおかげで、スケアクロウへの射線が確保できた。

引鉄を引き、発射の反動を殺しつつ左手を大きく振り上げる。

ほぼ同時に発射された二発の弾丸は、瞬く間に悪魔に命中し、スケアクロウの身体を大きく後方に吹き飛ばした。

直後、俺は着地し、キリエ達の元に駆け寄る。

「ネロ！　どうして来た！」

チームリーダーのトニオがスケアクロウを斬り飛ばした後でそう叫んだ。その最中にも、他のスケアクロウ達が詰め寄ってきている。

「そんな事言ってる場合じゃないだろ！　こっちの奴は俺が相手する！　お前らはそっちを頼む！」

叫びつつ、子供達を中心にトニオらとは反対方向に位置取った。

「ネロ……」

キリエが俺の名を呼ぶが、あまり会話をしている余裕はなかった。

「キリエ、下がってろ！　すぐに終わらせる！　そこを動くなよ！」

そう忠告して、俺は踏み込みながら、背中に担ぐレッドクイーンの柄を捻った。轟音と震動。

剣撃の威力を向上させるためのイクシードだが、一般的な騎士剣（カリバーンと呼ばれている）のイクシードはほんの僅かな推進剤しか噴射させる事はできない。あまりに多くの推進剤を噴射させれば文字通り剣そのものに振り回され、戦いどころではなくなるからだ。

だが俺のレッドクイーンはその推進剤の噴射量を限界まで高めてあった。それでも制御できるという自負があったからだ。実際、多少のコツはいるが過剰な推進剤にも負けずにレッドクイーンを扱う事ができる。だが想定外の噴射量のせいか、噴射口から炎が一緒に漏れ出すのが難だ。周囲に人がいるとうっかりその炎に巻き込んで火傷でもさせかねない。

そういう意味では、キリエ達がいるという状況でレッドクイーンを使うのは好ましいとは言えない。だが銃で同時に相手できる数には限界がある。一気に片付けるには、まず剣で押し切る必要があった。

走りながら、向かってくる一体を蹴り飛ばす。次いでもう一体に弾丸をくれてやった。

背後に視線を向けたが、まだ距離に不安があった。レッドクイーンの炎の量は正直半端じゃない。もう少し距離を空けておきたい。

柄を捻り、イクシードのさらなる燃焼を促しながら、俺は前方のスケアクロウの身体を踏み台にして跳んだ。その先には十数体のスケアクロウが連なっている。その中心に飛び込むと、スケアクロウ達は一斉に俺の方を振り返った。

「それでいい……」

微笑み、呟く。こっちを見てればいい。お前らがキリエ達に注意を向ける必要なんて何ひとつない。

イクシードのクラッチを握りながら、俺は横薙ぎにレッドクイーンを振るった。スケアクロウの柔らかい身体に刃がめり込む感触を刃越しに感じながら、そのままスケアクロウの身体を吹き飛ばさぬよう、搦め捕るようにして剣を振り回す。

吹き飛んだスケアクロウをキリエ達に激突させるわけにはいかない。

普通の剣撃ならせいぜい二体か三体斬れば勢いが止まるだろうが、レッドクイーンの改造イクシードなら、十数体を相手にしても一撃が劣化する事はない。

「おネンネしてやがれッ！」

叫びつつ、剣を振るいながらさらに柄を捻ると、燃焼を促されたイクシードが炎と共に大量の推進剤を噴射した。

その勢いで、一気に周囲十体ばかりのスケアクロウを、キリエ達のいない方向に吹き飛ばす。

その勢いを利用して一回転し、さらにもう数体のスケアクロウに斬り付けた。穀物の袋に刃を

突き立てたような感触と共に、斬り付けたスケアクロウが黒い霧を噴き上げて倒れる。それが奴らの血だ。薄汚い魔界の蟲には似合いの色だ。

キリエに目を送ると、子供達を守る様にしっかりとその身体を抱いていた。こんな時でも自分を犠牲にして他者を守ろうとする彼女には頭が下がる。それが彼女の美点ではあるが、その性質故にいつか酷く傷付くのではないかと、それが不安でならなかった。

まだ残っている数体のスケアクロウを銃で処理し、キリエ達の方に戻る。

ジョシュ達も、悪魔の始末を終えていた。

「……これで全部か？」

俺が尋ねると、トニオはフードを外しながら、首を傾げる。

「さあな……数を聞かされてたわけじゃない。それより、何でお前がここにいる？」

騎士の中でも特に生真面目なトニオは、俺の事を煙たがっている。それを知っているから普段は別に近付きもしないし、何か言われたところで無視を決め込んでいるのだが、流石に手助けをした相手に言う台詞とは思えず、苛付いた。

「散歩してただけだ」

肩を竦めてそう答えると、トニオは舌打ちをした。

「……お前がいなくても、俺達だけで充分戦えた」

「かもな。だけどこの場にはキリエも子供達もいたんだ。見かけたら手助けくらいするさ」

そう答えたものの、トニオは納得しかねるという様子で俺から目を逸らせた。

俺だって別に、トニオ達の邪魔をしたかったわけじゃない。ただキリエ達を守りたかっただけだ。だがおそらくトニオの目には、俺のそんな行動は手柄を横取りする行為にしか映らないのだろう。俺はもう一度、肩を竦めた。教団騎士の中には、トニオのように名誉欲に凝り固まった人間は少なくない。そういう連中の頭の中は、皆、自分が後世に語り継がれるような騎士になるという事で一杯だ。

正直、下らないと思う。

魔剣士スパーダの伝説だの何だの、俺はあんなお伽話にはまるで興味はない。だが、トニオにしろ他の騎士にしろ、皆、その伝説を信じ、スパーダを神と崇めているはずだ。だとしたら人間を救うために戦ったという魔剣士スパーダのその心くらいは汲み取ってしかるべきだろう。名誉だの手柄だのを気にするよりも前に、キリエに優しい言葉のひとつもかけてやるべきだ。

俺とトニオの間に流れる険悪な空気に、キリエは少しバツが悪そうな顔をしていた。

俺はそんなキリエの肩を叩き、

「行こう」

と言った。

キリエはトニオ達に頭を下げ、一度は子供達を連れて俺の後を追ってきたが、やがてまた振り返り、傷付いているジョシュの元へと駆けていった。

「……大丈夫、ですか？」
血に染まったジョシュの騎士服に目をやりながら、キリエは自分の服の袖を引き裂いた。
俺は溜め息を吐くより他なかった。
キリエはいつだってそうだ。いつだって、他人の心配ばかりをしている。まるで自分なんてものがないみたいに、他人の事ばかりを気にかけて、優しく振る舞う。
彼女は女神だな、と、かつて教団騎士の誰かが言っていたのを耳にした事がある。騎士長クレドの妹であるキリエは、教団騎士の連中にも広く知られた存在だった。時折、騎士達に差し入れをしたり、怪我をした者を見舞ったりしていたからだ。
「ごめんなさい……私達のせいで怪我をさせてしまって……」
キリエは言いながら、引き裂いた袖でジョシュの肩口を縛った。ジョシュは少し気恥ずかしそうにしながらも、されるがままにしている。
と、キリエの足元で何かがぼんやりと光るのが見えた。
それは——魔法陣だった。
悪魔が人間界に姿を現すための扉。だがそれは自然に発生するような代物じゃない。魔力の満ちた空間や、術者の協力でもない限りは、そんなものが発生するはずはなかった。
そう考えたせいで、一瞬の判断が遅れた。
キリエの背後から出現したのは、スケアクロウではなかった。それは、これまでに見た事の

ない、まるでトカゲのような容貌をしていた。だが二本足で立ち、兜のようなものを被り、腕には丸い盾を備えている。一目で、スケアクロウなどとは比べ物にならない高位の悪魔であると分かった。
「キリエ！　逃げろ！」
叫びながら地面を蹴る。
トカゲのようなその悪魔は、出現するや耳を覆いたくなるような咆哮を上げる。
キリエは、怯え切った様子で身を竦ませていた。
悪魔に気付いたジョシュが慌てたように剣を構え、悪魔に斬りかかった。だが既に傷を負っているジョシュの一撃はいとも容易く悪魔の楯に阻まれる。悪魔はジョシュを鋭い爪で吹き飛ばした。ジョシュの苦悶の声と共に血飛沫が上がり、それがキリエの頬を汚す。それでもなお、キリエはその場から身動きできずに震えていた。
トカゲがキリエの方を振り向く。その爪が、一匹の生き物のように蠢いていた。
「キリエ！」
銃は使えなかった。キリエと奴の距離があまりに近過ぎる。弾丸を二発放つだけに、どれだけ精密な射撃でもキリエに当たらないとは言い切れない。かと言って、このままの速度で駆けていたのでは間に合わない。
俺は背負っていたレッドクイーンの柄を一気に限界まで捻った。噴射口を進路とは逆に向け

て一気に開放する。本来なら剣撃を加速させるその装置で、俺自身をも加速させるしかない。多少無茶な使い方だが、それしか方法はなかった。

「キリエ！」

再度叫び、クラッチレバーを捻じ込むように握る。噴き出した推進剤が駆けている俺にさらなる加速を促した。

半ば跳躍のように一気に前方、キリエの元に向かう。細かい位置調整はできない。だが自分の体が盾にさえなればいい。そう思った。

「ネロ！」

炎をまとうような形で俺がキリエと悪魔の間に割り込むのと、悪魔の爪が振り下ろされるのとは、ほぼ同時の出来事だった。突進の勢いを制御しきれなかった俺は、その爪を剣で受け止める事もできず、右腕にまともに食らう結果になった。鋭い痛みが走る。

事態に気付いたキリエが叫びを上げる。俺は目の前の悪魔を蹴り飛ばす。

「キリエ！　いいから早く行け！　子供達を連れて逃げろ！」

吹き飛びながらも空中で体を反転させすぐさま体勢を整えた悪魔に、俺は銃弾を見舞った。

二発同時に射出された弾丸が悪魔に向かって飛んでいく。だがその二発を、悪魔は盾で防いだ。金属質の物質の衝突で火花が上がる。相当の強度を持った材質でできているらしい。一発二発の弾丸で砕けるような代物ではなさそうだった。

俺はレッドクイーンのイクシードを燃焼させようと柄を捻り上げた。だが何の反応もない。先ほどの無茶な起動のせいで内部が焼け付いてしまったのかもしれない。

舌打ちをし、そのまま悪魔に向かって突進する。

だがイクシードの恩恵を得られない上に、剣を振るう右腕は傷付いている。そんな中途半端な状態で繰り出す斬撃が、その悪魔に通用するはずもなかった。当然のように盾で受け止められ、剣を弾き上げられてしまう。体勢を崩したところに悪魔が鋭い爪による一撃を繰り出してきたが、どうにかステップバックしてそれをかわした。

再び悪魔が吼える。耳障りな声だ。そう何度も聞きたいもんじゃない。

振り返ると、ジョシュがキリエや子供達を連れて遠くの方へ走り去っているところだった。だがサガンとトニオの二人はまだ残っている。

「サガン！　何してる！　お前らも子供達と一緒に行け！」

俺の叫びに、サガンとトニオが傍まで駆け寄ってくる。

「……俺に命令するな、ネロ。この任務は俺のチームが担当してる。お前の指図は受けない」

「そんな事言ってる場合か！　もしあっちにも悪魔が出たらどうする！　ジョシュ一人でどうにかなるってのか！」

その時だった。唸り声を上げた悪魔が大きく仰け反ったのだ。咄嗟に俺達は身構えた。何か仕掛けてくるのは明白だったからだ。

だが、悪魔はその巨大な爪を俺達ではなく、逃げているキリエ達の方に向けた。

「まずい！」

俺とサガンは前方の悪魔に向け、トニオは後方のジョシュ達に向けて駆け出していた。

悪魔の叫びと共に、かざされていた爪が弾丸のように射出される。俺はすぐさま剣を振るったが、飛び行く爪の一片を叩き落とせたに過ぎなかった。

サガンがイクシードの轟音を立てながら悪魔に斬り込んでいく。

しかし悪魔の盾に阻まれ、すぐに弾き飛ばされる格好になった。

「ジョシュ！　気を付けろ！」

トニオが走りながら叫ぶと、ジョシュは慌てたように振り返った。悪魔の爪は既にキリエ達まであと数メートルというところまで迫っていた。

異状に気付いたらしいジョシュは剣を構えようとしたが、おそらくは怪我のせいだろう、よろめいてしまっていた。このままでは悪魔の射出した爪が子供達を襲ってしまう――そう思った瞬間、動いたのはキリエだった。キリエは覆い被さるようにして子供達を庇ったのだ。

幸いな事に――そう言うべきなのだろうか。悪魔の爪はキリエの肩口を掠めただけに終わった。しかし残りの爪は、無残にもよろめいていたジョシュの身体に突き刺さった。ジョシュの身体が大きく揺らぎ、そして後ろに倒れる。

「ジョシュッ！」

トニオが愕然としたように足を止める。

その間に、俺とサガンは二人がかりでどうにか悪魔を押さえ込んでいた。

押さえ込んだ悪魔に、俺は何度も銃弾を見舞った。

そしてどうにか、その悪魔を打ち倒す事ができた。

それが、一カ月前だ。



教団は、この事件に関して全てを隠蔽する事を決めた。

三人の教団騎士が派遣されておきながら死者を出し、そして民間人にまで被害が及んだなどという事実は、教団の威光を揺るがしかねないという事なのだろう。

しかし幼くはあっても子供達という目撃者がいる以上、全てをなかった事にする事はできない。だから事件はこう偽装された。

たまたまキリエと共にいた俺が、たまたま現れた悪魔をたまたま打ち倒した。その際、俺もキリエも負傷したが、命に別状はなく、大きな問題はなかった。教団騎士の派遣は間に合わず、当然ジョシュという死者も出なかった、と。

ジョシュが俺と同じ孤児院の出身だからこそできた措置だ。身寄りがない人間が唐突に姿を

消したところで、誰も咎めはしない。

俺もキリエも、サガンもトニオも、事件について口外する事を禁止された。無論、子供達にもよく言い聞かせたようだった。キリエが覆い被さる格好になっていた事で、子供達はジョシュの死の様を見ていなかった事も、偶然ではあったが幸いしたというところだろう。

だがそれは全て教団にとって都合がいいというだけの話に過ぎない。

ジョシュは死んだ。そしてキリエも傷付いた。その事実までは消えない。

どれだけ体裁を取り繕おうと、どれだけ嘘を重ねようと、教団騎士三名では太刀打ちできないような悪魔が現れた事や、俺がキリエを守り切れなかった事は事実なのだ。

もっと力があれば。そう思った。

それはきっとサガンやトニオにとっても同じだったはずだ。

いつもなら俺に憎まれ口を叩くはずの奴らも、事件の後は何も言わなくなり、過剰なまでに訓練に精を出していた。最近は顔を合わせていないからよく分からないが、おそらく今でもそうなのだろうと思う。

しかしそんなあいつらでも、今日ばかりは儀礼用の騎士服でおめかしをして祭に参加するのに違いない。あいつらは俺と違って真面目だ。

右腕に包帯がしっかりと巻かれているのを確認した後で、俺は部屋を出た。

キリエの言いつけ通り、我刀院へと足を向ける。

我刀院は、十数年前まで教団本部として使用されていた建物だ。だが新たな本部が建造された事でその役割を終え、今は教団騎士の詰所として用いられている。

埃臭い仰々しい木製の扉を押し開けると、我刀院の中はひっそりと静まり返っていた。人の気配が全くない。日頃この場に集っている騎士達は皆、魔剣祭会場である歌劇場へと移動をしているのだろう。

木製の階段が、体重をかけるたびに悲鳴を上げるように軋む。

毎度毎度、キリエの兄――教団騎士の長であるクレドに呼び出されるとこの階段を上らされる。うっかり踏み抜かないように気を使いながら上るのは案外難儀なものだ。

最上階の騎士長私室にノックをして足を踏み入れると、席に着いていたクレドは俺の姿を見るなり、

「……遅かったな」

と言った。

「寝坊したもんでね」

答えながらクレドと向かい合うように席に着くと、クレドは一度立ち上がり、俺が開け放したままにしていた扉を静かに閉めた。おそらく、人には聞かれたくない類の話なのだろう。つまり、また「汚れ仕事」の話という事だ。

「……また森から悪魔が現れた」

元の席には戻らぬまま、俺の背後でクレドがそう漏らす。その言葉に、俺は振り返った。
「また、って……一体何回目なんだよ？　ちゃんと原因は調べてるのか？　いくらなんでも最近多過ぎる」
一カ月前、俺が傷を負いジョシュが死んだあの日を境に、ミティスの森から悪魔が現れたという報告は後を絶たなかった。これまでにもそんな事件がなかったわけじゃない。しかし最近のその頻度は度を越えていた。
「私とて、調査局の怠慢を看過しているわけではない。だが今は眼前の問題を処理するべき時だ……分かるな、ネロ？」
「速やかに悪魔をブチ殺せ、ってんだろ？　分かってるさ……分かってる」
傍目には怪我人の俺に悪魔退治をしろというのだから、まったく人遣いが荒い事だ。だがクレドが説明せずとも、事情は分かっている。今日は魔剣祭。主要な騎士団のメンバーは皆、会場の警護に当たっていて人手が足りないのだ。それに、警護の人手を割いて騎士団を派遣すれば、騎士団の人数の足らぬ事に気付いた市民の不安を煽る事にもなりかねない。
結局、こんな日にまでいつも通りの「汚れ仕事」を頼まれるわけだ。キリエに今日は参加すると約束したものの、その約束が守れるかどうかも怪しい気配になってきた。
包帯で覆われた俺の右腕を一瞥したクレドは、あまり感情の籠っていない声で、

「怪我は、大丈夫か？」
と尋ねてくる。
「大丈夫じゃなかったら、誰か代わってくれるのかい？」
俺が皮肉っぽくそう答えると、クレドは目を伏せた。
「レッドクイーンはまだ改修中だ。予備のカリバーンが必要なら用意させよう」
レッドクイーンは一カ月前の悪魔退治の際、内燃機関が焼け付いてしまい使い物にならなくなっていた。それで、技術局という部署に回して修理を依頼しているのだが、レッドクイーンは他の騎士剣と造りが異なっており、部品も特注になるためにまだその修理が終わってはいないのだ。
「カリバーンはいらない。アレならスケアクロウの足でも千切って使った方がマシだ」
そう答えた後で、俺はクレドが帯びている剣に目を落とし、
「どうせならそっちのデュランダルを貸してくれた方が有り難いな」
と告げた。
クレドが俺を睨む。
ふざけた事を言うな、という顔だ。
デュランダルは騎士長であるクレドしか所持する事を許されていない、特別な剣だ。剣という物の神性を重んじる魔剣教団にあって、自分だけの剣を拝領される程、名誉な事はない。人

一倍敬虔なクレドがデュランダルをいかに大切にしているかは言わずもがなだ。我ながら、趣味の悪いジョークだった。
「冗談だよ。そんなに睨むなよ……」
そう誤魔化して、俺は頭を掻いた。
「ネロ……分かっていると思うが、銃は使うなよ」
念を押すように、クレドが口を開く。
「それも分かってる……銃声はヤバイって言いたいんだろ？　俺だってキリエの歌声に下らないコーラス入れる程、馬鹿じゃないさ」
そうでなくとも、魔剣祭の最中に銃声が響けば問題になるのだ。銃を使うなと釘を刺されるのは分かり切っていた事だった。
「右腕は怪我で銃も使わずに悪魔退治か……楽じゃないな」
ぼやきはしたものの、それも冗談のつもりだった。もはやクレドからの無理難題はいつもの事だ。だがクレドは何故かいつもとは少し違った様子で、
「……すまん」
と呟いた。俺はそれ以上は何も言わなかった。クレドはクレドで、一カ月前の事を引きずっているのかもしれない。教団騎士に死者が出た上に、それを隠蔽せねばならなかった事は、クレドにとっても決して納得のできる結果ではなかったはずだ。幼い頃から付き合いがあるだけ

に、クレドのその心情は何となく分かる。
「じゃあ、行ってくる」
独り言のようにそう告げて、俺は我刀院を後にした。
住民達は既に皆が歌劇場へと移動を始めていた。その人の波とすれ違いながら、俺はカルスの店へ向かっていた。森の悪魔討伐の前に、立ち寄っておく必要があったからだ。
おそらくは俺が来るのを待っていたのだろう、半分程閉められたシャッター越しに俺の姿に気付いたカルスは、肩を震わせ大きく溜め息を吐いた。
「勘弁してくれよ。絶対取りに来るっていうから待ってたのに、いつまで経っても来やしない。危うく魔剣祭に出られないところだ」
まあ、カルスの怒りはもっともだ。時計を見ると約束していた時刻を一時間近く過ぎていた。
「悪い……次は気を付ける」
小さく頭を下げると、カルスは不躾に小さな箱を俺に手渡した。俺が頼んでいた物だ。代金は既に支払ってある。
「お前が珍しく贈り物するなんて言うから親身になったのに……魔剣祭には遅れるなよ？　キリエの出番はすぐだぞ？」
「分かってる。助かったよ」
受け取った物を懐にしまい、俺は森の方へ進路を向ける。振り返ると、カルスは訝しげに俺

を見ていた。歌劇場と森とは正反対の方向だ。怪しまれるのも無理はないが、あれこれ誤魔化す必要も時間もない。

森に足を踏み入れると、右腕が疼くのを感じた。近くに悪魔が存在している。そういう時、必ず俺の右腕は疼くのだ。一ヵ月前から、そうなっていた。理由は分からない。やはりこの右腕は、悪魔に取り憑かれているのかもしれない。

あまり時間をかけるわけにはいかなかった。

手早く終わらせれば、キリエの歌にはまだ間に合う。

俺は右腕を覆う包帯を取り去り、コートのポケットに押し込んだ。

木々の隙間から、スケアクロウがのそのそと姿を現してくる。

二体、三体……。それで全部だとしたら、思っていたよりも数は多くない。

「最初ッから全開で行くぜ……チンタラやってる暇はないからな」

呟き、俺は右腕をスケアクロウの一体に向かって突き出す。

ぼんやりと右腕が光を放った。

そして右腕から、もうひとつ、青白い光で構成された別の右腕が伸びていく。

悪魔の腕。

俺はそれをそう呼んでいた。

一ヵ月前、悪魔に右腕を傷付けられたあの日から、俺の右腕は悪魔のような形状に姿を変えてしまった。そして、そんな奇妙な力までもが宿っていた。

最初からそれを扱えたわけじゃない。

だがクレドから命じられる「汚れ仕事」をこなしていくうちに、俺は自分の右腕に宿る力を知った。原因も由来も分からぬまま。

悪魔の腕がスケアクロウの脚を摑む。その光る腕は、俺の意のままに操る事ができる。

摑んだスケアクロウを振り回すようにして、もう一体のスケアクロウにぶつけてやると、二体のスケアクロウは激突の衝撃に黒い煙を吐きながら崩れ去った。

背後には既にもう一体のスケアクロウが飛び掛かってきている。

慌てず振り返り、下から上へ右腕で掬うようにスケアクロウの胴体を摑んだ。俺に摑まれたスケアクロウは束縛から逃れようと必死でもがいていたが、悪魔の腕の五指はしっかりと喰い込んでスケアクロウを逃さない。

「失せやがれ！」

そのままスケアクロウの身体を地面に叩き付けると、ズダ袋の中の蟲どもが不快な鳴き声を上げ、同時に、黒い煙が噴き上がる。

俺は右腕を軽く振り、それから周囲を見回した。

他に気配はない。右腕の疼きも止まっている。

「呆気ねェな……」

右腕に包帯を巻く。これならどうにかキリエの出番までには会場に辿り着けそうだ。
俺は街に向けて駆け出した。

周囲を高い城砦で覆われた市街地の中央部には中世の雰囲気を色濃く残す城が建っている。フォルトゥナ城と呼ばれるその城は、かつて魔剣士スパーダが城主としてフォルトゥナ一帯を治めていた頃の居城であったと言われていた。
城の内部は当時の雰囲気をそのままに、今では美術館のような役割をなしており、市民は自由に出入りを許されている。
しかしそのフォルトゥナ城の地下には、一般市民は知らぬ空間が存在していた。
古びた他の空間とは違い、近代的な材質、設計によって造られているその一角は、近世になって魔剣教団が増築を施したものであり、現在は「技術局」と呼ばれる、悪魔に対抗する兵器などを開発する部署に宛がわれていた。
その技術局管轄区域の一室に、長身を小さく折り畳むように屈めながらメモを取っている男がいる。技術局を統括する長、アグナスであった。
アグナスは、教団の祭事の中でも特に重要な魔剣祭の日でありながら会場に足を向ける事も

なく、己の研究に執心していたが、それは彼が不信心者だからではない。むしろ彼は誰よりも教団の教義を愛し、現教皇サンクトゥスの威光を讃えている人間であった。そしてそれ故に、彼は今、己を悩ませている問題を一刻も早く解決する必要があったのである。
「……分からん。何が足りんのだ？」
呟き、彼が目を向けた先には、巨大なガラス管のような物が置かれている。そしてその内部では、折れた日本刀が宙に浮いていた。それが目下、彼を悩ませている存在だった。
その刀は、閻魔刀と呼ばれていた。魔剣士スパーダが愛用していた魔剣のひとつであったと言われている。
アグナスは、一年前、それをフォルトゥナ郊外の浜辺で発見した。
古い文献にかろうじてその名前を見付ける事ができる程度の存在でしかない閻魔刀を一目でそれと理解できたのは、彼が技術局という部署の人間であったからに他ならない。悪魔に対抗するために日々研究を積み重ねていた彼の最大の目標は「魔剣」を生み出す事であり、その研究の過程で閻魔刀の存在を知っていたのは道理であった。
スパーダがフォルトゥナを去り二千年という歳月が経過し、スパーダが所有していた様々な魔剣の行方も何処へかと消えてしまっていただけに、閻魔刀の発見はアグナスにとって僥倖と言っても良かった。図らずも偶然によって、焦がれていた魔剣を己の手中に収める事ができたのである。

しかしいくつかの問題はあった。
閻魔刀が折れてしまっていた事だ。
魔剣と言っても、様々な種類がある。
それ自体が悪魔と呼ばれる生命体であるもの。これはその悪魔が死んでしまわない限り、多少の傷や破損は修復する。
もうひとつは、魔力を有したただの物質でしかないもの。これは物質であるから、傷や破損を人の手で修復する事も可能である。
しかし、閻魔刀はそのどちらでもなかった。
アグナスは折れたこの魔剣を再三、様々な手法でもって修復を試みているのである。しかし依然として閻魔刀は修復の兆しを見せない。
「やはりこれ自体が悪魔だったという事か……？」
閻魔刀が悪魔の変化した魔剣であるのならば、修復をせぬ事にも説明は付く。しかしそういった場合、その破片や断片が有している魔力は失われるはずであった。それはアグナスのこれまでの研究でも明らかなのである。だが閻魔刀は完全に両断された形になってなお、強い魔力を有している。それがアグナスを混乱させているのだ。
「何だ……な、ななな何が不満だ！」
興奮すると呂律が回らなくなるアグナスは、何度も言葉を閊えさせながら手にしていたメモ

をガラス管に叩き付けた。メモ帳が空しく床に落ちる。
「忌々しい……これさえ復元できれば、計画が実現するというのに……」
そこまで口にしたところで、アグナスは人の気配に気付いた。
部屋の入り口に、女が立っている。
「グ、グロリアか……何の用だ」
グロリアと呼ばれた女は、小さく微笑み、アグナスのメモ帳を拾ってやると、アグナスに手渡した。アグナスは忌々しそうにそれを受け取る。
「随分、ご機嫌斜めね」
グロリアはそう言ってまた微笑んだ。
アグナスはこの女が嫌いであった。元々、女という生物自体があまり好きではない。その上に、この女は何とも破廉恥な格好をしている。胸元や背中、太腿、の各所に深いスリットの入ったロングドレス。何のために服を着ているのかを問い質したくなる。そういういかにも女を武器にしていると言わんばかりの様に、見ていて吐き気すら催すのだ。
「研究は順調？」
グロリアは閻魔刀の方を見てそう言った。
「み、みみみ見ての通りだ！　そう急かすな！」
そして何より、アグナスはこうしたグロリアの態度が気に入らない。人を見下している。

だが、たかだか一カ月前に教団に入信したこの新参者が、アグナスよりも立場が上のような振る舞いをするのには、勿論、理由がある。

一カ月前、グロリアは唐突にフォルトゥナに現れた。

元来、フォルトゥナという土地は外部から来た者に排他的な気風を持っている。それは魔剣教団にあっても同じだ。教団に入信するためには生まれた土地や家柄を強く重んじる。だからこそ、明らかに外部の人間であるグロリアが訪ねてきた上に、教皇へのお目通りを願ったところで本来ならば許されるはずもない。

だがグロリアはある物を持参していた。

魔剣スパーダ。

魔剣士スパーダの愛剣にして、彼の力の象徴たる魔剣。

彼女は何故か、それを手にしていたのだ。

グロリアによれば、彼女はトレジャーハンターのような事を生業にしているという事であった。そして偶然魔剣スパーダを手に入れ、魔剣教団の存在を知り、教皇に進呈したいと考えた、というのである。

教皇がそれを拒むはずもなかった。

魔剣士スパーダを神と崇める教団にとって、魔剣スパーダこそは聖なる遺物。それによって教団の威光はいや増し、かねての計画もより実現へと近付く。

グロリアは何の見返りも求めなかった。

ただ、こう言ったのだ。

「願わくは、私も教皇様のお側で、教皇様の理想の世界を見たく存じます」

今や彼女が教団幹部の一人として大きな顔をしているのは、そういう理由からだった。事情を知らぬ若い教団騎士あたりは、突然現れたグロリアの存在に、もっと別の事情を――例えば教皇の愛人であるとか――考えているらしいが、そんな事はアグナスにとってどうでもいい。

何より我慢できないのは、こんな女が魔剣スパーダを手に入れたというその事実であった。

神の剣。世界最強の魔剣。かの偉大なるスパーダが振るったという伝説の魔剣スパーダに、こんな汚らわしい女が一度でも触れたというだけで、アグナスは苛立ってしまう。

「地獄門はどうなの？」

再びグロリアが問うてくる。

アグナスは苛立ちを抑え切れず、舌を閊えさせながら、

「そ、そそそそっちは順調だ！　もも問題ない！」

そう答えるだけで精一杯だった。

「そう……でもいくら順調でも、あの小さな門ではね……」

もはや言葉も出ない。

地獄門とは、アグナスが設計した空間湾曲装置である。

巨大な板状のそれは、起動する事で空間を歪め、一時的に人間界と魔界とを繋ぐ。

様々な事情で悪魔を必要とするアグナスにとっては夢のような装置であった。これまでにも小型の地獄門はいくつか設計してきたが、現在稼働している三基の地獄門は、限りなくオリジナルに近い安定性を有している。

しかしそれもまたグロリアによる恩恵である事が、アグナスには歯痒い。

グロリアは魔剣スパーダと共にいくつかの魔力を有した武具――魔具と呼ばれている――をも持参していたのだ。それら魔具を起動の鍵にする事で、今の地獄門は安定した状態を保てているのである。

「頑張って閻魔刀を復元させる事ね。それがなければオリジナルは動かないのは分かってるでしょう？」

グロリアはそれだけを言い残し、去って行った。

アグナスは再びメモ帳をガラス管に叩き付けた。

「め、めめ雌狐め！　調子に乗りおって！」

しかしグロリアの言葉に誤りはない。

地獄門にはオリジナルとも言える存在がある。かつて人間界と魔界は常時繋がっていた。その出入り口として使われていたのが、オリジナルの地獄門だ。その巨大さは、アグナスが設計したフェイクの地獄門などとは比べ物にならない。そしてその大地獄門を起動するためには、

どうしても閻魔刀が必要だった。

魔剣士スパーダが魔界と人間界を分断するために使ったと言われる閻魔刀こそが、大地獄門を再起動させるための鍵なのだ。

アグナスは舌打ちをし、それから大きく溜め息を吐いて自分が投げ付けたメモを拾い上げた。



STAGE 03



道中、おそらくは森から這い出してきていたのだろう、市街地でスケアクロウの一群と遭遇したが、特に問題はなかった。しいて言えば、場所的に誰かに目撃されるかもしれないという危惧があった事くらいだ。おかげで、悪魔の腕を使うわけにはいかなかった。魔剣祭の日に、街をうろつくような不信心者は俺くらいのものだとは思ったが、それでも念を入れておくに越した事はない。

息を切らせつつも、どうにか会場に辿り着くと、キリエが聖歌の終盤、最も盛り上がる部分を高らかに歌い上げているところだった。全てを見届けられなかったのは残念だが、それでもどうにかキリエの出番までに間に合った。これでどうにか言い訳も立つ。

椅子の背もたれに体重を預けキリエを見守っていると、歌い終えたキリエは俺を一瞥し、少し複雑そうな笑みを浮かべた。たぶん、数分前に俺がいなかった事には気付いているのだろう。

割れんばかりの観衆の拍手の中、キリエが一礼し、舞台上を去っていく。

出番を終えた後、キリエは俺の隣席に座り、後は他の観衆と同じように魔剣祭を見届けると聞いていた。俺は隣席にカルスの店で注文した品をそっと置き、首に掛けていたヘッドフォンを耳に宛がう。

舞台上では司会進行を務める男が教皇様の御登場を告げていたが、それには全く興味がなかった。俺はただ、キリエとの約束を守れればそれでいいし、御高承なお説教を聞きたいとも思わない。

キリエの座る席とは反対側に位置している男が、俺に怪訝そうな表情を何度か向けていた。会場にいる人間は皆、敬虔な信徒達だ。教皇様のお説教も聴かずにロックなんて聴いてる人間は、彼からすれば異世界の人間としか思えないのかもしれない。

だが俺は、魔剣教団の教えが世界を救うなんて戯言は、どうしても信じる気にはなれないのだ。

キリエやクレドは俺と違って敬虔な信徒だ。そして彼らの両親もまた、そうだった。純真無垢に神である魔剣士スパーダを信じ、その救いの手が人々に向けられる事を疑ってもいなかった。

キリエやクレドが、俺が預けられていた孤児院によく顔を出していたのも、そういった背景がある。彼らの両親は、神の代替者として恵まれぬ孤児達に救いの手を差し伸べていた。キリエもクレドも、その両親の手伝いをし、そうして俺なんかと知り合いになったわけだ。

俺はどういうわけか、キリエとクレドの両親に特に気に入られていた。俺の、フォルトゥナには珍しい銀色がかった髪がそうさせたらしい。伝承によれば、魔剣士スパーダもまた銀色の髪をしていたそうだ。父も母も分からぬだけに、彼らの目には俺がスパーダゆかりの人間だなどと思えていたようだった。二千年を越えて、しかも本当に実在したかも分からぬ魔剣士様の縁者が出てくるなんて俺なんかには信じ難い話だが、キリエとクレドの両親はそういう事を恥ずかしげもなく口にできるくらい、敬虔な信徒だった。馬鹿みたいに純粋で、けれど、いい人達だった。

けれど彼らは死んだ。

殺されたのだ。悪魔に。

当時、俺はまだ教団騎士にはなっていなかったし、現場を見たわけではないから詳しい事は知らない。ただ、ミティスの森の遺跡を調査している途中、突如現れた悪魔によって命を奪われたのだと聞いている。

俺はあの時、魔剣教団の教えが結局は何ひとつ真実を含んでいない出鱈目なものだと知った。

何故、彼らが殺されなければならなかったのか。あれ程までに無垢に神の加護を信じた彼らが、無残にも悪魔に命を奪われなくてはならなかったのか。俺みたいな人間が殺されるのなら構わない。神だって救う人間を選ぶだろう。

だが彼らは違う。誰よりも救われるべき人達だった。神の御加護とやらを、真っ先に受けるべき人達だった。

だが、彼らは死んだ。

それが現実だ。

だから俺は神を信じない。信じるのは、力だけだ。

結局、力がなくては何も守れない。不信心者でありながらも俺が教団騎士になったのは、キリエを守りたいからだ。両親を失い、大きな悲しみに見舞われながらも、それでもなお両親の教えを受けて神を信じる無垢な彼女を、俺は守らなくてはならない。

それが、俺なんかに優しくしてくれたキリエとクレドの両親への、せめてもの恩返しだ。

ふと左を見ると、キリエが佇んでいる。

キリエは自分の席に置かれた俺からのプレゼントを見て、小さく笑った。

大した物じゃないが、日頃世話になっているお礼と、魔剣祭の歌姫に選ばれた事への祝いの気持ちだった。神を信じぬとは言え、そういう事くらいは素直に祝ってやりたい。

キリエはその包みを手に取り、俺の隣席に腰掛けた。

壇上では依然、教皇様のお説教が続いている。

何を言っているかはよく分からないが、大方は人間が乱れているだの、来たるべき神の到来の日を待とうだの、そういう内容だろう。

やがて、教皇が何事かを口にし祈りのポーズを取ると、それに呼応するようにキリエを含め

た観衆達が一斉に同じように手を合わせた。祈りの時間というわけだ。
それが限界だった。これ以上この場にいると居眠りをする以外にやる事はなくなるだろう。
俺はヘッドフォンを取り、立ち上がった。
それに気付いたキリエが、不安そうに俺を見上げる。
「ネロ……どうしたの？」
尋ねられ、俺は首を傾げた。問われるまでもない、分かり切った事だと思ったのだ。
「帰るのさ」
幸い、観衆も教皇も、舞台上で彼を警護する教団騎士達も、今は祈りに夢中だ。俺の事なんか見てはいない。抜け出すなら今が一番都合がいい。
「でも、お祈りが……」
キリエにしてみれば、こんなタイミングで抜け出すのはあり得ない事なのかもしれない。だが、俺には無理だ。一応、出席するという約束は守った。プレゼントも渡せた。それだけでもう、俺のやるべき事はない。
「いいよ。眠たくなるだけだし」
そう言い残して去ろうとする俺の後を、キリエは追ってくる。
と、俺は立ち止まった。
右腕が疼き始めたのだ。

まるで何かを感じ取ったように、包帯の下で、右腕が脈打っている。そしてその脈動は次第に速くなっていった。
「悪魔……？」
キリエには聞かれぬよう、小さく呟く。
近くに、悪魔がいるという事か。だがこの会場には俺を除く総勢数十名の教団騎士が警護にあたっているはずだ。彼らの目をすり抜けて、悪魔が侵入しているなんて、そんな馬鹿げた事があるとは思えない。
しかし俺のその思考に反して、右腕の疼きは治まる気配を見せなかった。
もしこの近くに悪魔がいるとすれば、そして俺がそれを感じられる距離と考えれば、それは——天井しかあり得ない。騎士の警護の目も届かない場所。
俺が天井を見上げるのとほぼ同時に、そいつは天井のステンドグラスを突き破り、落下してきた。
赤いコートに身を包み、背中に巨大な剣を背負った銀髪の男。
その赤の男は、落下するや舞台上、教皇の立つ壇の前に着地し、すぐさま懐から何かを取り出した。それが銃だと気付いたのは、直後に会場に銃声が響いたからだった。
一瞬、会場が静まり返る。
俺も、瞬時には何が起こったのか理解しかねていた。

俺のいる場所からは、赤の男が妨げになっているせいで、よく見えない。だがどうやら教皇が舞台上で倒れたらしい、どさり、と乾いた音だけが耳に届いた。

赤の男が壇上で立ち上がり、ゆっくりと観衆の方を振り返る。その顔には、べったりと生々しい血液が付着していた。

「……教皇！」

舞台上の袖で全てを見届けていたクレドが叫ぶ。同時に、観衆達は一斉に悲鳴を上げ、我先にと出入り口の方へ駆け出していた。

暗殺――。

その言葉が頭を過る。間違いない。突然現れた赤の男は、教皇をその銃で暗殺した。

目的は分からない。そんな事をして一体、誰が得をする？

だがそんな事を考えている暇はなかった。

クレド達、教団騎士が一斉に抜刀し男に向かっていく。

俺は傍にいるキリエの手を取り、出口へと引いた。

キリエはそのはずみで俺のプレゼントを落としてしまっていたが、そんな物を取りに戻っている場合じゃない。そんな物はまた買えば済む事だ。俺は一瞬、背後を振り返ったキリエの手を強く引いた。

舞台上では教団騎士を相手に、赤の男が立ち回りを繰り広げている。

恐ろしく、強い。

何十対一という状況をまるで苦にする様子もなく、男は手にした大剣で教団騎士達を屠っていっている。彼らを案じてか、キリエは何度となく舞台の方に視線を向けたが、現場を彼女に見せる事すら好ましくはなかった。

助太刀に行きたいが、キリエを安全な場所に連れて行かねば、彼女の性格からして騎士達の方へと走っていってしまうのは分かり切っている。

「キリエ！　急げ！　早くここを出ろ！」

そう叫ぶが、彼女の心は自分が逃げる事には一切向けられていない。彼女はただ、案じているのだ、赤の男によって傷付けられている教団騎士と、教皇の安否を確かめているクレドの事を。

何人もの騎士達の苦悶の声が聞こえてくる。

出入り口は逃げ惑う人の群れでいっぱいだった。誰しもがパニックに陥っており、人に道を譲る余裕すら持ち合わせてはいない。だが彼らに何を言ったところで届きはしないだろう。早く前の方の人間が出て行くのを待つしかない。

舌打ちをし、舞台の方を振り返る。

数十名の教団騎士が、のきなみ地に伏していた。

残っているのは僅か二名。クレドと、名前すら分からぬ一人だけだ。たった一分か二分の時

間で、教団騎士がほぼ全滅に近い状態に追い込まれたという事だ。あり得ない。対悪魔に特化しているとは言え、悪魔の中には人型をしたものが少なくない以上、教団騎士は対人戦においてもそれなりの力は有している。

ましてこの時代に剣と剣の勝負であれば、教団騎士より優れた人間などいるはずもない。

その俺の考えは、いとも簡単に覆されていた。

呆然とし、俺は束の間、キリエの手を握る力を緩めてしまっていた。

舞台上では今まさにクレドが赤の男と対峙している。

「兄さん！」

キリエはそう叫び、俺の手を振り払うようにして舞台に向かって駆け出していた。

「キリエ！」

慌てて後を追おうとすると、逃げようとしている信徒の一人が俺を押し退けるようにして出入り口の方に走っていく。

その間にも、キリエは舞台に駆けていた。慌てて後を追う。

赤の男の背後から、残されたもう一人の騎士が斬りかかっていったが、振り返る事もないまま逆に斬り伏せられた。そしてその騎士の力を失った身体が、駆けているキリエにぶつかる。

キリエは小さな悲鳴を上げ、騎士の身体に押し倒されるような格好で床に這った。

その叫びに、赤の男が反応し、振り返る。

「……キリエ！」

予測していた中でも最悪の事態だった。

赤の男は一歩、一歩とキリエに詰め寄っていく。俺は走りながら一気に前方に跳んだ。

「おおおおおッ！」

走った勢いをそのままに、空中で両脚を揃えブーツの底を一気に赤の男の顔面に叩き付ける。

衝撃で、男の身体が一気に後方に投げ出される。

だがそんな事で倒せるような相手なら、教団騎士がこうも無残なやられ方はしないと分かっていた。

着地した俺はすぐさま懐からブルーローズを引き抜いた。

一気に男に二発の弾丸を発射し、同時に未だ空中にいる男に向かって駆ける。

男はブルーローズの弾丸を、手にした大剣で弾こうとしたようだった。その思考からも、男が相当の使い手である事は理解できた。普通の人間なら、避けようとするだろう。だが男は迷う事もなく、剣で防ごうとしたのだ。それができるからこそ。

だがブルーローズの弾丸の衝撃は、男の想像よりも遥かに重かったらしい。弾丸が命中した剣は威力に押し負けてさらに後方に投げ出された。男の背後には、魔剣士スパーダ様を模した巨大な石像があった。そこに叩き付けられる事を防ぐためだろう、男は石像の脳天に弾かれた剣を刺し、どうにか堪えた。

男に向かって跳躍した俺は、男の剣の柄を一気に押し込むように蹴った。
俺が蹴った剣は、石像に深く突き刺さる。そしてその剣の柄を足場にもう一度跳躍し、石像の肩の部分に着地した。
赤の男もまた、同じように反対側の肩に立っている。
俺が銃を向けると、男も銃を俺に向けて構えた。
想像以上の身体能力、戦闘技術だった。
俺も我ながら人間離れしていると思う事はある。だが男の能力はおそらく俺以上のものだ。
「……ネロ！」
眼下ではキリエが俺を見上げている。
少なくとも、ここで男を引き付けておけばキリエが逃げる隙はできる。それだけは幸いだった。視界の端で、まだクレドが傷を負っていない事を知り、俺はキリエに向かって叫んだ。
「キリエ！　クレドと一緒に逃げろ！　俺が時間を稼ぐ！」
キリエ一人なら言う事を聞かせるのは難しい。だがクレドがいるならどうにかなる。
クレドは迷わずキリエを庇うように立ちながら言った。
「ネロ！　すぐに応援を呼ぶ！　死ぬなよ！」
だからこそクレドは信用できる。教団本部には数十名の騎士がもしもの時のために残っているはずだ。彼らを連れてきた方が勝算の高い事を冷静に分析できている。

クレドがキリエを連れて会場から出るまでの間、俺はじっと赤の男と銃を突き付け合い、睨み合っていた。男は意味不明な小さな笑みを浮かべている。一人や二人は逃がしてやるという事かもしれない。この男なら、俺の妨害を避けてキリエ達を狙う事は容易だろう。
だが男はそれをしなかった。
男なりの多少の慈悲か、それとも別の理由か。
いずれにせよ、殺人者の思考なんかに興味はない。
「応援を寄越す、か……期待できそうにないな」
俺は首をひねり、かかっているヘッドフォンを振り払った。ヘッドフォンが床に向けて落下していく。
「高かったんだけどな……惜しんでる場合じゃなさそうだ」
俺の言葉に、男は一層、口元を歪めた。
それを合図に、俺は銃弾を見舞った。
男は俺のそんな行動を読んでいたかのように上空に跳ぶ。俺もまたそれを追って跳んだ。
空中で揉み合いながら銃弾の応酬を繰り返す。至近距離ならば一発や二発は当てられるかと思っていたが、それも甘かった。
空中で男に蹴り上げられ、吹き飛ばされる。
一方で、男は悠々と石像の頭部に着地していた。突き刺さった剣を抜こうとしている。

この男に剣を取らせるのはマズい——そう考え、俺は剣の柄の上に着地した。その衝撃で、石像の頭部を切り裂きながら剣が跳ね上がる。男は躊躇う事もなく剣を追って再び跳んだ。

俺の方は体勢を崩し、石像の腕と胴の隙間に挟まれながらどうにか足を突っ張って落下を堪えている状態だった。石像の頭部には、剣を手にした男がいる。

「結局、無駄だってわけかよ！」

苦しい体勢ながらも男に銃を放ったが、男はそれを跳んでかわし、石像が持つ剣の柄の上に着地した。

「涼しい顔しやがって……ムカつくんだよ！」

スパーダ様か何か知らないが、こうなったら細かい事を気にしていられない。

俺は突っ張っている足に思い切り力を込めた。

亀裂の入る音がし、石像の胴体と腕とが離れていく。その腕と、男が立つ剣の部分とは繋がっている。男の身体ごと、石像の腕を押し倒してしまうつもりだった。そうすれば男はまたどこかに跳躍していかざるを得ない。その隙に、こちらも体勢を整えられる。

だが俺の想像を超え、男は倒れていく石像の腕に乗ったまま、剣を担いで悠然と俺を見つめていた。

俺は舌打ちをし、予定を変えて倒れていく腕に飛び移ると男を目指して駆ける。

走りながら撃った。だが至近距離にも拘わらずいとも容易く避けられた。

男が剣を振りかぶろうとしたので慌てて蹴りを出す。その蹴りさえ、男が遅れて放った蹴りと相打ちの格好だった。たがいに衝撃で後方に飛ばされる。

落下しながら、俺はブルーローズのシリンダーから空薬莢を排出した。同時に袖に仕込んであるクイックローダーに装填された予備弾丸を上に放る。

着地と同時に、空のシリンダーに弾丸が綺麗に収まった。

男の方は着地後にのうのうとマガジンを交換している。

酷いハンデだ。ただでさえ厳しい相手に、こちらは右腕を包帯で吊っている。

息が上がっているのが自分でも分かった。

時間にしておそらく一分程しかない攻防で、息が上がった事など最近の記憶にはない。

男の方はまるで余裕な顔付きをしていた。

それが一層、気に食わなかった。

右腕を使うべきかもしれない。

そう考えつつも、その決断ができない。

クレド達が戻ってきたらどうする？　もう少し時間を稼げば応援が来る。クレドも含めた十数名と一緒に戦えば、片腕の状態でもどうにかなる気がする。

男は、俺が向かっていかない事を不思議に思っているのか、僅かに首を傾げた。

時間を稼ぐべきだ。あの男も、こちらが最初に考えていたよりは好戦的な様子ではない。

そう思った瞬間、男が動いた。
手にしていた銃を懐に収めると同時に、大剣を持って一気に間合いを詰めてくる。
速過ぎる。
避ける判断さえできぬまま、俺は無意識に右腕を盾にしていた。
男が繰り出した突きが、右腕に突き刺さる。
衝撃で吹き飛ばされそうになるのに耐えるしかなかった。男の突きの衝撃は、まるで螺旋を描くように俺の右腕を覆う包帯を引き裂いてしまった。
男がまた、首を傾げた。
「仕留めた、と思ったが……凄ェ腕だな。チタンでも仕込んでるのか？」
右腕が無傷だった事にも我ながら驚いたが、それよりも男が喋った事の方が衝撃的だった。これまで一言も口を利く事はなかったのだ。
「喋れるのかよ……」
俺が言うと、男は何故か勝ち誇ったように、
「聞いての通りだ。喋れないなんて自己紹介、したか？」
と口にする。会話に気を取られているのか、右腕を突いた剣はそのままの状態だった。俺はすぐさまその剣の刃を掴んだ。男が慌てて剣を引こうとするが、どうやら俺の右腕の方が力は勝っているらしい。無理矢理曝け出される形になった右腕だが、こうなったら迷っていても仕

方がない。この腕なら、男に勝てる。それに賭けるしかない。
「何か仕込んでるかって質問だったが……悪いが、そいつは企業秘密でね！」
俺は剣ごと男の身体を振り回すようにして投げた。
空中で身を翻す男に、俺は一度背を向けて走った。
走る先には、さっき俺が押し倒した石像の腕が転がっている。その破片の中には、石像の持っていた巨大な剣もあった。
悪魔の腕を使い、その剣だけを引き剥がして持ち上げる。
そして振り返りざまに男に向かって投げ付けた。
男は上体の動きだけでそれをかわすと、俺の右腕を見つめた。
「……お前もそうか？」
「あァ？」
男の言葉の意味が分からない。
「ピンとこねぇェな……お前からは掃き溜めの臭いがしない」
「何を言ってるか知らないけどな――」
俺は一度、右腕を固く握り締め、
「お前と議論してる暇はないんだよ！」
叫びながら右腕を突き出す。青白い悪魔の腕が男に向かって伸びていく。男が初めて狼狽し

た顔を見せた。
男が逃れる動きを取るよりも速く、悪魔の腕が男の右足を掴む。
そのまま身体を持ち上げ、一気に自分の方に引き寄せた。引き寄せながら、走る。
時間はあまりない。人が来る前に終わらせる必要がある。
悪魔の腕から男を解放し、なす術もなく空中に身体を投げ出された男の顔面に、俺は渾身の力を込めて右腕を叩き付けた。床が大きく陥没し、男の頭部がそこにめり込む。それでも構わず男の顔面を殴り続けた。馬乗りになって、何度も何度も。
そうでもせねば、この男を倒す事はできないと思った。
悪魔に憑かれた人間は殺した事があっても、生身の人間を殺した事などない。だがこの男に関して、人間を相手にする気持ちでかかっていてはこちらがやられてしまう。男がぴくりとも動かなくなるまで、俺は殴り続けた。
次第に、自分の中で何か凶悪な自分が目覚めていく気がした。理由は分からないが、俺はこの男を殺さなくてはならないという意思のようなものが、男を殴り続ける中で芽生え始めていた。まるで昔からの仇を相手にしているように。
気が付けば、俺は動かなくなった男の身体を石像に向かって投げ付けていた。
そして男が床に落としていた剣を手に取り、男目掛けて叩き付けるように放った。
男が石像に叩き付けられる。その直後に、俺が続けざまに放った剣が、男を石像に磔にするように突き刺さる。

そこで我に返った。
目も当てられない無残な光景だった。生物の標本のように、石像に磔にされた男。胸元から流れ出す夥しい量の血。
右腕を見ると、僅かに震えている。
無我夢中でやった自分の行為があまりに陰惨過ぎて、俺は眩暈すら感じていた。
男の死体から顔を背ける。
右腕を隠すように袖を引き伸ばし、この場から離れようとした。後の事はクレドに任せればいい。殺してしまったのは仕方がない。そうせねば俺がやられていた。そう思うしかない。
出入り口に向けて一歩足を踏み出した瞬間、
「……やるね」
と背後で声がした。明らかに、俺が殺したはずの男の声だった。
愕然としつつも振り返る。
男は磔にされたままの格好で、俺を見下ろしていた。
「ちょっと、甘く、見てたらしい」
苦しそうに言葉を吐きながら、男は仰け反るようにして磔の状態から逃れた。
胸に剣が突き刺さったまま着地する。どう考えたって生きているはずがない見た目だ。

驚いてはいた。だが、納得もしていた。確かにこれだけの強さを持った奴なら、人間よりは悪魔という方がしっくりくる。

「……成る程ね。人間じゃないってわけか」

苦笑しながらも俺が呟くと、男は自分の胸に剣が刺さったままなのに気付いたらしく、それを引き抜きながら、言葉を吐く。

「それはお互い様だろ……」

剣が抜かれると嫌な音と共にまた血が噴き出した。その血は赤い。赤い血を持った悪魔を、俺はこれまでに目にした事がなかった。

剣を抜き終えた男は、その剣で俺の右腕を指した。

「俺が人間じゃないとして……お前はどうなんだ？」

俺は咄嗟に右腕を背中に回していた。改めてそれを指摘されると、動揺してしまう。これまで、誰にも見せた事のない腕だ。少なくとも言葉を喋る相手には。

「俺は……人間だ」

俺の言葉に、男は肩を竦めると、今度は俺の背後の方を剣で指し示した。

「じゃあそいつらは？」

言われて振り返る。そこには教団騎士の死体が転がっている、はずだった。

それは確かに教団騎士の服を着ている。だが兜が外れたその頭部は、とても人間とは思えない外観をしていた。まるで、悪魔のような。

俺が再度、男の方に向き直ると、男はそこにはいなかった。

右にも、左にもいない。姿が消えている。

「まあ、お前とそいつらはちょっと違うみたいだがな」

その声は頭上からした。

見上げると、男は自分が突き破った天井の穴の一端に腰掛けている。

「どういう意味だ！」

俺の問いに、男は苦笑した。

「さあな。そのうち分かるんじゃねぇの？」

そう言って、立ち上がった男は大きく伸びをした。

「俺は他にも仕事があるんでね……坊やの相手はとりあえずここまでにするさ」

「逃がすかよ！」

銃を撃ったが、男は俺の視界から姿を消してしまう。銃弾は空しく天井を砕き、着弾の白煙だけが虚しく舞い上がった。そしてその煙が晴れると男は再度、穴から俺を覗き込み、

「あばよ、坊や」

と付け加え、今度は本当に去って行った。

気に入らなかった。

何もかもが、だ。
男の思わせぶりな態度も、人を食った態度も、何もかも。
あの男が人間じゃないとしたら、一体何なのか。悪魔か。悪魔の中でも、高等な連中は人の言葉を解するという話自体は聞いた事がある。だが実際に遭遇した事はなかった。
本当に、あの男は悪魔なのか。
あの男が悪魔なのだとしたら、俺はどうなる？
男に問われた事を、今度は自分で問い掛ける羽目になる。
俺のこの右腕は、人間のものじゃない。男のあの鋭い突きにさえ耐えたこの腕は。
あの男が悪魔だと認めれば、俺自身もまた悪魔なのだと認める事になる気がした。
そして、もうひとつ、教団騎士の死体。
悪魔のような形相の、死体。
その死体に目を向けようと振り返った時、出入り口が乱暴に押し開かれ、無数の教団騎士達が駆け込んできた。
俺は右腕を見せぬようにコートのポケットに突っ込み、駆け込んできた教団騎士の最後尾にいるクレドの方に向けて歩き出していた。
とりあえず、事情は説明しなくてはならないだろう。
男を取り逃がした事、男がどうやら人間ではないらしい事。

頭の中で出来事をまとめているうちに、後続の騎士達が何も言わず、亡骸となった騎士達に白い布を被せ始めていた。
どうやら、あの死体が悪魔のような形相だったのは、俺の見間違えだったらしい。そうでなければ、他の騎士達が何か言うはずだ。
「すまない……逃げられた」
渋い顔をしているクレドに向けて、俺は口を開いた。



もはや荒唐無稽なお伽噺としてしか伝わってはいない魔剣士スパーダの伝説を、ダンテは幼い頃から信じていた。
いや、信じていたというよりは、疑う余地すらなかった、と言った方がいいのだろう。
何故ならば、ダンテは魔剣士スパーダの実の息子だからだ。
二千年前、悪魔に虐げられていた人間を哀れみ、魔界の王を打ち倒し、人々を救った正義の心を持った悪魔。魔界最強の剣士。孤高の英雄。
ダンテは父のそんな物語を、幼い頃から聞かされていた。
一体どのような紆余曲折を経て、父スパーダが人間界で暮らし、ただの人間である母と出会

いそして愛を育んだのか、それはダンテの知るところではない。父がまだ家にいた頃、ダンテは幼過ぎてそんな事を疑問に思ったりはしなかった。

それなりに年月を重ねた今でも、別に知ろうとは思わない。

ダンテにとって重要なのは、父が誇り高き英雄であった事、そんな父すら参ってしまう程、母は気高く美しい人であったという事だ。

そして自分が、そんな二人から誇り高き魂を受け継いでいる。そう信じられる事。

だからこそ、ダンテは取り立てて自分から父スパーダについて何かを調べようとは思わなかった。

スパーダには様々な伝説がある。

魔界の王を打ち倒した、などというのはその伝説の始まりの一頁に過ぎない。

その後、二千年という時を、スパーダはどのように生きてきたのか。

今訪れているフォルトゥナという街で、スパーダは領主を務めていたという。

ダンテはそれを人伝に聞いたのであったが、正直なところ、さして信じてはいなかった。

もはや御伽噺として扱われているような存在だ。信憑性の怪しい話はいくらでも転がっている。フォルトゥナでの伝承も、そんな類の話だろうと思っていた。

しかし、少しだけその考えが変わりつつある事を、ダンテは自覚していた。

それが、あの青年の存在だった。

名前は知らない。

だがあの青年と同じ目をしていた男を、ダンテは知っている。

自分とは違い、彼はスパーダの事を事細かに調べていた。

そんな彼ならば、或いはこの地を訪れていたかもしれない。

フォルトゥナ城までの道のりを人目を避けて歩きながら、ダンテはそんな事を考えていた。

そして自嘲の笑みを浮かべる。

「……ま、どっちだっていいか」

呟き、ダンテは先を急ぐために歩調を速めた。

フォルトゥナ城では先に潜入している相棒と会う約束をしている。時間にはうるさい女だ。

顔は母に似ているくせに、そういう細かさまでは似ていない。

「怒らせると怖いのは似てるけどな……」

ダンテは苦笑しながら再度独り言ちた。



凄惨な現場の後処理が終わるまでの間、俺は手持ち無沙汰のままで待っているしかなかった。

本音を言えば寮の自室にでも戻って一息入れたい気分だったが、クレドがそれを許さなかった

のだ。そこにさして驚きはなかった。おそらくそうなるだろうと思っていた。

俺が取り逃がしたあの赤の男を教団として放っておけるはずがない。奴は残虐で得体の知れぬ存在だ。今以上に被害が広がらない保証はどこにもない。そしてそれ以上に、教皇を暗殺した奴を無事に返してしまうなど、魔剣教団の沽券に関わる出来事だ。

案の定、全てが終わり人気を払った後でクレドは俺に、

「奴はフォルトゥナ城の方に向かったらしい……今すぐ追うんだ」

と告げた。だが俺は、今のままの状態で奴を捕らえられるかどうか、その自信がなかった。

「だったらあんたの剣を貸してくれ。今度は冗談じゃない。一度相手をしたから分かる。カリバーンなんかで相手できるタマじゃない」

それでもクレドが名誉だの自尊心だのを盾に断ってくるのなら、俺としても安易に奴の追討を引き受けるわけにはいかなかった。悪魔の手さえ通用したとは言い難い相手に、徒手空拳ではさすがに分が悪すぎる。

だがクレドは首を横に振った。

「……その必要はない」

その言葉の意味が、最初俺には分からなかった。だが直後、扉を開け放つ音と共に歌劇場に入ってきたキリエを見て、その意味を知った。

キリエはトランクのようなものを重そうに引きずっている。レッドクイーンを収納している

ケースだった。

キリエの元に小走りに駆け、その重そうな荷物を引き取る。

「持って来てくれたのか」

キリエはクレドを見やり、

「兄さんに頼まれて……これが必要だって」

と言った。キリエにこんな事を頼むあたり、おそらく今の教団は相当な混乱状態にあるのだろう。赤の男に相当な数の教団騎士がやられてしまっている。たかだか物資の運搬に人手を割く余裕すらも失っているという事だ。

俺はキリエに微笑み、その場にしゃがみ込んでそのケースを開いた。

「助かるよ。これがあるとないとじゃ大違いだからな」

クレドの所有するデュランダルもかなり優れた騎士剣だが、やはり自分用にカスタマイズしてあるレッドクイーンに比べれば手の馴染み方が違う。

鼻歌交じりに分割されてケースに収納されているレッドクイーンのパーツを組み上げていく。改修したてだけあって、真新しいパーツ特有の油の匂いが鼻を突いた。この匂いが、俺は嫌いじゃない。

「……で？　フォルトゥナ城だって言ったっけ？」

クレドとの会話が中断されていた事を思い出し、レッドクイーンの組み立て作業をしながら

そう尋ねる。
「奴がここを抜け出した後、そちらに向かって行くのを見た者がいる。目的は分からんがな」
少なくとも、この街から逃げ出すという動きじゃない事は確かだった。フォルトゥナの街は巨大な城砦に覆われていて、地上からの出入り口はひとつしかない。歌劇場からフォルトゥナ城への道のりは、その出入り口とは逆方向だ。海路から逃げるという可能性はゼロじゃないが、怪しい船をいつまでも停泊させておく程、教団も馬鹿ではないだろう。
だとしたら、あの男は何故、フォルトゥナ城へ向かったのか。
奴は去り際、何かやるべき事があるというような意味の事を口にしていた。それは何なのか。
「観光コースとしちゃ、順当なルートだけど……まさかな」
冗談めかしてそう口にした俺の傍に、クレドが立っている。
顔を上げると、クレドは真剣な形相で俺を睨んでいた。こういう状況でのジョークを快くは思わない男だ。
「真剣にやれ。奴を捕えろ。必ずだ！」
常に冷静沈着を誇るこの男が、ここまで声を荒らげているのは稀な事だ。教皇の死で気が立っているのだろう。
組み上がったレッドクイーンが正常に起動するかを確かめた後、俺は立ち上がり肩を竦めた。
「何度も言わなくても分かってる。問題ないさ。仕事はちゃんとこなす」

「ネロ……やっぱり仕事、なの？」
背後からキリエが不安そうな声を俺に向けてくる。俺はレッドクイーンを担ぎながら彼女の方を振り返った。
「仕方がないさ。非常事態なんだ。誰かが奴を追わなくちゃいけないのは分かるだろ？」
俺の言葉に、キリエはそれでも悲しげな目をしていた。
「でも……怪我だってまだ治ってないのに……」
いつも以上にキリエが心配性になっている理由をそれで察した。本当はもう完治している、そう告げれば彼女をいくらか安心させてやれるのかもしれない。だが結局右腕の状態を見せられない以上、同じ事だ。彼女の性格なら、ちゃんと治った事を見せでもしない限り、俺が彼女を安心させるために嘘を吐いていると思うだろう。ガキの頃、そういう事が実際に何度かあっただけに。
俺はレッドクイーンに視線を向けながら言った。
「大丈夫だ。コイツがあれば片腕でもどうって事はないさ。これでも結構強いんだ。信用してくれよ」
キリエの表情はあまり変わらなかったが、それでも小さく頷いてくれる。
その彼女の首に、羽をモチーフにしたネックレスが掛かっているのに俺は気付いた。俺が、彼女に贈ろうとカルスの店で買った品だ。あのどさくさで会場のどこかに落としてしまったは

ずだが、俺がクレドの相手をしている間に見付けたのだろう。

想像していた通り、それはキリエによく似合っていた。

俺の視線を受けて、キリエが微笑む。俺も小さく笑みを返した。こんな時だからこそ、キリエはいつものように振る舞おうとしている。その気丈さが、愛しかった。

「……私は本部に戻る」

出入り口に向けて歩きながら、クレドが言った。

俺はキリエの髪を一度撫で、

「……外まで送るよ」

と告げる。その言葉と同時に、突然の地響きが起こり、俺達は周囲を見回していた。

何が起こったのか知るべく、慌てて歌劇場の外へと向かう。

だが想像とは異なり、外の空気はいつもに増して静かだった。

だがコートのポケットに突っ込んでいた俺の右腕は小さく疼いている。悪魔の気配を、近くに感じる。俺が目指すべき標的を視認するよりも早く、

「誰か！　誰か助けてくれ！」

と、閑静な空間に男の悲痛な叫びが響き渡った。

声のした方に目を向けると、広場の噴水の陰から一人の信徒がよろよろと姿を現した。何かに襲われたのか、傷付いているようだった。

クレドがすぐさま剣を抜く。俺も懐の銃に手を伸ばした。

男は、俺達の存在に気付き、遠方であるにも拘わらず助けを請うように手を伸ばしてくる。

クレドが彼の元に駆け寄ろうとした瞬間、醜悪な鳴き声と共に、噴水の陰から一匹のスケアクロウが飛び出した。

銃を構えたが、間に合わない。

スケアクロウが男の背中に刃を突き立てる。

そのまま男の体を持ち上げたスケアクロウは、無造作にそれを投げ捨てた。

直後、遠方から無数の人間の叫び声が上がった。そしてその声は次第に近付いてくる。

見通しの利く範囲だけでも数箇所、街の各所がスケアクロウで溢れかえっていた。人々は、それから逃げ惑っているのだ。

フォルトゥナの周辺で悪魔が現れる。それ自体は珍しい事じゃない。今日だって、俺は森と市街地で悪魔退治をしていた。だが今いる歌劇場の周囲は市街地の中でも中心部にあたる場所だ。森や、森に近い町の外れに悪魔が出るのとはわけが違う。少なくとも、俺が教団騎士になってから数年、こんな中心部に悪魔が出た事は一度としてない。

「……これも奴の仕業だと思うか？」

俺はクレドに問うた。教皇の暗殺の直後にこんな事件が起これば、誰だってその関連性を疑いたくなる。

クレドは剣を手にしたまま呆然としていた。

「分からん……何なんだこれは……」

人々はおそらく教団騎士の救いを求めて、教団本部を目指しているのだろう。

歌劇場前の広場は、瞬く間に人の群れでごった返し、そしてそこに無数のスケアクロウが交ざり込んでいるという最悪の状況だった。銃を使えば確実に市民にも被害が及ぶ。

剣を持って駆け込もうにも、逃げ惑う人の流れに押し返されてしまう。

そして何もできぬまま、何人かの人間が無残にもスケアクロウに殺されていく。

その様子を見守るしかなかったキリエは、体を震わせ、祈るように手を合わせた。

「クレド」

歯噛みしているクレドに向けて、俺は言った。

「キリエを頼む。住民の誘導も。悪魔どもは俺が食い止める！」

背負っているレッドクイーンの柄を捻り、イクシードを燃焼させながら、俺は人と悪魔で溢れる広場へと駆け出していた。

人に当たらぬよう注意を払いながら、スケアクロウを剣で吹き飛ばす。倒すのは後でいい。

まずはこいつらを人々から遠ざける事だ。

「ネロ！　住民は本部に避難させる！　何かあればお前も本部まで戻って来い！」

背後でクレドの叫びが聞こえた。スケアクロウを斬り飛ばしながら振り返り、

「了解！」

と応える。

一体どこから湧き出したのか、スケアクロウの数は異常と言っても良かった。レッドクイーンが戻ってきたというのに、これではさすがに手を焼く。だが人がいなくなれば、右腕を隠している必要はなくなる。そうなればしめたものだ。

スケアクロウを相手しながら人々の避難の状況に目を向けると、本部へと続く道の手前で一人の子供が泣きじゃくっていた。子供の足元にはいくつか死体が転がっている。ひょっとすると両親を殺されてしまったのかもしれない。

本部に向かっていたキリエがその子供に気付き、振り返って走り始めた。同時に、数体のスケアクロウもまた、子供に向けて飛び掛かっている。

舌打ちをして、跳ぶように駆け出した。

キリエが庇うように子供を抱き締める。

そうやって子供を庇ったところで、キリエの柔らかで細い肢体ではスケアクロウの刃を防ぐ事なんてできやしないのに。

スケアクロウが飛び降りながら繰り出した刃が、キリエに向かって振り下ろされる。俺はその無数の刃をレッドクイーンを盾にする事で弾き返した。

恐怖で目を閉じてしまっていたらしいキリエが事態に気付き、

「ネロ……」
と呟く。
「いいから行くんだ！　早く！」
襲ってくる他のスケアクロウ達を銃弾で牽制しながら、俺は叫んだ。
キリエが子供の手を引いて本部の方に走り去っていくのを見届け、俺は深い溜め息を吐いた。
まったく、無謀もいいところだ。
他人を助けようとして結局共倒れになって、一体誰が褒めてくれる？
キリエが誰かに褒められようとしてるわけじゃないなんて事は知っている。彼女はあそこで立ち尽くしていたのが誰だとしたってそうしただろう。子供でも老人でも男でも女でも俺でも、ひょっとしたら自分を犯したばかりの男だとしても、自分の身を挺して彼を守ろうとするだろう。悩む事もなく。
キリエはそういう人間だ。
その慈悲を美しいとは思わない。彼女は全てを守るにはあまりに儚すぎる。実現させる力を持たぬ慈悲は、何もせぬ事とさして変わりはない。そういう意味で、キリエの慈悲もまた無意味だ。
けれどそれでも俺は、まるで当然のように慈悲の心を向ける彼女そのものは誰よりも美しいと思う。力なき慈悲を懸命に人々に贈り続けようとするその心は。

だから、俺には力が必要なのだ。
彼女の優しき思いを叶えるために。彼女の慈悲を、無為にせぬために。
ようやく周囲から人の気配が消え、俺はほくそ笑んでいた。
ポケットにしまい込んでいた右腕を出す。
「さて……お仕置きが必要だな、お前らには」
俺の呟きと同時に、一体のスケアクロウが飛び掛かってくる。俺は悪魔の腕でその足を掴み、空中で大きく振り回した。
レッドクイーンと悪魔の腕、ふたつが揃えばこの程度は物の数じゃない。殲滅させるのも容易だ。
だが俺がこの場を去った後、またこいつらがどこから湧き出さないとも限らない。
「だったら……道を塞ぐか！」
教団本部へと続く道には、石でできたアーチが架けられている。そのアーチの柱に向けて、俺はスケアクロウの体を思い切り投げ付けた。凄まじい衝突音と共に、アーチが崩れ、瓦礫の山が道を塞いでいく。完全に通行不可能というわけじゃないが、ガラ空きの状態よりは断然マシだろう。
俺の周囲を、十数体のスケアクロウが取り囲んでいた。
格好の獲物だった住民達はもう通行不能なアーチの向こう側、今やこいつらが狩るべき相手

は俺しかいない。結構な事だ。

一匹を悪魔の腕で地面に叩き付ける。もう一匹は銃で仕留めた。

次いで、四匹ばかりが同時に飛び掛かってきたのを、俺はレッドクイーンで受け止めた。さすがに四匹同時ともなると大した重量だ。このまま剣を振り抜いて吹き飛ばして、というわけにはいかない。

普通なら。

「ハハッ！」

思わず笑みがこぼれる。四匹のスケアクロウを支えたまま、俺はレッドクイーンの柄を捻り上げた。本来なら推進剤を噴射するべき装置が、赤い炎を吐き出す。そのまま何度かイクシードを噴かせ続けた。改修に出す時、前よりも頑丈に、と注文を付けたおかげだ。以前なら焼き付いてしまっていたような過剰燃焼にも、十分、耐えてくれる。

「行くぜ……ッ！」

イクシードを全開にし、レッドクイーンを操る。炎混じりの推進剤が、剣を操る俺の左腕を後押しする。体を反転させながら、一気にレッドクイーンを振り抜いた。四匹のスケアクロウは炎に包まれ、黒い煙を吐きながら消滅していく。

背後からさらに飛び込んできた一匹の攻撃を振り向かないまま跳躍してかわし、俺はそのスケアクロウの体の上に着地した。足元で這い蹲るスケアクロウに刃を突き立てると、そのままイクシードを起動させる。そのまま噴かせながら、他のスケアクロウを引き付けた。

足元ではまだくたばっていないスケアクロウがもがいている。

「死ぬにはまだ早いぜ……お楽しみはこれからだ！」

叫びながらクラッチを握ると、推進剤の勢いで足元のスケアクロウごと、俺の体が前進した。即席のホバークラフトってところだ。

群がるスケアクロウを弾き飛ばし、銃弾を見舞う。悪魔の腕で掴み上げ、叩き落す。チマチマ剣でやるよりも、その方が効率がいい。思いつきでやってみた戦法だったが、思いの外、効果は抜群だった。

ものの数分もせぬうちに、広場からスケアクロウは消え失せていた。

俺の乗り物役を務めていたスケアクロウを残して。

俺はそいつを拾い上げる。地面との摩擦ですっかりズタズタになりながらも、そいつはまだ生きていた。

「助かったよ。タフだな、お前」

そう言って、広場と市街地を繋ぐもうひとつの門に向かってそいつを投げ付けた。

門に激突したスケアクロウが四散する。同時にその衝撃で、開いていた門の柵が下りた。

「これでしばらくは安全、か……」

何度か首を捻り、本来の任務を遂行するため、俺は城に向かうために歩を進めた。大きな道

は塞いでしまったから、建物の中を通っていく必要がある。多少面倒だが、それも仕方がない。赤の男とやりあう前のウォーミングアップとでも割り切るべきだ。

調子は悪くないが、今の俺でも奴と渡り合えるかどうか、その点に関しては甚だ疑問である以上は。

STAGE 04

魔剣教団の本部、最上階の一画にその部屋はあった。

現教皇、サンクトゥスの寝所である。

突如現れた兇漢によって頭部を射貫かれ暗殺されたサンクトゥスは、その寝所のベッドに横たえられていた。本来ならば、死者の顔には白い布を被せるのが魔剣教団の作法である。だが横たわるサンクトゥスの顔に、白い布は被せられてはいない。そして、あるはずの銃痕も消え失せていた。

そんなサンクトゥスを、教団騎士長クレドは静かに見つめていた。

まるで忠実な飼い犬が主の命を待つように、身動きひとつせず、ただじっと。

事実、クレドは待っていたのであった。主の帰還を。

目を閉じていたサンクトゥスが、唐突に体を仰け反らせ始める。驚くべきはずのその光景も、クレドには予測していた起こるべくして起こった出来事である。サンクトゥスは数度、苦悶の

表情を浮かべ、やがて目を見開いた。その瞳は、人間にあるまじき真紅色をしている。
だが数秒後、目を閉じたサンクトゥスが再度その瞼を上げた時には、瞳の色は元の生来のものに戻っていた。
「……お目覚めになりましたか」
クレドの呼びかけにサンクトゥスは横たわったまま視線だけをクレドに向け、
「クレドか……」
と呟く。クレドはサンクトゥスに恭しく礼をした後、
「ダンテは現在、私の部下が追跡中です」
淡々とそう述べた。
サンクトゥスはその言葉に、忌々しそうに顔を歪める。
「奴め……」
サンクトゥスにとって、ダンテ襲来そのものは予見していた出来事であった。しかし魔剣祭という衆人環視の場において何か仕掛けてくるなどとは考えてもいなかったのである。それが彼には腹立たしかった。出し抜かれたという思いがあった。
「帰天しておらねば命を落としておったわ……」
自らの中で沸き起こった怒りを打ち消すために、サンクトゥスはそう付け加えた。起きてしまった事は仕方がない。信徒達の前で撃ち殺されたその事実も、逆に利用してしまえば良いの

だ。そう考える。
クレドの背後からもう一人、男がゆっくりと近付いてくる。ブツブツと何かを呟きながらメモをしていたその男は、サンクトゥスが覚醒している事に気付くやメモを白衣のポケットにしまいこみ、満面の笑みをその顔に浮かべた。技術局を束ねる長、アグナスである。
「これは教皇様……！　ご機嫌麗しく……！」
クレドの脇から教皇の顔を覗き込み、アグナスはそう口にした。だがそれで言葉がつかえてしまった。しきりに口を動かすが、言葉が口を突いて出てこない。感情が昂ぶると舌が回らないのである。
サンクトゥスは目覚めたばかりの気疲れもあって、アグナスに小さく微笑みだけを返した。
アグナスも笑みでそれに応える。
と、そのアグナスを押し退けるようにしてクレドがサンクトゥスに対した。クレドにはまだ教皇に話すべき事が残っている。邪魔をするなという意思表示だった。そのクレドの態度が気に入らないアグナスは、クレドを睨み付ける。そのついでに、数分前に耳にして気に食わないと感じた一件について口を開いた。
「ネロとかいう小僧にダンテの追跡をさせてるらしいじゃないか」
アグナスの言葉に、クレドは白々とした顔でアグナスを見やった。
「……それが何か問題でも？」

クレドにしてみれば、騎士団の中でも飛び抜けた実力を持つネロにその任務を託す事はなんら不自然ではない。むしろネロ以外には務まらぬ任務だろうとも考える。だがアグナスは激昂し、

「も、もも問題でも、だと？　問題大アリだ！　こ、こここの大馬鹿者が！」

いずれその点に関して指摘を受けるだろうとは考えていたが、よもや教皇の御前でそうなるとは思ってもいなかったクレドは、小さく溜め息を吐いた。

アグナスはクレドの沈黙に乗じて喋り続ける。

「わわ、わ私の研究施設を見られたらどうするつもりだ！　そいつは帰天を受けてもいないガキだろうが！　よ、よよよからぬ事を他の何も知らぬ、し、信徒達に吹き込まれたらどうなるか、か、わわ、わ……！」

「現在の最優先事項はダンテの捕縛、それだけだ」

わざとアグナスの興奮を煽るように、クレドはそれだけを事務的に告げた。言いたい事は他にいくらでもあった。確かに、ネロは未だ教団の内情全てを知っているわけではない。だがいずれはそれを伝えるべき相手であるとクレドは思っている。高い身体能力を持つネロであれば、十数人に一人しか生き延びられぬ帰天の儀式にも耐えられるだろう。そういう意味で、今回ネロにダンテ追討を命じたのは、幹部候補としてネロを押し上げるための下準備でもあった。

だがそんな事をくどくどと説明したところでアグナスが納得するかどうかは疑わしい。同じ

幹部として何度となく対した経験から言って、アグナスを相手に議論するのは時間の無駄である事をクレドは知っていた。

土台、言い負かせたところで口の塞がる男ではない。むしろ一方的にこちらの言い分を伝え黙っていれば、アグナスは勝手に激昂し、興奮が過ぎて言葉も出てこなくなる。

クレドのそんな目論見通り、アグナスは言葉を発する事ができずにいた。

「こ、ここここここ！」

殺すぞ貴様、と言いたいのだが興奮状態のアグナスの舌は思うようには回らないのである。この癖が、アグナスが極力人目を避け研究に没頭する一因ともなっていた。

サンクトゥスはそんな二人の様子を見ていたが、やがてクレドの名を呼んだ。

「クレド」

クレドが恭しく頭を下げる。

「皆を集めてくれ。安心させてやらねばなるまい」

サンクトゥスがそう告げると、

「仰せの通りに」

そう答えたクレドは颯爽と寝所を去っていく。

アグナスはそんなクレドを忌々しそうに見つめていた。

「アグナス……」

次いでサンクトゥスがその名を呼ぶと、アグナスは待ちかねていたようにサンクトゥスの方を振り返った。

「はは、はい！　何でしょう！」

アグナスは、クレドがサンクトゥスに重用されている事が気に食わないのである。実際、幹部の中でも礼儀正しく人望にも篤いクレドは、教団騎士としての任務以外にも様々な任務を与えられていた。

一方で、アグナスは社交性に欠けた男だ。任せられる任務も日陰仕事ばかりになる。

「そろそろ神の調整を行いたい……できるか？」

アグナスは嬉々とした表情で頷いた。

「そ、そそれはもう！　教皇様がお望みとあらば！」

「そうか……頼むぞ。あれはお前にしか出来ぬ仕事だ」

サンクトゥスは、アグナスの性格、心情を知った上でそう付け加えた。

アグナスは今にも泣き出さんばかりに目を潤ませている。

クレドは体面を重んじる男だ。彼の心を掴むには人前で褒め称え、重要な任務を与えてやれば良い。

対してアグナスは、「自分だけが」重用されている、愛されている、と感じていたい男だ。そういう人間は二人きりの時にひっそりと任務を与えてやればそれで満足する。

二人の幹部が仲違いしている事そのものは好ましくない事態だが、それぞれの性格を把握しておけば大きな問題は起こらない。

教皇として様々な人間と接し、その心を掴む術を身に付けているサンクトゥスはそう考えていた。

そしてもし二人の関係がもはやサンクトゥスにすら修復不可能な領域に達しているとしたら、その時はどちらかを切り捨てれば良いだけの話だ。

サンクトゥスが小さく浮かべた笑みに、アグナスはまるで気付いていなかった。



街のいたる所に、悪魔が現れていた。

倉庫の中、美術館の中、大通りにも裏路地にも。

この街で何が起ころうとしているのか、正直俺には理解できなかった。

たかだかフォルトゥナ城に行くまでに、何匹の悪魔を切り捨てたか知れない。それでも後から後から湧いてくる。

おそらくは、何か巨大な「穴」のようなものが開けられているのだろうと思った。これまで森に悪魔が現れた時も、理屈で言えばそういう事なのだ。本来、悪魔が棲む魔界は人間界と分

断されていて、行き来する事はできない。だが何かの拍子にふたつの世界を繋ぐ穴が開いてしまう。そしてその穴から悪魔が這い出してくる。

技術局の人間に聞いた話だが、そういう穴が開きやすい場所とそうでない場所、というのがあるらしい。フォルトゥナ一帯によく悪魔が現れるのは、この周辺の土地が穴が開きやすい場所だからだ、と。

そしてもうひとつ、聞いた話がある。

理論上は、そういう穴を人為的に開ける事ができるらしい。

あくまで理論上の話で、実現はできないと思うがね、とそいつは言っていた。凄まじく強い魔力を持った物質があれば、そういう事も不可能ではないが、そういった物質が人間界に転がっている事はあり得ない。だからあくまで理論上の話だと。

しかし教皇を暗殺したあの男なら、それも不可能じゃないという気がする。

あの男が持っていた剣、あの剣に触れた時、俺は右手が戦慄くのを感じた。確証はないが、おそらくあの剣は強い魔力を有している。スケアクロウみたいな雑魚悪魔なんて話にならないレベルの魔力を。

そんな事を考えながら、俺はフェルムの丘を目指して歩いていた。

フェルムはかつて鉄の採掘場があった場所だ。切り出した空間が洞窟になって、その洞窟がラーミナ山へと続いている。そしてそのラーミナの山頂にフォルトゥナ城があるのだ。

それなりに重要な建築物だけに、もっと楽な道を作ればいいと思うのだが、フォルトゥナの人々は過剰な土地開発をあまり好まない。自分達の街は極力、過去の姿を残すべきだと考えている。それも、かつてはスパーダ様が治めていた風情を何とやらという理由だ。

不信心者の俺としては生活を便利にする事についてスパーダ様が文句を言うとは到底、思えないが、まあそれをこの街で口に出すのは野暮というものなんだろう。

フェルムが近付くにつれ、俺は違和感を覚え始めていた。

遠方に、何となく妙な物が見えていたからだ。

それは巨大な黒い板だった。

一瞬、道を間違えたのかと思った。その板に似た物が、街の中央にも存在しているからだ。

聖碑、とそれは呼ばれている。

そしてその聖碑にそっくりの物体が、フェルムの丘の上にちょこんと立っている。

丘の麓に辿り着き立ち止まると、俺は目を細めた。

見間違いじゃない。確かにそこに存在している。

目を凝らしていると、その黒い板の表面が、何とも表現し難い色に煌いた。

「何だありゃ……」

思わず呟き注視していると、その煌いた表面から数体のスケアクロウがのそのそと這い出してくる。

「まさか、アレから悪魔が湧いてきてるのか……？」

信じ難い出来事だったが、目の前で次々と悪魔が出てきている以上、そう考えるしかなかった。城に行く前に、あの板を何とかした方がいいのかもしれない。

そう考え、歩き出そうとした直後、今さっき湧き出したスケアクロウが突然、炎に包まれた。

咄嗟に身構える。右腕が唐突に疼いた。

何か、来る。それも相当にデカい悪魔だと右腕の疼きが告げていた。

黒い板の表面が、今まで以上に鮮やかに煌いた。よく見ると、その煌きの向こう側に、別の世界が存在しているようだった。

「やっぱり、アレが穴か……！」

その穴から、猛烈な勢いで炎が噴き出し始めると同時に、一匹の巨大な悪魔が飛び出してくる。今までに見たどんな悪魔よりも巨大だった。馬のような下半身。人のような上半身。そして頭部は牛か何かを思わせる。その手に握られた剣だけでも、俺の身長を遥かに超える長大さだった。

丘の上から麓まで一気に飛び降りた巨大な悪魔は、一度その体を屈め、それから獣のような咆哮を上げた。それと同時に、麓一帯が炎で包まれる。悪魔自身もまた、燃え盛る炎に身を包んでいた。

悪魔は小さく周囲を見渡した後、歩き始めた。

「人間界は二千年ぶり、か……」

悪魔がそう人の言葉を口にしたところで、驚きはなかった。例の赤の男も悪魔の類なのだろうし、どうやら悪魔の中にはお喋りが好きな奴ってのもいるらしい。

巨大な悪魔が地響きを立てながら俺の方に向かってくる。だがまるで俺の方を見てなどいない。道端に虫が這ってたってさして気にしないみたいに、だ。

それが癇に障った。

俺も悪魔に向かって歩き出していた。

酷く暑い。あの悪魔にとっては炎は居心地がいいのかもしれないが、暑いのが苦手な俺には迷惑もいいところだ。

悪魔と俺は互いに一歩一歩と距離を詰めていた。

だが悪魔は何も仕掛けてこない。だから俺も、敢えて何もしなかった。

予想通り、悪魔が俺の横を通り過ぎる。たかが人間は相手になどしないって事なんだろう。

それならそれで、こちらがただの人間じゃないと認識させる必要がある。

悪魔とすれ違い終えた後、俺は背中のレッドクイーンを手に取った。

イクシードを全開にし、体を回転させる勢いも加えて水平に薙ぎ払う。

その一閃によって生み出された剣風が、一気に周囲を包んでいた炎を散らせ、鎮火した。

それに気付いたらしい悪魔が足を止め、ゆっくりと振り返る。

「……面白い真似をしおる」
俺はレッドクイーンを担ぎながら、肩を竦めた。
「暑いのは苦手なもんでね」
目に見えそうな勢いで鼻息を漏らした悪魔は、小さく首を傾げ、俺を見つめた。
「……二千年前には、貴様のような人間はおらなんだ」
「そうかい。長生きな爺さんだな。なんだったら、もう二千年後に来てみたら？　もっと変わった奴がいるかもしれないし」
俺がそう言うと、悪魔は一度笑い、それから手にしている剣を大きく引いた。
「へらず口を！」
そして言葉と共に巨大な剣を俺目掛けて突いてくる。
もし、赤の男と出会う前だったら。
たぶん、俺は多少なりとも狼狽したかもしれない。
こんなデカブツ相手に自分の力が通用するのか、そんな巨大な剣を防ぐ事ができるのか、なんて考えたかもしれない。
だが俺はあの男と出会っている。
そしてあの男と多少なりともやり合った後では、その悪魔の突きに何ら脅威を抱き得なかった。



あの男が繰り出した突きの鋭さに比べれば、まるで遅い、まるでぬるい。
慌てず、俺はレッドクイーンで突きを繰り出す。
何も問題はなかった。
剣先と剣先がぶつかる。衝撃で周囲の空気が揺れる。
俺はそのまま片手で悪魔の剣を弾き上げた。
悪魔は多少、後ろによろめきながらも、すぐに体勢を立て直し、俺を睨んだ。
そして小さく笑う。
「……成る程。我が相手になるだけの力はある」
そう呟いた後、悪魔は剣を振りながら身にまとう炎を一層強く燃え盛らせた。
そして叫ぶ。
「我が力、思い知るがいい、小僧！　我が名はベリアル！　炎獄の覇者ぞ！」
ベリアルが巨大な剣を叩き付けてくる。俺は後方に跳びながらそれを回避し、空中で銃を撃ちまくった。あの巨体に対しては、ブルーローズの銃弾さえ針で刺す程度のものだろう。それに、奴の体を覆う炎が一種のバリアーの役割を果たしているようだった。熱で弾丸が軟化し、効率的にダメージを与えられていない。
「飛び道具か……所詮は玩具よ！」
ベリアルは、今度は横薙ぎに剣を払ってくる。剣にも炎が絡み付いており、その剣撃と共に

炎までもが襲ってくる。レッドクイーンのお株を奪われた気がして、あまりいい気分じゃなかった。しかも向こうは常時燃えてるんだからタチが悪い。
イクシードを燃焼させながら、俺は近くの小屋に飛び乗った。
図体がデカい奴は、頭部への攻撃に弱いと相場が決まっている。
家ごと破壊する勢いのベリアルの一撃を上空に跳んでかわし、そのままレッドクイーンを振り被った。
「食らえッ！」
クラッチレバーを握りながら、一気に奴の脳天目掛けて刃を叩き付ける。
普通の悪魔なら両断できる一撃のはずだが、さすがに硬い。刃が多少めり込みはしたものの、致命傷という程の傷ではなかった。
ベリアルはよろめきつつも、空中にいる俺を素手で掴もうと右手を振り上げた。その右手を、逆に俺が悪魔の腕で掴み取る。
「……貴様！」
ベリアルが初めて動揺する様子を見せた。
俺はそのまま悪魔の腕でベリアルの体をねじ伏せようと試みたが、奴の体を包む炎が質量を持って俺の手を引き剥がした。
「……チッ！」

瞬間、空中で無防備になったところに、ベリアルの剣が襲い掛かってくる。咄嗟に右腕を盾にしたものの、剣の直撃で俺の体は後方に吹き飛ばされた。
　空中で体勢を立て直し、どうにか着地する。
「……悪魔の炎はこっちの炎とは一味違うって事か。勉強になったよ」
　言ってはみたものの、思っていた以上にあの炎は厄介だ。普通の炎と同じように熱を持ち、そして質量までも持ち合わせている。おそらくは俺の悪魔の腕と似たような――と、そこまで考えて小さく首を振った。
　あまり冷静に考えたくはない事だ。自分のこの力と悪魔の力が同じだなんて事は。
　悪魔の腕なんて自嘲気味に呼んでいても、俺はやはり自分が悪魔の力を身に付けたなんて思いたくはないのだ。本心では。
　俺に一撃を食らわせたベリアルは、追撃もしてこぬままただじっと俺の方を睨んでいた。
　何かする気なのかと警戒していると、
「貴様、その力……人間ではないのか？」
　と問うてくる。
　俺は溜め息を吐くより他なかった。
「ただの人間さ」
「戯言を！　ただの人間が持ちえる力などではない！　それは――」

　俺は言葉の終わりも待たず駆け出していた。
　こんな奴らと議論する事はない。ましてやこんな奴らに悪魔呼ばわりされる事もない。
「黙ってろ！」
　走りながら脚に斬り付ける。
　ベリアルが僅かに怯んだ隙に、俺はレッドクイーンを逆手に持ち替えていた。
「これで……眠らせてやる！」
　そして今度は下から上へ、跳び上がりながら斬り上げる。
　狙うのは奴の正中線。体の中心。それを真っ直ぐに斬り裂く。
「……1！」
　だが一撃では足りない。すぐさまイクシードを燃焼、開放。その勢いを利用して空中で上昇、回転しながらさらにもう一撃、同じ軌跡で斬り上げる。
「……2！」
　もう一回転……もう一撃！
「……3！」
　三度奴の体を斬り上げた時、イクシードの凄まじい推進力は俺の体を奴の頭上にまで運んでいた。ベリアルは大きく仰け反っている。その奴の頭目掛けて、今度は突き立てるようにレッドクイーンを構えた。

「死ねッ！」

再度イクシードが炎と共に俺の体に勢いを加える。上から下へ。重力も伴った渾身の一撃。

激しい衝撃と共に、レッドクイーンの剣先が深々とベリアルの眉間に突き刺さる。

ベリアルが苦しそうに吼えると、その身体を包む炎が小さくなっていくのが見て取れた。

今なら、いける。

確信し、奴の顔面に突き立てたレッドクイーンを引き抜くと同時に、俺は悪魔の腕でベリアルの顔面を掴み上げた。

頭だけでも巨大なベリアルのサイズに合わせるように、悪魔の腕もまた巨大化していた。そんな事、これまで試した事もなかった。できるかどうかも分からなかった。それなのに、俺は当然のようにその巨大化した悪魔の腕を操っていた。

空中に跳び上がり、そのまま地面から引き抜くようにベリアルの身体を持ち上げる。

炎の邪魔はやはり入らない。あの炎は、おそらくベリアル自身の力で生み出しているものだ。今の奴には、それを生み出す力は残っていないのだ。

「燃料切れか？」

ベリアルは何度か身体を震わせたが、悪魔の腕の力の方が奴の抵抗よりも勝っていた。

「だったらそのまま寝てろ！」

悪魔の腕で掴み上げた奴の顔面を、空中から地面に向かって一気に叩き付けた。地響きと共

に、土煙が巻き起こる。

ベリアルから手を離し、着地した俺が視界を曇らせる煙を振り払いながら奴を確認すると、まだ息絶えてはおらず、よろよろと立ち上がった。デカイだけあってさすがにタフだ。

「まだやるか？　次はもっと痛い目見るぜ」

俺の挑発には乗って来ず、ベリアルは俺の右腕を見つめていた。

「やはり……やはり、それは悪魔の……！」

「悪魔じゃねえ。人間だ。お前らと一緒にするな」

反論すると、ベリアルは苦笑する。まだ余力を残してるらしい。

「そうか……悪魔でもない、人間でもない……そういう事か。貴様も、奴と同じ……」

「奴？　誰の事だ？」

俺の問いに、ベリアルは答えなかった。

「だとすれば、今一度、力を蓄えねばなるまい！」

そう口にした瞬間、ベリアルは再度燃え上がり、やがて炎そのものとなった。

「おい！」

俺の言葉も聞かず、かつてベリアルだった炎の塊は、一気にあの黒い板目掛けて飛んでいき、そのまま穴の中に消えていった。それと同時に、板の表面を覆っていた煌きも小さくなっていく。

「……一人で勝手に納得して逃げやがった」
舌打ちし、俺は丘の上の黒い板を見つめた。
銃を撃ってみるが、傷ひとつ付いた様子はない。正直、俺の力であれを破壊できるかどうかは疑問だった。
「……まあ、いいさ。とりあえず止まったみたいだしな」
俺はあの男を追わなくてはならない。今最優先ですべき事はそれだ。
ベリアルが言った「奴」と赤い男とが、何となく、俺の中で重なっていた。



STAGE 05



フォルトゥナ城に侵入したダンテは、相棒であるトリッシュと会うべく、城内の各所を回っていた。何せ、指定されたのは時間だけで場所は伝えられていない。気まぐれな彼女がいそうな場所をダンテの方で捜さなくてはならないのだから難儀な作業だ。
城内は博物館のような役割をなしているらしく、様々な部屋に様々な物が展示されていた。中世の剣や鎧、いかにも呪術的役割があったかのような彫像。しかしそのどれも、ダンテの興味を引くような代物ではなかった。
「やっぱ眉唾かね……ここに親父がいたってのは」
本当にスパーダがこの地に存在していたというのなら、本物の魔具や魔剣のひとつも遺されていて良さそうなものだ。しかし城内にある品と言えば、どこにでもありそうな平凡な品ばかりだった。
城内はひっそりと静まり返っていた。

時折、悪魔が現れはするが、さしたる数ではなく、背負っている大剣――リベリオンを使うまでもなかった。エボニーとアイボリーと名付けられた二丁の銃で数発弾丸を撃ち込んでやれば、それで事が足りる。

「張り合いがねェな……」

呟きつつ足を踏み入れた部屋で、ダンテはふと足を止めた。

古書物特有の、黴のような臭いが鼻を突く。どうやらそこは書庫であるらしい。

部屋内に悪魔の気配はなかった。周囲を見回しながら、手近な書架に近付き、無作為に一冊を手に取ってみる。開いてみると、ダンテには理解できぬ文字で何やら書かれていた。

思わず舌打ちをする。

「何の楽しみもありゃしねェ……」

呟いて、その本を傍の机に放ると、背後に気配を感じた。人間の物ではない。そして自分が狩るべき悪魔でもない、覚えのある気配。

しかし振り返ってみると、誰もいない。どうやら書架を挟んだ向こう側にいるらしい。

「……隠れんぼがしたいのか？　それとも化粧をしてないから顔を見せられないとか言うんじゃないだろうな？」

ダンテが問いかけると、書架の向こうからは悪戯っぽい小さな笑いが返ってくる。

「逆よ。変装中だから、貴方を驚かせちゃいけないと思って」

と、ダンテの相棒であるトリッシュは、姿を見せぬままで言う。この場所が、ダンテとの会合に彼女が選んだ場所なのだろう。偶然立ち寄った部屋ではあったが、知識欲旺盛な彼女らしい選択だとダンテは思った。

「……で？　例の奴はどうなってる？」

あくまで姿は見せぬつもりらしいトリッシュに、ダンテは問うた。彼女が一体どのような変装をしているのかという点に、興味がないわけではなかったが、教団の一員として潜入している彼女に、あまり無用な時間を使わせるべきではない。

「置かれている場所については、分かってるわ」

「……どこだ？」

「この城の地下の研究施設……。でもアレの回収は後回しで良さそうよ」

そもそもダンテがフォルトゥナを訪れた目的は、魔剣教団の壊滅が目的であった。しかしダンテに先んじて組織に潜入したトリッシュがもたらしたひとつの情報が、図らずもダンテにもうひとつの目的を与える事となっていた。

それが今、ダンテとトリッシュが話題にしている閻魔刀だった。

かつてダンテの父スパーダが所有していた魔剣。だが閻魔刀は、父スパーダからダンテの兄バージルへと託され、その後、行方知れずとなってしまっていたのだ。

ダンテにとっては父と兄双方の形見と言っていい。



そうでなくとも、閻魔刀は他の魔具と比べても遥かに強大な力を有している。魔剣教団のような良からぬ連中の手に預けておくわけにはいかない代物だった。そのため、魔剣教団の壊滅と共に、閻魔刀を回収するという目的をも、ダンテは余儀なくされていたのだ。

「後回しってのはどういう意味だ？」

しかし閻魔刀の回収は最優先にせずとも良いとトリッシュは主張するのである。教団を壊滅させる前に閻魔刀を回収するつもりでいたダンテは、肩透かしを食った気分だった。

「閻魔刀は、折れてしまっている。教団の技術でアレを再生させるのは不可能よ。だからアレが奴らに利用される事もない……そういう意味」

「なるほど……」

トリッシュの説明を受けて、ダンテは肩を竦めた。

「じゃあとりあえずは連中を叩くか。ここからどう行けばいい？」

「城の裏手から森に出られるわ。その森を抜けた先に教団本部がある。大きな建物だから、すぐに分かるはずよ。この城を出るための通路は私の方で開けておくから」

「了解」

溜息を吐いて、ダンテは部屋を出ようと歩き始めたが、ふとある事を思い付いて振り返った。

トリッシュはまだ書架の陰から移動していないらしい。気配はそこにあるが、姿は見せない。

「少し寄り道してもいいか？　もう少し城を見て回りたいんでな」

トリッシュは声だけで、
「好きにしたら？　でもスパーダに関わる物はこの城には殆どないと思うわよ？」
と答えた。ダンテの意図などすっかり見透かされている。本当にこの城に父スパーダが存在していたのかどうか、それを見極めておきたいと思ったのだ。
「ま、俺にしか分からねぇような物がないとも限らねぇしな……観光さ、観光」
ダンテのその言葉に、トリッシュはやはり姿を見せぬまま、小さく笑った。

フェルムの丘の坑道を抜け、ラーミナ山に出ると、まるで真冬の最中のように吹雪いていた。標高の高い山だけに、山頂に近付けば季節を問わず雪が見られるが、この季節にこんな山道の入り口にまで雪が降るなんて事はあり得ないはずだった。
周囲を警戒しながら、山道を歩く。
ベリアルとかいう悪魔が周囲に炎を撒き散らしたように、ひょっとするとこの雪も別の悪魔の仕業なのかもしれない。だがその予想に反して、悪魔らしい気配は近くに感じられなかった。
霊峰とも言われるラーミナは、巨大なすり鉢状の形をしている。その大きく窪んだ場所にひっそりと建っているのが、かつて魔剣士スパーダが領主として存在していたというフォルトゥ

ナ城だ。フォルトゥナでも最も人を集める観光名所、という事になっている。そもそもフォルトゥナは排他的な気質のある街だから、観光客が訪れる事自体が稀なのだが、それでも外から来た人間が最も興味を引かれ、かつ実際目にして感動を覚える名所である事は確かだ。
フォルトゥナ城に向かうためには、山道を登り、五合目程の場所にある巨大な橋を渡らなくてはいけない。この橋はすり鉢状になった窪みの上を行き来できるように架けられている。
その橋を渡り、反対側の山道に移動して、そこから今度は山道を下っていくとフォルトゥナ城に辿り着けるというわけだ。
行き来に面倒な複雑な構造は、おそらく中世時代、外敵を防ぐために敢えてそうしていたのだろう。
積もった雪に足を取られないように注意しながら橋を渡っていると、何か獣のような鳥のような、表現し難い鳴き声が聞こえた。同時に、突然、橋が揺れ始める。
理由は分からないが、二千年以上も崩れる事がなかったという石橋が崩れようとしているのだと察し、俺はその前に橋を渡り切ろうと駆け出していた。
しかし、間に合わない。
橋が完全に分断され、凄まじい勢いで落下していく。無論、俺も一緒に。
着地の衝撃を和らげるために、橋の一部であった瓦礫を足場にして跳躍し、雪が深く積もっている地面に、転がるように着地する。

随分な高さからの落下だったが、どうにか怪我ひとつなかった。
自分の身体が頑丈なのか、それとも運が良かっただけか。
いずれにせよ、チンタラ山道を下らなくてすんだのだけは有り難い。こんな事でもなければ、飛び降りるなんて手段は思い付かなかっただろう。
フォルトゥナ城はもう目の前にある。
そこに向けて歩き出そうとした俺を、右腕の疼きが止めた。
「まあ……そうだろうな」
周囲に転がっている橋の破片に目をやりながら呟く。
これだけ頑丈な石橋が、偶然崩れたなんて事は考えにくい。しかもあり得ないようなこの吹雪。必然的に、それもこれも含めて誰かの仕業だという結論になる。
見上げると、フォルトゥナ城の前にそびえる門の上に、一匹の悪魔が立っていた。
今まで見た事のないタイプだ。
一見すると、以前森で目にしたトカゲのような悪魔にも似ている。だが身に着けているものが違っていた。氷だ。鎧のような氷を身に纏っている。そして片腕は霜柱のような氷で形成されていた。
フロストは、俺が橋の上で聞いたのと同じ、奇怪な鳴き声を上げながら氷の塊に変じ、そのまま俺の眼前まで飛んでくる。

後方に跳んでそれをかわしながら、ブルーローズで応戦した。
「ベリアルと似たような事しやがって！」
氷の塊から再度元の姿に戻ったフロストは俺の放った銃弾を氷の腕で防いだ。
その行動だけでも、スケアクロウなんかより遥かに上位の悪魔だと分かる。
着地した俺に、フロストは氷の腕を突き出すと、叫び声と共に弾丸のような氷を発した。
予想外の攻撃に、反応が遅れ、氷弾が左腕を掠める。鋭い痛みに思わず顔をしかめた。弾丸というよりはむしろ刃だ。掠めただけだというのに、思いの外、ざっくりとやられてしまっている。
「クソッ！」
踏み込んでレッドクイーンを横薙ぎに払うと、フロストはすぐさま後方に跳躍し、それをかわした。そしてまた氷弾を見舞ってくる。
今度はうまく転がってそれをやり過ごしたが、俺が体勢を立て直すとフロストは既に俺から距離を取ってしまっていた。
「鬱陶しい奴だ……」
呟きながら、俺は右手を何度か握っては開いた。
こういうタイプを相手にする時は、一気に押し切らなくては駄目だ。こちらの手のうちを全て見せた上で仕留め損なうと、おそらくより一層警戒を強めてくる。

それを意識しながら、まずは銃で牽制した。
絶えずゆっくりと足を動かしていたフロストだったが、銃弾が迫るや足を止め、銃弾を防ぐために氷の腕を構える。俺の期待通りの行動だった。
フロストの腕に銃弾が命中するのと同時に、俺はすぐさま右腕を突き出し悪魔の腕を奴の身体に向かって伸ばす。
俺の行動に気付いたフロストは、慌てたように上方に跳躍し、悪魔の腕から逃れようと動いた。
「おっと……！」
奴の腰のあたりから伸びている長い尾を掴むと、そのまま大きく振り回す。遠心力を付けながら、周囲の瓦礫に何度となくぶつけてやるとフロストは悲鳴のような鳴き声を発した。
「消えやがれ！」
十二分に振り回した勢いを利用して、フロストの身体を真正面にそびえる城門に向かって投げ付けた。抵抗もできぬまま、フロストは門に激突する。身に纏っていた氷の鎧が砕け散り、フロストのトカゲのような身体が露わになり、そのままどさりと地面に落ちた。そしてもがきながら溶けるように消えていく。
追撃のために走っていた俺はそれを見て足を止め、空を見上げた。
フロストが消えてなお、吹雪が止む様子はない。吹雪の原因は別の悪魔だと考えた方が良さ

そうだった。
「ま、そうだよな……」
フロストはスケアクロウなどと比べれば上位でも、ベリアルに比べれば確実に見劣りする。そんな奴に天候まで左右するような力があるとは思えない。
「って事は……まだどっかにいるって事か……」
溜息を吐きながら、俺は城に向けて歩き出した。
城門を潜れば、迷う事もない一本道だ。見る限り、悪魔もいない。安心し切って歩いていたところに、気配を感じ、俺は視線を上へと向けた。
城を囲む城壁を越えて、突然何かが飛び出してきたのだ。
咄嗟に銃を構え、撃鉄を起こす。
だが注視してみると、それはどうやら人間らしかった。
人間が、スケアクロウを抱えて跳んでいるのだ。
唖然としているうちに、その人間は落下しながら抱えていたスケアクロウを地面に叩き付けた。そしてゆっくりと立ち上がる。
それは、浅黒い肌に、切り揃えられた真っ白な髪を持った女だった。
女は何とも言えない珍妙な格好をしていた。
白いドレス——と言えばいいのだろうか、胸元に深いスリットの入った服。下着などを着け

ている様子はなく、豊満な胸が今にもこぼれ出しそうな具合だ。太腿は剥き出しで、長いブーツを履いていたが、それが却って露出した肌を際立たせている。

女が誰なのかは分からなかったが、少なくとも、フォルトゥナ出身の人間でない事だけは理解できた。フォルトゥナで生まれ育った女に、こんな扇情的な格好をする奴はいない。

では女は何者なのか——声をかけようとした瞬間、城壁から女を追うようにスケアクロウの一団が飛び出してきていた。瞬く間に女を取り囲んだスケアクロウが、一斉に女に襲い掛かる。

俺が身構えるよりも速く、女は即座にスケアクロウの動きに反応していた。

軽やかな体捌きで攻撃をかわし、どこからか取り出したナイフのような刃物で次々にスケアクロウ達を屠っていく。

俺にできたのは、女の背後から飛び掛かったスケアクロウを一匹、撃ち落とす事だけだった。

俺のそのささやかな手助けに、女は薄い笑みを浮かべて、

「一応、お礼は言っておくわ」

と言った。敵意があるようには見えない。しかしどうしたわけか、右腕がしくしくと疼いていた。だがスケアクロウは全て始末している。右腕が目の前の女に反応している可能性は十分にあった。

「……ここらへんじゃ見ない顔だな。あんた、教団の人間か？」

女に対する警戒を解かぬまま、俺は尋ねた。右腕はコートのポケットに突っ込み、隠しておいた。もしこの女が教団の人間なら、腕を見られるのはまずい。

「新入りのグロリアよ。これを機に名前を覚えてくれたら嬉しいわ」

グロリアは言いながら、右腕を差し出してくる。

握手を促してるんだろうが、それに応えて右腕を出すわけにもいかない。俺は小さく目を逸らせて、その手を拒んだ。

グロリアが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「貴方はネロでしょう？　いろいろ噂は聞いてるわ」

どうやら女が教団の人間だというのは嘘ではないらしい。そうでなければ俺の名前など知っているはずがない。俺の右腕が妙に疼いているのは、どこか近くに別の悪魔がいるか、さっきの戦闘の名残か、そんなところだろう。

「……どうせロクな噂じゃないんだろう？」

俺が肩を竦めると、グロリアはまた小さく笑って言った。

「『扱いにくいはみ出し者』、『生意気な不信心者』、『一匹狼気取りのいけすかない奴』……」

想像通り、周囲の俺に対する評価は辛辣なようだ。

「……もういいよ。こっちも自覚はしてる」

なおも俺を評した言葉を並べ立てようとするグロリアを、俺は制した。グロリアは小さく溜め息を吐く。俺は周囲を見回しながら尋ねた。

「ところで、このへんの悪魔どもはどこから湧いてるんだ？　さっきフェルムの丘で、悪魔が妙な板から湧き出してるのを見たけど……まさか城の中にも似たようなものがあるのか？」

「さあ……？　少なくとも私はそんなものは見なかったけど……？」

「手が空いてるなら、フェルムにある奴を調査してくれよ。俺は別の任務があって、そっちにかまけてる暇がない」

振り返りながらグロリアにそう告げると、彼女は俺の前に跪き、手にしているナイフを折り畳んでブーツの中に収納していた。人の目の前で、しかも大股を開いてやるような行為じゃない。ドレスが捲れ上がって、見たくもないものが見えそうだった。俺は小さく息を漏らし、顔を背けた。

「残念だけど、私も別任務……先行している部隊の救援に行かなくちゃいけないの。でも貴方の情報は伝えておくわ。ありがとう」

礼を言ってはいるが、表情は一切変わらない。掴めない女だ。そもそもこんな女が教団にいた事自体、俺は知らなかった。あまり公的な行事に顔を出さないせいもあるだろうが、それにしても、俺以上に「場違い」って言葉がピッタリくる人間は珍しい。

「じゃあ、私は行くわ。貴方に神のご加護があらん事を……」

そう言い残して、グロリアは去っていった。その背中を見ながら、俺は鼻息を漏らす。

「神、ね……神がいるならこんな状況にゃなってないだろうに……」

あんな女でも神を信じているのかと思うと、少し滑稽だった。



フォルトゥナ城の中に足を踏み入れたのは何年ぶりか、正確なところはよく覚えていない。キリエと一緒に、孤児院の子供達を連れてきたのが、最後だったと思う。あの頃、まだ教団騎士にもなっていなかったはずだから、三年以上は前って事だろう。歴史上、宗教上重要な名跡とは言え、何度も頻繁に足を運ぶような場所じゃないし、古い建物特有のひやりとして少し湿った空気も好きじゃない。

城内に、人の気配はなかった。

ブーツが床を打つ硬い音だけが空しく響く。

赤の男がこの城に潜入しているとしたら、奴の目的は一体、何なのか。

城に安置されている美術品の類を盗み出す？

まあ、可能性はゼロじゃない。しかしそれをするなら、誰にも見られぬよう、ひっそり忍び込んでやればいいはずだ。教皇を衆人環視の中でブチ殺して騒ぎを起こした後で物盗りに励むとは考え難い。

奴の目的が分からない以上、俺はしらみ潰しに城の中を調べ回るしかなかった。

時折、ひょっこりと悪魔が現れるのでそれを撃退する。

グロリアは見ていないと言ったが、やはり城の中にも悪魔が現れるための穴が存在していると考えて間違いはなかった。そうでなければこうも城の各所に出現する理由に説明が付かない。ひょっとすると、赤の男が何らかの方法であの板を設置したという可能性もあった。少なくともあの男の足跡を追うように悪魔が現れている。それは事実だ。

考えながら城の各部屋を見て回っているうちに、俺は蔵書室へと辿り着いていた。他の部屋と違い、そこには微かに、誰かが足を踏み入れた証拠が残されていた。蔵書のうちの一冊が、無造作に机の上に投げ出されている。こんな状況下で暢気に読書に耽る奴は、例の赤の男以外に考えられない。

机の上の本を手に取り、中に目をやる。古文書なのか、俺にはほとんど理解できない文字で書かれていた。それでも昔習った記憶を頼りに理解できる単語だけを拾って読み進めると、どうやら悪魔学の本らしい事が分かる。

「殺人犯が悪魔のお勉強か……？」

呟き、ページをめくるうちに、背後に気配を感じた。

慌てて本を投げ出して振り返り、銃を構える。

そこにいたのは、見慣れぬ鎧姿の騎士だった。巨大な盾とランス。目にした事はない装備だが、鎧に刻まれている紋章で、間違いなく教団の人間だと分かった。安堵しつつ、俺は右手を

隠しながら苦笑する。

「脅かすなよ。もうちょっとで撃つとこだった」

俺の言葉に、騎士は何も言わなかった。ただじっと、俺の前で立ち尽くしている。

「悪魔退治してるのか？　それとも、あんたも例の男を追ってるのか？　ま、どっちでもいいけど、邪魔はするなよ。俺は今、調べ物中でね」

騎士に背を向けて、俺は再度本を手に取った。奴が何かを調べたかったのなら、それが何かを知りたい。そうすれば、奴を追う足がかりにはなる。

それにしても、騎士は一言も言葉を発しなかった。挨拶のひとつくらいはあっても良さそうなものだ。

「無視かよ……嫌われたもんだ……」

わざと相手に聞こえるようにそう呟いてみると、唐突に騎士が動いたのが気配で分かった。

再度振り返ると、騎士は手にしたランスを俺目掛けて突き出している。その槍先を、手にした本で挟み込んで受け止めると、俺は舌打ちをした。

「いくらなんでもそこまでされる覚えはねェな……」

ランスを下に叩き落としながら、鎧を蹴り付ける。騎士がよろめきながら後退したが、あくまで俺とやり合うつもりらしく、すぐさま体勢を立て直して身構えた。

「……分かったよ。やってやるよ」

背負っていたレッドクイーンの柄を捻り、俺はそう告げた。

喧嘩なんてしてる暇はないが、こうなれば仕方がない。

騎士の持つランスにも、どうやらイクシードが仕込まれているらしい。轟音を立てながら、凄まじい速さで突進と共に突きを繰り出してくる。

それをかわしながら、俺はレッドクイーンを横薙ぎに叩き付けた。その一撃は盾で防がれ、大きく弾かれる。

「……硬いな」

大きく仰け反るような形になったところに、再度突きが飛んできたが、ランスの攻撃は直線的ゆえに回避しやすい。もう一度身をかわして斬り込んだ。だが騎士の左半身を覆う巨大な盾に阻まれてしまう。

ランスの方は特に警戒する程の武器じゃないが、盾の方は大した物だ。レッドクイーンの一撃に耐えられる防具なんてそうはない。俺が目にした事がないのも合わせて考えると、教団騎士に配備された新型装備らしい。その新型装備に自信があるから俺に喧嘩を売ってきた、そんなところかもしれない。

こういう時、普通なら盾のない右半身を狙うか、或いは背後を取るかするべきだ。だが敢えてそうしなかった。あくまで騎士の盾に剣を打ち込み続けた。そうしなければ負けを認める事になるような気がする。これが喧嘩なら尚更だ。相手の自信を打ち砕いてこそ勝ったと言える。

レッドクイーンを担ぐように構え、渾身の力で振り下ろした。弾かれても再度そのまま叩き付けた。そうして幾度となく打ち込んだ後、騎士の持つ盾に亀裂が入ったのが見て取れた。

すぐさま盾を蹴り付けると、盾が粉々に砕け、騎士が大きく後ろへと吹き飛ぶ。

俺は後を追うように駆け寄って、止めにもう一撃、盾を失って無防備なその鎧の胴を薙ぎ払った。

妙な手応えだった。

まるで中身がないような、空虚な感触。

よろめいた騎士は、そのまま力なく膝を突くと、その場に崩れ落ちた。

そして鎧だけが床に四散する。

近寄ってみたが、やはり中に人間は入っていない。鎧だけだ。

散らばっている鎧の各部から、緑がかった光のようなものが立ち昇っていく。俺の右腕が、それに僅かに反応を見せた。

「悪魔……？」

だがその光はすぐに消え失せてしまう。俺の右腕の疼きもすぐに治まった。

その場にしゃがみ込み、俺は鎧の一部を手に取ってみる。右腕は特に反応しない。

「鎧に悪魔が取り憑いた、ってとこか……？」

だが考えたところではっきりとした答えを出せるわけじゃなかった。

「時間も食ったし、任務に戻るか……」

鎧を投げ捨て、大きく息を吐く。

ひとまずは、まだ訪れていない部屋を見て回る事に決めた。

城内には悪魔に代わるように、今度は鎧騎士が城を徘徊していた。そして奴らは当然のように俺を襲ってくる。ブチのめすとやはり鎧は空っぽで、人間は入っていなかった。相手が人間じゃないと分かっていれば、悪魔の腕を隠しておく事もない。そこだけは気が楽だった。しかしこれだけ大量の鎧が悪魔に取り憑かれたという事が、どうも解せない。

教団騎士の新型装備だとしたら、それは教団本部に安置されていたはずだ。となると、既に教団本部にも悪魔どもが入り込んでいるという事になる。

「嫌な予感がするな……」

呟き、俺は歩調を速めた。

教団本部にはクレドもいる。あれだけの男が、そうも易々悪魔の侵入を許すとは思えないが、万が一という事もある。

赤の男を早々に捕らえて、本部に戻らなくてはならない。

だが蔵書室を最後に、奴の手がかりらしい物は何も得られなかった。

焦りつつも城の中庭に出ると、城内に入る前よりも一層強く吹雪いている。数メートル先も見通せないような有様だった。

その吹雪の中を、青白い光を放つ女が二人、踊るように宙に浮いていた。

少なくとも人間ではないだろう。しかしそれ程凶悪な存在にも見えない。雪の精と言われればそんな気もする。

「この吹雪はあいつらのせいか……」

ゆっくりと近付いていくと、二匹の精は俺を誘うように手招きをする。それがむしろ逆にキナ臭い感じだった。警戒を強め、足を止める。

と、唐突に地響きが起こった。それと同時に数メートル向こうから、巨大な何かが飛び出してくるのが見える。巨大な口。醜悪な叫び。

跳躍してそれをかわすと、吹雪が次第におさまり、そいつの姿がはっきりと見えるようになった。

「なるほどね……それが本体ってわけだ」

現れたのは、蛙だ。バカデカい蛙。

その蛙の頭に、触角のようなものが生えていて、それが青白い二匹の精と繋がっている。たぶん、あの精で人を誘い込んでおいてパックリ丸呑みにする、ってつもりだったんだろう。それにしてはお粗末な餌だ。あんな怪しい物にほいほい誘われる奴なんているわけもない。

「……クソッタレが！　殺し損なったわ！」

と、蛙は言った。思わず耳を塞ぎたくなるような酷い声だ。それに訛っているというか、ど

うにも発音が悪すぎて聞き取り難い。ベリアルって奴がまともに喋ってただけに、より酷く感じる。

「やれやれだ……蛙は苦手なんだよな……」

俺が呟くと、蛙は凄まじい鼻息を漏らし、大口を開けて叫んだ。

「誰が蛙じゃッ！　このボケがッ！」

叫びと共に汚らしい唾が飛んできたので、俺はそれをかわした。人間の言葉を解している以上、知性はあるんだろうが、絶望的に品性に欠けている。悪魔にもいろんな奴がいるって事だ。

「このバエル様を馬鹿にしやがってッ！　丸呑みにすッぞ貴様ッ！」

溜め息も出てこない。

本音を言えばこんな奴の相手なんてせずにこの場を去りたいところだ。だがそれができない理由がふたつあった。

ひとつは、この中庭を抜けなければ辿り着けない部屋がある事。赤の男を追うためには、結局こいつを始末して先へ進むしかない。

もうひとつは、バエルとかいう蛙の背後に、フェルムにあったものと同じデザインの黒い板が立っているのが見えたからだ。

ベリアルを倒した時に、あの装置は停止した。それならばバエルを倒せばこちらの装置も停止する可能性が高い。

「さっさと片付けろって事だな……気分も悪いし」

呟くと、バエルはまた大口を開けた。俺は両手で耳を塞ぐ。

「ブチ殺したるわ……クソガキッ！」

それでも奴の声は十分耳に届いた。まったく、不愉快だった。

バエルが全身を大きく震わせる。

氷に覆われた奴の背中から、弾丸のように氷の塊が射出されるのが見えた。フロストと似たような攻撃だが、直接俺を狙うのではなく、一度上空に撃ち出し、後は落下の重力に任せているらしい。大雑把な攻撃だが、俺を直線的に狙ってくるよりも遥かに厄介だった。何せ氷の着弾地点が読み難い。

地面に映った影を頼りに移動し、直撃を防ぐしかない。

俺が氷弾にかまけている隙に、バエルの方はあんぐりと口を開いていた。そのまま吼えながら俺に向かって突進してくる。

上空に跳んでそれを回避し、そのまま落下際に奴の前足に斬り付けると、確かな手応えと共に、不快な色の体液が飛び散る。

「……うおッ!?」

思わず飛び退いていた。正直、そんな液体で服を汚すのは勘弁願いたかった。一張羅ってわけじゃないが、この後も同じ服を着続けなくてはならないのだ。

「この……ッ！」
後ろに下がりながら、銃を乱射する。ベリアルだのフロストだのに比べれば、バエルの外皮は柔らかなものだった。銃弾も確実に奴にダメージを与えている。しかしいかんせん、その身体が巨大過ぎた。小さな銃弾で奴を仕留めるには、多大な時間を浪費する事になる。
「チンケな真似しやがってボケがァ！　ガツンと向かって来んかい！」
叫びながら、バエルは一度、身体を収縮させると、唐突に上空に跳び上がった。思わず目を見開く。想像以上に、奴の足は長かったからだ。そしてその足は、絶大な跳躍力を持っていた。見る間に、バエルの巨体が俺の上空十数メートルの高さにまで上昇している。
「マジかよ……！」
種類で言えば、さっきの氷弾と似たような攻撃だ。だがその影響範囲が圧倒的にデカい。
バエルの落下地点を示す奴の影から逃れるように、俺は走った。
半ば飛び込むように前方に転がり、どうにか影の中から脱すると、紙一重の差で奴の巨体が地面に激突する。地響きが起こり、地面に積もっていた雪が埃のように舞い上がった。
振り返ると、中庭に足を踏み入れた時と同様、舞い上がった雪で視界が覆われている。
突然、前方から青白い光が飛び出してきた。
例の、女形の触角だった。
さっきはゆらゆらと揺れる程度の動きしか見せていなかったくせに、今度は機敏な動きで俺に攻撃を繰り出してくる。

「……こういう使い方もできるってわけか」
銃と剣とで応戦はするが、二匹同時のコンビネーションに思いの外、手を焼いた。斬り付け、蹴り飛ばし、どうにか俺から離れるように仕向けてはみるのだが、元よりこいつらはバエルの巨体からブラ下がっているだけの存在だ。攻撃の威力を殺されてしまう。
一方で、俺は雪埃の奥で息を潜めているバエル自身にも注意を払う必要があった。触角に注意を向けておいて俺を飲み込もうとしているのは分かっている。
背後に気配を感じ、俺は慌てて跳び上がった。
予想通り、バエルが俺を飲み込もうと突進してきていたのが、足下に見える。
そのまま上空から銃弾を放ったが、奴の背中は氷で覆われていて、それが盾の役割を果たしていた。
「死にやがれ……カスがッ！」
バエルが叫びながら、身体を震わせた。
舌打ちをしたが、気付いたときにはもう遅い。奴の背中から、氷の弾丸が無数に発射される。
俺はバエルの頭上、その氷弾の射線上にいた。空中で身動きも取れぬまま、複数の氷弾の直撃を受けた。
「ぐ……ッ！」

衝撃で吹き飛ばされ、そのまま中庭を覆う壁に激突する。
着地し、体勢を立て直すと、バエルは大きく息を吸い込み胸を膨らませていた。
叫び声と共に、バエルの口から吹雪が吐き出される。
瞬く間に吹雪が中庭を埋め尽くし、再び俺の視界を奪った。
再び触角が俺の目の前に現れ、俺に攻撃を仕掛けてくる。
「馬鹿のひとつ覚えだな……！」
氷弾のダメージは大したものじゃないが、何度も食らえば身体がもたない。バエルの巨体での突進をかわすには上空に跳ぶしかないし、上空に跳べば氷弾が襲ってくる。
同じ轍を踏まないためには、奴が突進を繰り出す前に止めてしまう事だ。
そう考え、俺は触角の一匹だけに狙いを絞り、それに対して攻撃を繰り返した。
本体ではない以上、おそらくこの触角にいくら攻撃したところでバエル自体を倒せるわけではないだろう。だがそれでも、何度か攻撃をするうちに、触角の動きが鈍くなっていくのが分かった。
頃合いを見計らい、俺は悪魔の腕で触角女の足を掴んだ。逃げようともがくが、離しはしない。
「隠れんぼは終わりだ……出て来いよ！」
叫びながら、俺は触角を思い切り自分の方に引き寄せた。吹雪に隠れ触角を操っていたバエルが、耐えかねたように姿を現す。

「貴様……ッ！」
叫んだバエルの大口に、俺は意を決して飛び込んでいた。
もうこんな奴の相手をするのはうんざりだった。一刻も早く片を付けるべきだ。
巨体を外側からチマチマ削っていくよりも、奴の体内に飛び込んで内側から破壊した方が手っ取り早い。
「おおおおおッ！」
イクシードをフル燃焼させ、あたり構わずレッドクイーンを振り回す。奴の体液が雨のように降り注いだが、そんな事に文句を言っていられない。
「くたばれ！」
レッドクイーンで斬り上げながら、奴の体内を突き破って外に飛び出すと、バエルの巨体が力なく地に伏した。その眼前に着地すると、バエルはまだ息があるらしく、俺を睨み付ける。
「ク……クソが……調子に乗りゃあ、がって……！」
言葉とは裏腹に、明らかに虫の息だった。
「文句を言いたいのはこっちだ……コートをドロドロにさせやがって……！」
ぼやいてはみたが、まさか悪魔にコートを弁償しろなどとも言えない。
「覚えとけよ、ガキ、が……ッ！　わしを倒しても、わしの……兄弟達が、カタキを……！」

なおも喋り続けるバエルにムカついて、俺は咄嗟に奴の眉間を悪魔の腕で殴り付けていた。

その衝撃でバエルの巨体は地面を滑り、背後の壁に激突する。それで多少、溜飲が下がった。

バエルは数度、もがいた後、動かなくなってしまう。

「やれやれだ……洗濯する暇もないしな……」

足元の雪をひと摑みして、奴の体液でドロドロになったコートや髪の毛に擦り付ける。気休めにしかならないが、何もしないよりはマシだ。

これで先に進めると思い、歩き出そうとして、俺はすぐに足を止めた。

「兄弟……？」

バエルをブン殴る前の奴の言葉を、ようやく思い出したからだった。

慌てて、中庭の端に置かれている例の黒い板に目を向ける。フェルムの時と同様、板の一面が妖しく煌き、魔界に繋がる穴を形成していた。そしてその穴の奥から、無数の叫び声が聞こえてくる。

恐る恐る黒い板に近付きながらその様子を窺うと、穴の向こう側にはバエルそっくりの悪魔達が一斉にこちらに向かってきているのが見えた。

「冗談じゃねェぞ……」

すぐさま駆け出して黒い板まで辿り着き、板を斬り付けてみたが、小さな傷を付けるのがやっとだった。時間をかければ破壊するぐらいはできるかもしれないが、そんな事をしてるうち

に奴らが穴から出てきてしまう。

「蛙はもうたくさんだってのに……！」

どうやればこの装置を止められるのか、あちこちいじってはみたが、よく分からなかった。

「クソッ！」

苛立ちながら、傍に転がっているバエルの死体の方に走り、そのまま飛び乗った。ぶよぶよとしたバエルの身体は、格好のジャンプ台になる。

弾みを付け、振り返りざまに黒い板の方に向かって跳躍した。

バエルの兄弟達は、もう鼻っ面を黒い板から覗かせている状態だった。跳躍する事で、うまい具合にその鼻っ面に手が届くようになる。

「悪いが閉店なんだよ！　出直して来い！」

叫びつつ、先頭の奴を悪魔の腕で殴り付ける。こちら側に出ようと不安定な体勢だったその一匹が大きく後ろに吹き飛び、それに巻き込まれた後続の連中の足も止める事ができた。

僅かにできた猶予の間に、俺はまた黒い板を調べ始めた。

板の足元に、小さな装置のようなものがあり、それが電源スイッチのように瞬いてるのを見付け、確証もないままそれに触れてみる。俺の右腕と反応したように、黒い板の煌きが収縮していくのを見届け、俺は嘆息した。

「二度とやりたくねェ相手だな……いろんな意味で」

目を向けると、バエルの死体はまるで雪が溶けるように消えていった。



STAGE 06



城内の探索を続けてはいたが、依然、赤の男は見付からないままだった。
一度本部に戻るべきかもしれない。そう考えた矢先、俺は奇妙な通路を発見していた。
フォルトゥナ城には数回、訪れた事があるが、そんな場所に通路があったという記憶がないのだ。しかも中世の建築物であるフォルトゥナ城に似つかわしくない、近代的な建築様式だった。おそらく最近になって増設されたものなのだろう。
迷ったが、その通路の先に進む事に決めた。
通路は明らかに人目を避けるように設置されている。誰かが良からぬ目的のために設置したという臭いがした。
いくつかの部屋を抜けると、そこにはさらに奇怪な空間が広がっていて、俺は思わず息を呑んだ。
まるで何かの実験施設のようだった。

部屋を覆う壁のひとつはガラス張りになっており、ガラスの向こうの部屋には机や椅子が置かれている。それと共に、巨大な試験管のようなものも設置されていて、その中には折れた刀が浮かんでいた。不思議な光景だった。けれどどういうわけか、その折れた刀に懐かしさのようなものも感じた。

右腕が疼く。

強い疼きだった。

歌劇場で赤の男と遭遇する直前も、同じような感覚だったのを思い出し、周囲に目を向ける。奴が傍にいるのではないかと思ったのだ。だが俺の予想とは裏腹に俺を出迎えたのは、

「……やはり、来たな」

という見知らぬ声だった。

声は、部屋の上部に設置されたスピーカーらしき物から発せられていた。

見るとガラス壁の向こう、奥の方からゆっくりと一人の男が姿を現す。男は教団の法衣の上に白衣を羽織っていた。だがその顔には全く見覚えがない。

「……あんた誰だ？」

俺が問うと、男は馬鹿丁寧なお辞儀をし、

「私か？　私の名は、アグナス……」

とやはりスピーカーを介して答え、さらに言葉を続けた。

「仕事柄、人にはあまり顔を、し、し、知られてないがね……私の名前くらいは、き、聞いた事があるだろう？」

確かに、アグナスというその名に覚えはある。確か、技術局を統括している男だ。カリバーンやレッドクイーンに搭載されているイクシードの基本システムを構築した人間でもある。

「そんなお偉いさんが、こんなトコで何してんだよ？」

俺の言葉に、アグナスは唐突にやや折り曲げていた上体を仰け反らんばかりに起こし、手にしていたペンで俺を指した。

「こんなトコ、だと！　く、くくく口を慎め若造！」

どうやら怒らせてしまったらしいが、その怒りの理由がよく分からない。俺はただ肩を竦めるしかなかった。

アグナスはガラス壁の向こうで右往左往しながら、

「噂通りの生意気な小僧だ……」

と呟いている。

「……おい！　だからこの部屋は何なんだよ？　教団が管理してる場所なのか？」

尋ねると、アグナスは足を止め、こちらに視線を向けた。

その顔には笑みが浮かべられている。狡猾という言葉がぴったりくる笑いだった。

「……それは教えられんな」

「秘密の場所、って事か？　だったら詮索するつもりはないけどな、教皇を殺した奴が来たかどうかだけ教えてくれよ。そいつを追うのが仕事なんでね」

見たところ、俺が入った入り口以外に、この部屋に出入りできる場所はない。ガラス壁の向こうはどこかに繋がっているのだろうが、アグナスがいる以上、向こう側にあの男がいる可能性は低そうだった。だったら引き返して別の場所を捜した方がいい。

「お前はもう仕事をする必要は、な、な、ないよ」

唐突なアグナスのその言葉に、俺は首を傾げた。

「……何？」

「ここを見た以上、貴様は死なねばならんのだ」

銃や剣を突き付けられて言われれば、せめてビビったふりのひとつもしてやれるが、ガラス壁の向こうからスピーカーでそんな事を言われてもまるで迫力がない。

「秘密の場所を見たら死刑って事かよ？　そんな戒律あったっけ？　それとも、俺が、お、お、お、覚えてないだけか？」

奴の喋り方を真似してやると、アグナスは顔をしかめ、それから何かスイッチのような物を、白衣のポケットから取り出した。そのボタンが押されると共に、俺のいる部屋の各所から、唐突に何かが飛び出してくる。

初めは、剣かと思った。実際、そんな形をしていた。

だが空中に飛び出したその剣は、すぐさま鳥のような姿に変じた。どう見たってこの世の生き物じゃない。

「悪魔……かよ」

アグナスは勝ち誇ったように笑っている。

「グラディウス……私はそいつらをそう名付けた。なかなかのものだろう？」

アグナスの説明と共に、三匹のグラディウスが突進してくる。二匹はうまくかわせたが、もう一匹の突進は頬を掠めた。小さな痛みを感じ、頬を指で撫でると、血が出ているのが分かる。

「魔界に棲むハ虫類を剣と交配して生み出したのだ。べ、べ、ベースとなったのはなかなかの名剣でね……人間くらいは簡単に、り、両断するよ」

いかにも技術局の人間らしく、聞きもしない蘊蓄を垂れやがる。だから俺は技術局の人間があまり好きじゃないのだ。基本的に。

向かってくるグラディウスを銃で撃ち落とすと、鳥から剣の形態に戻って床に突き刺さった。それで死んだのかと思ったが、再び剣から鳥に戻って飛び始める。理解に苦しむ生き物だ。しかもこれを技術局が作ったというのだから悪趣味極まりない。

「……こんな物作ってどうする気だ！　教団騎士に配備しようってのか？」

グラディウスをあしらいながら叫ぶと、アグナスの苦笑がスピーカーから漏れ出す。

「それもお前が知る必要はない……恨むなら、ク、ク、クレドを恨みたまえ……あいつがお前

にダンテの追討を、め、め命じるから、こんな事になるのだ……」

「……ダンテ？」

クレドが俺にダンテの追討を命じた、とアグナスは言った。という事は、おそらくダンテというのは、あの、教皇を殺した赤の男の事なのだろう。それは分かる。だが問題は、何故、アグナスはその名を知っているのかという事だ。

奴は唐突に現れた正体もよく分からぬ兇漢ではないのか。

「なんであんたが奴の名前を知ってる！」

アグナスはそれ以上、何も答えなかった。俺の方を見てはいるが、頻繁に手にしているメモのようなものに目を落とし、何かを書き込んでいるようだった。

「実験台扱いかよ……！」

会話が終わりとなれば、グラディウスどもを騙し騙し相手する必要もなくなる。俺はすぐさまそのうちの一匹を斬って落とした。刃に弾かれたグラディウスは、鳥から剣へと変化し、床に突き刺さる。

「実験台ってのは、おとなしい奴ばかりとは限らないんだぜ……？」

俺は、グラディウスを悪魔の腕で拾い上げた。アグナスの方はあれこれメモするのに必死らしく、俺の右腕の異状には気付いていない。

「食らえッ！」

手にしたグラディウスを一気にガラス壁に投げ付ける。それに気付いたアグナスは身を竦ませ、

「うおッ!?」

と叫んだ。直後、グラディウスがガラス壁に激突する。

凄まじい衝突音と共にグラディウスは砕け散ったが、ガラス壁には傷ひとつ入らなかった。

アグナスが笑う。

「……む、むむ、むむ無駄だ！　このガラスはサイクロプス級の悪魔の腕力を、き、き基準に強度を設定してある！　お前なんぞに破壊など、で、できん！」

言葉の割には動揺しているようにしか見えない。

俺は、

「知るかよ！」

と叫んで再び別のグラディウスを捕らえ、投げ付けた。

ガラス壁が震動する。

しかし、割れない。

アグナスはまた笑った。だが、やがてその顔から笑みが消えていた。おそらく、俺の右腕に気付いたのだろう。メモを取る事もやめて、ガラスにへばりつくようにして俺を見つめている。

三度目にグラディウスを投げ付けた時、ガラス壁に小さな亀裂が入った。アグナスは俺の右

腕に夢中で、それに気付いてはいない。
　右手を握り締め、俺はガラス壁に向かって走り、跳んだ。
　右腕を大きく振りかぶり、悪魔の腕で亀裂の入った箇所を殴り付ける。
　確かな手応えだった。ガラス壁に、一斉に蜘蛛の巣のような亀裂が広がっていく。
　それに気付いたアグナスが、
「ぬあッ!?」
　と声を漏らすと、ガラス壁が崩壊した。
　その衝撃に、アグナスが転倒する。
　俺はレッドクイーンをその喉元に突き付けた。
　アグナスは呆然と俺を見つめていたが、やがて我に返ったように、
「……そ、そそそれは、悪魔の力じゃないのか!?　な、ななな何故お前なんかがその力をつつ使える!?」
　と叫んだ。
　俺は舌打ちをする。
「それはお互い様だろ……なんで技術局が悪魔なんか作ってやがる?」
　アグナスは俺の問いには答えず、突き付けられた刃にも構わぬといった様子で身を起こし、俺の右腕を覗き込んだ。

「……素晴らしい」
　呟きながら、アグナスが俺の右腕を手に取ろうと近付いてくる。俺は思わず後ずさっていた。
「何たるパワー……何たる神々しさ……最高だ、これは……」
　まるで足を止める気がないアグナスを止めようと、俺はレッドクイーンを振りかぶった。
「人の話を聞きやがれ！」
　言葉と共に、もう一度アグナスの首に刃を突き付ける。
　アグナスは、その刃を両手の指で摘んだ。すぐに引き戻そうとするが、指だけで押さえ込まれているレッドクイーンが、ピクリとも動かせない。それは異様な力だった。
　アグナスは怪しく笑い、俺を見つめる。
「……いいだろう。お前のその腕に敬意を表して教えてやろう。教団の裏の顔をな」
　唐突にアグナスがレッドクイーンから指を離したので、俺は少しよろめいた。また押さえ込まれるかもしれないと思い、レッドクイーンを背負って銃を手に取り、突き付ける。
　だがアグナスはそれに怯える様子もなく、まるで独り言のように喋り始めた。
「数年前から……私は悪魔の研究を行っている。それはただ悪魔の事を知るためではない。悪魔が持つ圧倒的な力を、人間の物にするためだ」
　そのアグナスの物言いはやたらと芝居がかっていた。そのせいか、奴は言葉を途中で詰まらせたりもしなかった。

「そして悪魔の力を手に入れた選ばれし者が、その他の脆弱で哀れな人間達を導く……それこそが教皇様の唱える理想郷の姿なのだ。その理想郷を実現させるために、私は日夜研究に勤しんでいるというわけさ」

呆れるしかなかった。

「下らねェ理想郷だ……しかも教皇がブチ殺された今じゃ、意味なんかないだろ……」

俺がそう指摘すると、アグナスはおかしそうに笑った。

「安心したまえ……教皇様はご存命だ……生まれ変わったのだ！　天使としてな！」

「……天使？」

「悪魔の力を手にした選ばれし者、という事だ。心正しき者がその力を持てば、それはもはや悪魔ではないだろう？」

「だから天使か？　お前ら頭がどうかしてるのか？」

これ以上、付き合っていられないと思った。こいつをブチのめして眠らせて、クレドに報告する必要がある。クレドなら、こんな狂った思想を許すはずがない。

引鉄にかけた指に力を込めた瞬間、アグナスは思い出したように、

「ちなみに、私もその天使でね……」

と呟いた。

アグナスの身体から何か強烈なエネルギーが放射される。

「くッ……!?」

予想もしていなかったせいで、まともにその衝撃を受け、俺は怯んだ。よろめいたところに、何かが天井から飛び出し、凄まじい勢いで近付いてくる。

それは鎧だった。蔵書室で俺を襲い、城の中を徘徊していた、中身のない鎧騎士。飛来した三体の鎧騎士が、一斉に、俺の身体にランスを突き立てる。

「ああああッ！」

両腕をやられた。それに腹も。激痛に顔が歪む。

抵抗もできず、俺はそのまま鎧騎士に壁に叩き付けられた。俺に突き立てられていたランスが貫通し、俺を壁に縫い付ける格好になる。

「……がはッ！」

口から血が溢れ出していた。

鎧騎士達は、アグナスの背後に並び、整列する。アグナスはそれを見て、満足そうに頷いて見せた。

「……これも研究の賜物でね。う、美しいだろう？　この、白銀の鎧！」

そんな事を言われたところで、既に俺の意識は朦朧としている。視界も徐々にぼやけてきている。だが俺が何の反応もせぬ事が気に入らなかったらしく、アグナスは俺の腹に刺さっているランスの柄を掴むと、それを乱暴に揺すった。

「おおあッ⁉」

文字通り、腹を中から掻き回され、震え上がるような痛みが全身を駆け巡った。アグナスはひとしきりそうした後で、俺の顔を覗き込み、

「まだ話は終わってないぞ。お前が聞きたいと言ったんだろう？」

と言った。明らかに目がイッている。

「この鎧はな、私が偶然手に入れたとある破片を培養して生み出した物だ。とある破片とは何か分かるかね？」

俺の答えを待っているのか、アグナスが言葉を止める。俺は力なく首を横に振った。どうにかして今の状態から逃れる事だけを考えていたかった。そのためには、アグナスに勝手に喋らせておくのは構わない。

アグナスは嬉々とした表情で続ける。

「とある破片……それは、あの、伝説の、く、くく黒い天使の鎧だ！ お前にはその価値は分かるまい……戦いに敗れ忽然と姿を消した黒い天使の鎧が！ あろう事かこのフォルトゥナの浜辺に打ち上げられていたのだ！ あの、閻魔刀と共に！」

アグナスは振り返り、部屋の中央に置かれている試験管のような物体を指差す。折れた刀が浮かんでいるアレだ。正直、そんな事はどうでも良かった。だが、おとなしく聞いているしかなかった。身体に力が入らない。全身が痺れている。息をすればする程、息苦しさが増してい

く。どうやって抜け出すのか、どうやって、どうやって……それだけを考えているはずなのに、何も浮かばない。

「私は神に感謝した。これが神の起こし賜うた奇跡でなければ何だ？ 伝説の魔剣の一振りと、伝説の悪魔が身に着けていた鎧の破片！ そのふたつが同時に、我らの元に運ばれたのだ！ これこそは神の意思だ！ 自分に成り代わり世を統べよ、と！ 神は仰っておられる！ そして私はこの鎧を生み出した！ 魔界から悪魔を呼び出し！ その無数の魂を核にする事で動く忠実無比な神の兵隊！ そう、これはまさに天使！ 白い天使！」

アグナスの語る鎧騎士の理屈なんぞはどうでも良かったが、ただひとつ、アグナスの言葉の中に腑に落ちない点があった。

「……悪魔を、呼び出した、だと？」

半ば独り言のような俺の問いかけに、アグナスは俺を見やった。

「あの妙な板っきれは……お前が……」

フェルムの丘とフォルトゥナ城で目にした黒い巨大な板。悪魔の這い出てくる穴を生み出す装置。その事だろうと直感的に感じていた。

「……ああ、地獄門だな？」

アグナスは満面の笑みでそう答えた。

「地獄門……？」

地獄門。
聞き覚えのある単語だ。
スパーダがかつて封じた、人界と魔界とを繋ぐ存在……。
虚ろな意識の中で、俺は街の中央部に存在する巨大な聖碑の事を思い出していた。
今は聖碑と呼ばれている。その巨大な黒い板は、かつて魔界と繋がっていたのだと。それをスパーダが封じたのだと。そんな御伽噺が、フォルトゥナでは信じられている。
フェルムにあったものも、城内にあったものも、巨大ではある。見上げるような大きさだ。
だが街の中央部に存在する聖碑は、それよりももっと遥かに巨大だ。雄大とさえ言っていい。
あれが本当に魔界と繋がっていたという事なのだろうか。俺があり得ないと聞き流していたあの話が、真実だったと――。
「あれはオリジナルを元に私が設計した……い、言わば小地獄門、というところだ。り、り、理論はかなり早い段階で解明していたのだが、なかなか出力が安定しなくて困っていたんだがね。それも強力な、ま、まま魔具を動力とする事で解決した……いい出来だろう？」
もはやアグナスの言葉は俺には理解できなかった。言葉もはっきりと聞き取れない。
地獄門。小地獄門。悪魔を呼び出す。教団が。白い天使を。閻魔刀。神。
朦朧とする意識の中で、この数分間のうちに聞いた耳慣れぬ単語が浮かんでは消えていく。
アグナスはまだなお何事かを嬉しそうにしゃべり続けていた。

その声が、随分と遠くに感じられるようになっている。
何度も指に力を込めたが、数センチ動かす事もできなかった。悪魔の腕さえ、今の俺には動かす事ができない。
自分の無力さに、俺は小さく笑った。
アグナスが言葉を止める。
「……何がおかしい？」
「――――」
俺はわざと奴には聞き取れぬ声で呟いた。
アグナスが歩み寄り、耳を傾けてくる。
「何？　なな何だ？」
「クソッタレ、って言ったんだよ……」
そのまま血の混じった唾を、アグナスの頬に吐きかけた。アグナスはそれを袖で拭いながら、俺を睨み付ける。
「じ、じ、じ自分の立場がよく分かっていないようだな……！」
再度、アグナスは俺に刺さっている槍を捻り上げた。
もはや痛みは感じない。声も出なかった。だが身体だけは反応するように仰け反ってしまう。
「だが喜ぶがいい。次の研究材料はお前に決めた。その腕はじ、じ、じっくりと、調べさせて

もらうよ……実に興味深い」
その右腕を、アグナスの顔に叩き付けてやりたい。
だが動かない。動かせない。
力が、入らないのだ。
力が。
「イカレ学者め……天国で、一人でやってやがれ……」
そんな言葉を吐く力しか、俺には残っていない。
アグナスは不愉快そうに眉を顰めた。そして無言のまま、俺の腹に突き刺さったランスを引き抜くと、その穂先を俺の左胸に突き付ける。
「その薄汚い口は、研究に不要だな……」
言い終えると、アグナスは俺の胸に一気にランスを押し込んだ。心臓が貫かれたのが分かった。貫かれながら、それでも懸命に、心臓は動いている。不規則に、か弱い鼓動。俺はその儚さを、まるで人事のように感じていた。
「つ、つつ、つ連れて行け……」
アグナスが命じると、鎧騎士達がゆっくりと近付いてくる。
その足音が、遠く、重い。
まるで地響きのようにすら感じる。

一歩、一歩と奴らが近付くにつれ、俺の鼓動は少しずつ、弱まっていた。
もう抵抗する力もない。
それどころか、生き抜く力さえ。
力が必要だと、あれほど、考えていたのに。
何かを守るためには、力が必要だと、あんなにも思っていたはずなのに。
大切な物を守るために。或いは、自分自身を守るためにも。
力は必要だ。
力が欲しい。
これじゃ何も変わらない。キリエの両親が無残に殺されたあの夜と、何も変わってはいない。
俺は何も守れなかった。大切な人の、大切な存在を、守ってやれなかった。
俺には力がなかったから。
だから力が欲しいと思ったのだ。
強く、強く、強くなって、力を手に入れて、守るんだと。俺の大切な人を。そしてその人が大切に思っている全てを。
俺は守らなくてはならない。
力を。
力を手に入れて。俺は守るのだ。

そう、誓ったのに。

「キ、リ、エ……」

俺がそう呟くと、まるでそれが合図だったように、俺の心臓は、完全に、止まった。



ダンテは、フォルトゥナ城最上階、城主の私室と思しき部屋の中でその波動を感じた。

部屋の中に飾られていた帽子を自分の頭に乗せ、鏡を覗き込み、あながち悪くないと悦に入っていた時であった。

「……ッ！」

その波動は階下から床を突き抜け、ダンテの体内、脚から頭頂部までをまるで電流のように一気に駆け抜けた。そしてそれに呼応して、ダンテの姿は一瞬、真っ赤な悪魔に変じた。

再び人の姿に戻ってからも、ダンテは頭から零れ落ちた帽子もそのままに、身動きもせず足下を見つめていた。

それは、同じ血を引く者だけが感じ得る魂の叫びだった。

「似てるな……」

かつてそれと似た魂の慟哭を、ダンテは感じた事がある。だが今感じた叫びの主が、ダンテ

の知る人物であるはずがなかった。その男はもう、この世にはいないからだ。

父スパーダへの強い思慕を抱き続け、力を追い求め止まなかったダンテの実兄、バージル。双子の兄弟でありながら、袂を分かたねばならなかった男。

その兄に似た色の魂を持つ者が、この城内にいる。

ダンテの身体を貫いた波動は、そう告げていた。

「どうやら……思ってたよりは楽しい場所らしいな」

呟き、ダンテは床に落ちた帽子を指でクルクルと回してから投げ付けた。宙に舞った帽子は、鳥が木に留まるように元あった場所に戻る。

「しかしまあ、とりあえずは連中を叩くのが先か……」

髪を掻き上げながら、ダンテは森に続く道へと歩き始めた。



一カ月前、夢を見た。

悪魔と戦い、腕に傷を負ったあの日。

俺はずっと悔いていた。

自分の無力さを。

力が欲しいと思った。
そうでなくては、俺はキリエを守れないかもしれないから。
彼女を悲しませてしまうかもしれないから。
俺みたいな人間にさえ優しく微笑んでくれる彼女を、俺は二度と悲しませたくはない。
力が欲しい。そう願い、眠った。
そして夢を見たのだ。
不思議な夢だった。
ずっと忘れていたのに、今、俺は思い出している。
俺は死んだのか、生きているのか、それさえも分からないまま。
俺はその夢の事を思っている。
夢の中に現れた一人の男の事を考えている。
どんな顔だったかも覚えていない。出会った事もない男だった。
冷たい目をしていた気がする。けれど、どこか寂しそうだった気もする。
男はただ俺を見ていた。何も言わず、じっと。
俺はその男に何か言わなければいけない気がした。でも何も言葉が浮かんでこなかった。
男はやがて口を開いた。
「──聞こえるか──」

と。
俺は首を傾げた。
「──聞こえるか、魂の叫びが──」
ひょっとすると、男は実際には喋ってはおらず、俺の頭の中に語りかけていたのかもしれない。そんな感じの声だった。冷たい……乾いた……けれどどこか優しい声……。
「──お前の魂は、何と叫んでいる──」
問われて、俺は逆に尋ねていた。
「……あんたのは、何て叫んでるんだ？」
男は一度、小さく笑った。そして言った。
「──もっと力を──」
と。
俺はそれを聞いて、
「じゃあ、俺もそれでいい」
そう返した。
そこで目が覚めた。
どうしてこんな時にそんな夢の事を思い出しているのか、分からない。
俺にはもっとするべき事があるはずなのに。

自分の生死さえあやふやなままなのに。

でもそれを思い出す事が、自分には必要に思えたのだ。

右手が震えている。

俺の右手。ゆっくりとその手を開く。そこに何かが飛び込んでくる。俺はそれを掴んだ。

その瞬間、意識が戻った。

目を見開く。

視界が赤く染まっている。

俺に迫っていた白い天使達は、まだ二歩か三歩程しか近付いてきていないのに気付く。あんなにも時間が経ったはずなのに。

自分の右手を見ると、そこには刀が握られていた。

試験管のようなものの中で浮かんでいた、折れていたはずの刀。それが完全な状態で、今、俺の手に収まっている。何故か。分からない。けれどはっきりしているのは、今、俺の身体に力が溢れているという事だけだ。

指ひとつ満足に動かせなかったのに。心臓は止まったはずなのに。

けれど、俺はまだ、生きている。

力と共に。

白い天使が俺に向かって手を伸ばす。

俺はそれを拒むように叫んでいた。

「うわあああああああああああああああっ！」

体中から力が溢れ出すのが分かる。そしてその力の波が、白い天使達を粉々に打ち砕いていく。離れた場所にいるアグナスにさえ、その力は行き届いた。

「……何ッ!?」

アグナスが叫びながらどこかに吹き飛ばされていく。周囲の柱や壁が崩れ、濛々とした白煙を上げる。

気が付けば、俺は磔の状態から逃れ、ふらつきながら、歩いていた。

右手には刀がある。

そして俺の背に、もう一人の俺がいる。振り返らずとも分かる。確かにいる。もう一人の俺。俺の力の象徴。俺の魂。青白い光に包まれた「悪魔」。

白煙の中、俺はアグナスを捜して歩いた。

奴は危険な男だ。

始末しなくてはいけない。

「……な、な、な何故だッ！」

俺が姿を発見するよりも早く、アグナスは叫び声で自分の居場所を俺に知らせた。

「何故、貴様が閻魔刀を復元させた!? 私にすら不可能だった事を……何故貴様のような奴に

できる!?」
アグナスは昆虫のような姿に変じていた。それが奴の天使の姿なのだろう。
「あり得ない……そんな事は、あ、あ、あ、あ、あり得るはずがないッ！」
狼狽するアグナスに一歩、また一歩と近付いていく。
「あの日に……俺は、誓った……キリエを守る……悪魔に魂を売ったとしても……俺は誰よりも強い力を手に入れて、彼女を守らなくちゃいけない……それが俺の成すべき事だから……俺の魂が……そう叫んでいるから……もっと、力を……守るために……愛する者を守るために……もっと、力を……」
何故そんな事を呟いているのか、自分でもよく分からなかった。
右腕が熱い。
「な、何……？」
アグナスが怯えたような声を上げる。
俺はそれに向かって、手にした刀を振り上げた。
刀から発せられた衝撃波が、アグナスに向かい飛んでいく。だがそれはアグナスに命中する事なく、奴の背後の壁を大きく崩したに止まった。自分で自分をうまくコントロールできない。身体が思うように動かせない。力が溢れすぎて、俺は、俺を保てていない。
「あ、あああああり得ないあり得ないあり得ない……！　アリエナイイッ！」

アグナスが壁の穴から逃げ出していくのを、俺は見つめていた。それを追おうとして足を踏み出し、俺はそのまま床に倒れた。

STAGE 07

「……以上が、現在の状況です」

円卓に集められた幹部達に、クレドはそう告げると、彼らの顔を見渡した。

皆一様に渋い顔をしているのは、本当にダンテを捕縛できるのかという事を危惧しているためだろう。彼らは皆、ネロの実力を知らない。一方で、ダンテの力は様々な事実から窺い知る事ができる。

ダンテは教団が神と崇める魔剣士スパーダの実の息子であり、復活を遂げようとしていた魔界の王を父に代わり再度封印した。そのたったふたつのエピソードだけでも、ダンテがただならぬ力の持ち主である事は明らかだった。

一方で、ネロは教団騎士の中でも突出した力を持つが、帰天の儀式すら受けてはいない生身の人間だ。他の幹部が不安を抱くのも無理はない。

悪魔の因子を移植し、常人を超えた力を身に付ける。それが帰天と呼ばれる儀式だった。

帰天を受けるには、強い肉体と精神力を有していなければならない。さもなくば、植え付けた悪魔の因子に全てを奪われ、自我すら失ってしまう。力を手に入れても、それではただの獣だ。そういった失敗例を、クレドは幾度となく目にしてきた。人の言葉さえ理解できず、本能のままに破壊や殺戮を行う存在に身を落とした多くの同胞達。

そういった者は、失敗作として施設内に隔離され、人知れず処分されてきた。

だが時にはその失敗作が隔離施設から逃げ出し、街の人々を襲った事もある。

クレドの両親もまた、その失敗作に殺められた。

あの日の事を、クレドは今でも思い出す。

何も知らぬ妹、キリエの悲痛の涙。その傍にいたネロの戦慄き。

若くして教団騎士の長に昇り詰め、教皇サンクトゥスの理想郷実現のために奮迅すると誓った身ではあったが、それでもなお、両親の不慮の死について全てを納得できたわけではなかった。

理想郷という夢の陰で、何も知らぬ者が幾人も傷付いていく。その事実に、当時のクレドは迷いを感じ始めていた。自分の進む道は果たして正しいのだろうかと。

だがそのクレドの心を見透かしたように、サンクトゥスは言った。

「堪えてくれ、クレド……楽園が生み出されれば、誰も傷付く事のない平和が訪れる。そのためには今後も無益な血が流れるやもしれん。しかしそれも、多くの民草をこの混沌の世から救

いたいが故なのだ……彼らはそのための尊い犠牲なのだ……」

以来、クレドは迷いを捨てた。些少の犠牲を生んだとしても、サンクトゥスの理想とする楽園が生み出されれば、残された人々は様々な物に脅えねばならない今の世から脱する事ができる。

そうなれば、犠牲となった人間達の魂も救われるだろう。

そう言い聞かせて。

しかしそれでも、クレドには譲れぬ一線があった。

それがキリエだった。

クレドは、キリエには真実を告げていない。告げられないでいる。

敬虔な両親の教えを受け、キリエは清らかな心を失わぬまま今なお無垢に神を信じている。誰であろうとも慈悲の心をもって接し、騎士団の中には彼女を女神と評する者さえいる。

そんな妹に、血に汚れた教団の真実を告げるわけにはいかなかった。告げたとて、キリエはクレドを責めぬだろう。しかしそれでも、クレドはキリエにだけは無垢なまま楽園への道を歩んで欲しいと願っている。何にも巻き込ませず、無論、両親のように非業の死を遂げさせる事もなく。

彼女がそうあらねば、一体誰がそうあるべきだというのか。

クレドにとって、キリエは残されたたった一人の肉親であると同時に、このフォルトゥナの

無辜の民の象徴でもあった。

「それでは、次にこれからの人員配置についてですが……」

誰も意見をせぬ事を確認し、クレドが次の議題の口火を切ると、唐突に、背後から乱暴に扉を押し開く音が聞こえた。

振り返ると、鬼のような形相をしたアグナスがクレドを睨んでいる。

「……クレド！　き、き、きき貴様ァ！」

叫びながら、アグナスは大股でクレドの方に近寄ってくる。クレドが溜め息を吐くと、アグナスはクレドの襟首を掴み上げた。

「な、ななな何故、教えなかった！　ど、どどういうつもりだ！」

言葉の意味が理解できなかったが、それよりもこの円卓会議につまらぬ横槍を入れられた事に腹が立った。クレドはもうひとつ溜め息を吐き、アグナスの手を払う。

「声を荒らげるな……教皇の御前だぞ」

そう告げてサンクトゥスを見やる。サンクトゥスは目を細め、二人のやり取りを見つめていた。この状況を叱責する事もない。おそらくはアグナスの話を聞いてやれという事なのだろう。

アグナスはサンクトゥスを一瞥しながらも、すぐにクレドに向き直り、

「あ、あああの小僧は悪魔だぞ！」

と声を張り上げた。

「あの小僧？」
　クレドが問うと、アグナスは何度も口を開いては閉じて、をくり返しているばかりだった。興奮のあまりうまく言葉が口を突いて出てこないらしい。
「誰の事だ？」
　再度の問いに、アグナスは落ち着きを取り戻すためだろう、深呼吸を一度した後で、
「ネ、ネロとかいう小僧だ！　奴は、あ、ああ悪魔の力を持ってる！」
　と答える。その内容があまりに唐突すぎ、クレドはすぐに呟いていた。
「馬鹿な……」
「馬鹿な、だと⁉　知らぬフリか！　ふ、ふふふざけるなよ！　あの小僧、研究所で暴れ回った挙句に、や、やや閻魔刀まで、ふ、復活させやがった！　あ、悪魔の力もなしにそんな事ができるか！　貴様の、せ、せ責任だぞクレド！　閻魔刀が持ち去られたのだ！　わ、わ我々の計画がこれで台無しになったらどうする！　き、きき貴様のせいで！」
　それだけまくし立てると、アグナスはまた興奮が極度に達したのか言葉を何度も詰まらせてしまう。クレドはただ茫然と、アグナスの言葉を頭の中で反芻していた。他の幹部達も、事情が摑めていないのか言葉を発しない。
「……クレド」
沈黙を破ったのはサンクトゥスであった。

「……はい」
　振り返ると、サンクトゥスは僅かにだが笑みを浮かべていた。クレドの胸中に言い知れぬ不安が込み上がった。
「ネロ……だったか？　その男を捕らえられるか？」
「教皇様がそれをお望みとあれば……」
　アグナスの話が事実であれば、ネロをそのままにしておくわけにはいかぬだろう。そういう意味では、ネロを捕らえる事に異義があるわけではない。
　しかし、とクレドは続けた。
「ネロを捕らえる事ができるのは私だけでしょう。もし私がネロを捕らえるとなるとダンテの捕縛に向かう人間がおりません」
　そもそも、ネロにダンテを捕らえる事ができるとまでは、クレドも考えていなかった。ネロにダンテを追わせ、一方でクレドがダンテを迎え撃つ。その挟撃の形でこそ、初めてダンテを捕らえる事ができるという考であった。
　だがクレドがネロを捕らえるのではその計画は根本的に不可能になる。どちらか一人が残っているのならまだしも、本来ダンテを捕らえるべき人間二人が潰し合う格好だ。
「ふむ……」
　サンクトゥスは長い顎鬚を撫でさすりながら呟くと、円卓に座している他の幹部達に目を向

けた。幹部達は一様に、サンクトゥスの視線を避けるように俯く。彼らは皆、歌劇場でのダンテの奮迅ぶりを目にしている。自分如きではダンテにかなうべくもない事くらいは自覚しているものらしい。

土台、この状況下でダンテよりもネロの捕縛を優先させる事が間違っているのだ。そもそもアグナスの言葉が真実かどうかも定かではないのだ。ネロが悪魔の力を持つと言うが、帰天も受けておらぬネロにそのような力が生まれるはずはない。悪魔に憑依され、人間離れした力を身に付けるという事例はあるが、それは帰天における失敗例同様、人としての自我を失い、悪魔に意識を奪われる形になる。少なくともクレドはそう認識していた。

それに、ネロはフォルトゥナ城地下にある技術局管轄区域の事を知らない。アグナスとも直接の面識はなかったはずだ。アグナスを怪しみ攻撃を加えたという可能性は大いにある。おそらくアグナスはそれでネロから手痛い仕打ちを受け、その興奮と屈辱とである事ない事をまくし立てているのだ、とクレドは考えた。

であれば、今はネロよりもダンテの捕縛をこそ優先させるべきだ。

クレドとネロの二人でならようやく押さえ込めるだろうという程の力の持ち主に、他の幹部達が命を賭けてまで挑むはずもない。彼らとて、楽園の完成を前にして無駄に命を散らしたくはないだろう。

自分がやるしかないのだ。自分がダンテを捕らえるしか。

その想いをサンクトゥスに進言しようとした瞬間、円卓に座す一人が立ち上がった。

「では、私がダンテを追いますわ」

グロリアだった。

彼女は、幹部の中で唯一人、フォルトゥナの人間ではない。一カ月程前に唐突にこの街に現れた彼女は、様々な供物をサンクトゥスに捧げた。そしてその見返りとして教団の幹部に位置する事を許されたのだ。

グロリアの言葉に、サンクトゥスは笑みを湛えた。

「おお、グロリア……やってくれるか」

グロリアもまた微笑みをサンクトゥスに返す。

「教皇様の御為なら喜んで。必ずや捕らえてご覧にいれます」

そう告げると、グロリアは出口に向かって歩き始めた。

そのまま部屋を出て行くかと思われたグロリアだったが、扉の前で立ち止まり、振り返った彼女は、サンクトゥスを見つめた。

「……それにしても、教皇様が御無事でなによりでしたわ。きっと、神の御威光ですわね」

そう言い残し、グロリアは恭しく頭を垂れた後、部屋を去った。

「……よろしいので？」

クレドは思わずサンクトゥスに詰め寄っていた。

「構わぬ……あの女がもたらした魔剣スパーダがあるからこそ、我々の計画は大きな躍進を遂げたのだ。今は好きにさせておけば良い」

クレドの中に嫉妬と猜疑の混ぜ合わさった複雑な情念が渦巻いていた。

サンクトゥスはグロリアならダンテを捕らえられると考えているのではないか。素性も知れぬ女よりも自分の方が劣っていると認識しているのではないか。

「しかし、あれは得体の知れぬ女です。あまり信用なさっては……」

クレドの言葉に、サンクトゥスはか細い苦笑の声を漏らした。

「我らを裏切るなら、その時はあれも始末してしまえば良い事だ。何も問題はない。それに、あれの素性にも、目星はついておるしな……」

クレドがその言葉の意味を問うよりも先に、サンクトゥスはクレドの右手にそっと触れた。

「お前はネロという小僧を捕らえる事だけを考えておれば良い。閻魔刀は我らの計画の要とも言える物。なればこそ、この任をお前に託すのだ。やってくれるな……クレド」

言葉と共にサンクトゥスの目がクレドを覗き込む。

この偉大なる教皇の頼みを、自分のような下賤の者が断れようはずもない。そう思ったクレドにできるのは、ただ恭しく頷く事だけだった。

「……承知しました」

クレドは歩き出した。

ネロを捕らえる。

不本意ではあるが、それもまた楽園のためだ。

弟のように思ってきた男ではあっても、もはやクレドに迷う事は許されなかった。

教皇サンクトゥスの期待を裏切らぬため、真の楽園の建設のため、自分はネロを捕らえねばならぬ。

そう自分に言い聞かせながら、クレドは円卓の間を後にした。

どれくらいの時間が経過したのかも分からぬまま、俺は目覚めた。

周囲には誰もいない。人の気配すらない。

「夢、なんて事はないよな……」

自分の手に握られた刀。それが、全てが現実だった事の証拠だった。アグナスは閻魔刀と呼んでいた。気が付けば俺の手に握られていたその閻魔刀が、俺に力を与えてくれた。

自分の胸を見る。ランスを突き刺され穴の開いた服。その下にあるはずの傷は、既に塞がってしまっている。

あの時、俺は確かに心臓を貫かれた。そして死んだ。それはおそらく間違いない。

だが俺は今も生きている。

「いよいよ、人間じゃなくなったって事か……」

右手が変貌を遂げて、いくらか人間離れしたと自覚はしていた。しかしまさか、心臓を貫かれてなお生きていられるなんて考えてもいなかった。

思わず苦笑する。

確かに、俺は誓った。力が欲しい、と。そのために悪魔に魂を売ったとしても、それで大切な者が守れるなら構いやしない、と。

「夢が叶ったってわけだ……」

願い通り、俺は力を手に入れた。悪魔の腕(デビルブリンガー)。そして閻魔刀。

しかし本当に、これで良かったのか。

俺はもう、人間じゃない。少なくともそれは事実だろう。

自分で願っておきながら、けれど、俺は人でなくなった事に不安を感じていた。そしてその不安をかき消すために、笑っていた。

誰もいない部屋に、俺の笑い声だけが虚しく響く。

やがてひとしきり笑った後で、俺は立ち上がった。

悩み迷ったところで、もはや俺の身体が元に戻るわけじゃないだろう。

だとしたら、今やるべき事は何か。

「本部に戻る、か……」

ダンテという名らしい、赤の男を追う事も考えた。だがアグナスの存在が気掛かりだった。教団は、俺の知らぬところで何か良からぬ事を企んでいる。それは間違いない。

クレドに真実を問い質すべきだ。そうすれば自ずと、あのダンテという男の正体も分かる気がする。

閻魔刀を持ったまま歩き出そうとすると、閻魔刀は青白く輝き、そして俺の右腕に吸い込まれるように消えていく。消滅したわけじゃない。俺の右腕に宿ったのだと、感覚的に理解できた。試しに自分の右手が閻魔刀を握っている様をイメージすると、すぐに閻魔刀が現れる。

「これも悪魔の力の賜物か……」

溜め息を吐きながら、俺は教団本部へと向かうべく城からミティスの森へと抜ける道へと歩き出した。

クレドの去った後、アグナスはサンクトゥスに傍に寄るよう命じられていた。

「……クレドは、ネロという小僧に勝てると思うか？」

アグナスがネロと交戦したであろうと踏まえての問いだろうが、アグナスはサンクトゥスの

その問いに即答はできなかった。

ネロが、自分の想像していたよりも遥かに強い力の持ち主であった事は事実だ。しかしアグナス自身は手を出していない。あくまで自分の生み出したグラディウスと、白い天使（ビアンコ・アンジェロ）を使役したに過ぎない。

「は、判断の難しいところです……ク、ク、クレドの奴も相当な力がありますので……」

気に食わないながらも、アグナスはクレドの力を評価してはいるのである。

帰天によって得られる力は、移植される悪魔の因子よりも、むしろ素体である人間の性質によって左右される傾向が強い。帰天は、その者が無意識のうちに望む力を顕現させるからだ。

そういう意味において、クレドの力もまた、クレドの性格がよく表れていると言える。

アグナスにしてみれば面白みのない能力ではあるが……しかしその能力を過小評価するつもりもない。アグナスにも研究者としてのプライドがある。

「かと言って、あのネロという小僧の力は、まだ、み、未知の部分が多いですので……や、や、閻魔刀も奴に奪われてしまいましたし……」

言いながら、アグナスは閻魔刀を奪われたその事をサンクトゥスに咎められるのではないかと気が気ではなかった。

案の定、サンクトゥスは冷たい視線をアグナスに向けた。アグナスはいっそ、その場に這い蹲り、ひれ伏して許しを請いたいという衝動に駆られたが、他の幹部にそんな無様な自分を見せるわけにもいかず、ただただじっと堪えているしかなかった。

だがアグナスのその予想とは裏腹に、サンクトゥスはアグナスを責める事もなく、ただ、

「何事にも、万全をもって対するべきだとは思わんか……？」

と呟いた。

アグナスはその言葉に、サンクトゥスがクレドの勝利を確信してはいない事を知った。即ち、クレドがしくじった際の保険を自分に求めているのだと。

しかしクレドが敗北した後に自分がネロを倒す事ができるかどうか、それが問題だった。

天使としてのアグナスの力は、直接的な戦闘にはあまり向いていない。無論、人間であった頃に比べれば格段に強くはなっているのだが、それでも確実に勝利を収められるかどうかと言えば、答えは否だった。

となると、どうにか戦わずしてネロを捕らえる方法を探さねばならない。

思案するうち、アグナスはネロが呟いていた名を思い出していた。

「そ、そう言えば……ネ、ネロは、クレドの妹と親しいようでした……うわ言のように何度も名を呼んでおりましたので……」

そのアグナスの思い付きの言葉に、サンクトゥスは深い笑みを湛えるだけで、何も言いはしなかった。しかしその笑みの意味が、アグナスには分かっている。

アグナスは恭しく頭を垂れると、クレドと同じように円卓の間を後にした。

しかしその向かう先はフォルトゥナの民が一堂に避難している、本部内の大広間であった。



フォルトゥナ城から、森を一望できる崖の上に出た俺は、眼下に広がる森の様子に息を呑んでいた。

本来、ミティスの森には、常緑針葉樹を中心に様々な植物が生い茂っている。崖の上から見渡せば、色濃い緑の森は深く落ち着いた黒に覆われているように見えるはずだった。

だが今、俺の目に映っているのは、まるで亜熱帯のそれを思わせるようなドギツい色で彩られた奇怪な森の姿だった。ラーミナに季節外れの吹雪が吹き荒れていたように、この森もまた何らかの悪魔の力によってその姿を変えたのだろう。

その証拠にか、右手が疼き始めている。

悪魔が傍にいるのだと感じながら、俺が森へと下る坂道に足を向けようとした瞬間、唐突に何者かが城の窓を突き破って俺のすぐ目の前に飛び降りてきた。

俺は思わず銃を構えたが、そいつは俺の方も振り返らず、森を見下ろして言った。

「……何だこの森は？」

ダンテ。教皇を殺した赤の男。俺が追うべき相手。

だが俺はすぐさまダンテに向けて銃を撃つ気にはなれなかった。こいつにはいろいろ聞いておきたい事がある。俺の中で、任務を遂行する事よりも、そうするべきだという思いの方が勝ってしまっていたのだ。

「これも悪魔の仕業だと思うか？」

ダンテはようやく俺の方に振り向きながら、首を傾げて尋ねてくる。

俺はその問いには答えなかった。

「お前……何が目的なんだ……」

ダンテも俺の問いには答えず、肩を竦めた。

「それにしても、どこで追い抜かれたんだろうな？　ちょっくら城見物に時間を使い過ぎたらしい……ま、道に迷ったのもあるんだが……」

相変わらず人を舐めた態度だ。俺も人の事は言えないクチだが、それにしたってこいつの言動はいちいち癇に障る。何と言うか、魂の根っこの部分で受け入れられない何かがある。

「いいから質問に答えろ！」

詰め寄りながらそう叫ぶと、ダンテは両手を上げてそのまま後ずさった。

「悪いが、こっちは今忙しいんだ」

ダンテのすぐ背後には切り立った崖が待ち受けている。だがダンテはそれに構う事もなくさらにもう一歩足を後ろに踏み出した。

「また後で遊んでやるよ、坊や」
そう言いながら、ダンテはそのまま森へと落下していく。勝ち誇ったような笑みを浮かべて。
崖から森までは相当な距離がある。奴には、落下しても死なないという自信があるのだろう。
俺もそれを真似て飛び降りようとしたが……できなかった。
心臓を突かれてさえ生きていた身体だ。この程度の高さで死ぬ事はないはずだと、頭ではそう考えるのだが、いざ一歩を踏み出すとなると身体が言う事を聞かない。俺の理性が、そこに歯止めをかけてしまっている。
「……クソッ！」
結局、俺は徒歩での道を選択するしかなかった。
「何なんだ、アイツは……！」
全てを知っているような口ぶりも、躊躇なくあの高所から飛び降りる態度も、何もかもが気に入らなかった。しかし心のどこかで、そんな奴に憧れにも似た感情を抱いた自分がいる。それが何よりも腹立たしい。
苛立ちながら、森の中を歩く。
案の定、森には悪魔が溢れていた。
スケアクロウだけじゃなく、以前、市街地に現れたトカゲのような悪魔（教団に報告した後、強襲型悪魔と呼ばれるようになった）までもが、当たり前のように森の中をうろつい

ている。そいつらの相手をしながら進んで行くのだが、森の様子がすっかり変わってしまっていて、何度も道に迷わされた。崖の上から確認したように、森の樹は見た事もないようなグロテスクな形状に姿を変えてしまっている。そのせいで、本来通行できたはずの通路が塞がれていたり、樹が塞いでいたはずの道が逆に開かれていたりし、俺の方向感覚は完全に麻痺してしまっていた。気が付けば、何度も同じ場所を歩いている。
その上、森の各所に昆虫の卵を思わせるような巨大な物体が落ちている。
これがまた厄介だった。
その卵のような物から、苔の塊のような悪魔が生まれ出てくるのだ。とは言え、それ自体は大した事がない。とっ捕まえて引き裂いてしまえばすぐに死んでしまう程度のものだ。
問題なのは、そいつがあろう事かスケアクロウやアサルトのような他の悪魔に寄生してしまう事だ。そして寄生された悪魔の身体から触手のような芽を生やし、暴れ出す。寄生される前より遥かに凶暴に、だ。
身体は身体で動き回り、一方で触手のような芽がまるで外敵は寄せ付けないとでも言うように大きくうねり続ける。さながらふたつの生物が組み合わさったキメラというところだ。
キメラの触手の一撃は予想以上に強烈で、最初はうっかり近寄って吹き飛ばされてしまった。
極力近付かずに対処をすればいいのだが、銃だけでは時間を食う。先を急ぎたい身にはストレス以外の何物でもない。

だがそうやってキメラどもを相手にしているうちに、俺はふと気付いた。
卵から生まれる苔のような悪魔。これは言わば種子なのだと。
最初は、ただの寄生虫のようなものだと思っていたのだ。実際、奴らはスケアクロウやトカゲに取り付いたところで、芽を生やしそれを振り回すだけで、特に何かに変化するというわけじゃなかった。
だが先を進むうちに、俺は妙な物を目にした。
例の苔に取り付かれたと思しきアサルトだった。それは俺がこれまで目にしてきた物とは違い、全く動かず、じっとしていた。体表はかつての面影がなく、まるで樹木のように枯れた色合いになっている。指で触れると、質感もまた樹の肌としか思えなかった。
今や森中を覆っている奇怪な樹木の数々がどうして生まれたのかを、俺はそれで悟った。
悪魔に取り付きキメラを生むあの苔のような悪魔（キメラの種とでも呼ぶべきだろう）、そいつはただ寄生するだけが目的なんじゃない。寄生し、養分を吸い取り、宿主を樹木へと変えてしまう存在なのだ。
その結果が今のこのミティスの変貌ぶりだ。
おそらく、キメラの種が取り付くのは悪魔だけではないのだろう。森に棲む様々な動物、或いは樹そのもの、そういったものに取り付いていったからこそ、森全体がここまで異様になってしまっているのは間違いない。

奴らが種なのだとしたら、どこかにそれを生み出した主がいるはずだ、と俺は思った。
そしてその主を倒せば、森は元に戻るかもしれない。元に戻れば、道に迷う事なく先に進める、と。
その主は、存外早い段階で見付かった。
何の事はない、頭上にいたのだ。正確に言えば上空に。
それはまるで巨大な龍のようだった。
無数の蔦が絡み合ってできたような身体で空中をたゆたいながら、龍は次々に種子を産み落とし、森にバラ撒いている。
龍の方に向かって走っているうちに、俺は森の中の拓けた場所に足を踏み入れていた。
そこにはまた例の板が安置されている。アグナスが言うところの小地獄門とかいう奴だ。
「ここにもか……」
溜め息を吐くと、目の前の上空では、龍のような悪魔がまた種子をどんどん産み落としているところだった。この場所なら障害物もなく、その種子を咎められる。
俺は産み落とされ落下していく種子をブルーローズで撃ちまくった。何かに取り付けば厄介な相手となる種子だが、動き出す前、卵のようなその形状の時には思いの外、脆い。銃弾の一発で次々に砕け散っていく。
それによって巨大な龍は俺の存在を認識したらしく、上空から一気に俺の方に向かって飛ん

できた。凄まじいスピードだった。
迎え撃とうとした矢先、龍は空中で静止し、大きく口を開いた。
身構えると、口の中から女のような姿をした悪魔が顔を覗かせる。俺が龍のようだと思っていたその頭部は一種の花弁だったらしく、それに覆われた花芯の部分が本体だったらしい。キメラの母親ならさしずめエキドナというところだ。
「貴様……貴様かッ！　わらわの子を次々と屠ってくれたのはッ！」
わらわの子、ときた。どうやら俺が思っていた以上に高貴なお方らしい。しかもあのクソ種子が子供というわけだ。俺は肩を竦めた。
「……随分ハタ迷惑な子作りだな。そういうのはおうちでやれよ」
俺の言葉に、エキドナはかん高い悲鳴のような叫び声を上げた。
「おのれ……人間風情がッ！　わらわを愚弄する気か！」
そう告げるや否や、エキドナは花弁を閉じ龍の形態に戻ると一気に俺に突進してくる。それを転がってかわし、すぐさま銃を放った。だが種子には効果のある弾丸も、巨大なエキドナの身体にはさしたるダメージを与えられていないようだった。
エキドナは空高く舞い上がり、旋回する。
上空の相手に攻撃する手段は銃しかない。だが銃では申し訳程度にしかダメージを与えられない以上、実質的には打つ手なしも同様だった。

奴が俺に突進してくる隙を狙って斬り込むか。
だがそれはリスクが高すぎる。あの突進は相当のスピードだ。それを回避しつつ剣で攻撃するのは苦しい。
「撃ちまくるしかないって事か……？」
俺の隙を窺うように上空で旋回を繰り返しながら、エキドナは高らかに笑った。
「貴様もわらわの子を受け入れるがいい……そうしてこの森の一部となるのじゃ……ッ！」
エキドナの身体から、種子が弾丸のように射出される。
どうやら森全体ではなく俺一人に対象を絞ったらしい。
「我が子ならもうちょっと大切に扱いやがれ！」
飛んでくる種子を撃ち落としていると、その隙を突くように今度はエキドナ自身が俺に向かって突進してくる。ギリギリまで引き付けて、どうにか斬り込む隙はないかと探ったが、不可能だった。
速すぎる。
剣を打ち込む暇なんてない。
「鬱陶しい奴だ……！」
空を飛ぶ悪魔を相手した事はあるが、そういう奴らは大抵、身体が小さく打たれ弱いものだ。だからこそ、今まで銃一丁で対処ができた。

だがエキドナは銃だけで戦うにはあまりに巨大すぎる。しかも巨大さゆえに飛ぶ高度も桁違いだ。頑張って手を伸ばしたところで届くような距離でもない。
新しい弾丸を装填しながら、俺はどうするべきか考えていた。
レッドクイーンでも閻魔刀でも、その刃が届けば奴に大きなダメージを与えられるはずだ。
そのためには地上近くの場所で奴の動きを止める必要がある。動きを止めるにはダメージを与えるしかない。そして上空の奴にダメージを与えるには銃しかない。
堂々巡りだ。
本当に銃を撃ちまくっていれば奴が足を止める程のダメージを与えられるのか？　その保証もないまま無駄弾丸を使うわけにもいかない。
再びエキドナの突進が迫っていた。
俺は銃を構えた。そして無意識のうちに、俺は銃を握る左手に、右手を添えていた。
「人間じゃないなら……ちょっとくらい無理は利くだろ……」
右腕に力を込めると、ぼんやりと青白い光を放った。
俺が人間じゃないのなら。
この右腕に宿る力が悪魔のものだと言うのなら。
この青白い光は魔力の顕現であるはずだ。
人を超えた力の証であるはずだ。

「だったらそいつを弾丸と一緒に――」
右腕から放たれた青白い光が左手を伝い、ブルーローズの銃身を覆っていく。
「ブッ放す！」
引鉄を引くと、思わず仰け反る程の反動が俺の上半身を襲った。
発射された弾丸は青白い光を纏って、突進してくるエキドナに飛んでいく。
龍のような形態のその鼻っ面に命中すると、弾丸は轟音と共に爆ぜた。
グレネードを思わせるような爆発。
その衝撃に、さしものエキドナも動きを止める。
命中させた場所が良かったのだろう。爆発によって起こった炎は、エキドナの花弁の中に広がっていた。
耐えかねたように、エキドナが花弁を開き本体である花芯を露にする。
またとないそのチャンスを、逃すわけもない。
素早く駆け込みながら、俺は右手に意識を集中させた。
閻魔刀の発現。
手に入れたばかりのその力を試しておきたかった。
「あの世に行きな……ッ！」
炎に焼かれ悶えているエキドナを前に、鞘に納まったままの閻魔刀を構え、即座に抜き放つ。

抜刀の一閃。

返す刀でさらに斬り返す。

「おおおおッ！」

何度となく閻魔刀で斬り刻んだ。

それでもなお倒れる様子のないエキドナに対し、レッドクイーンも同時に振るい、二刀流の格好になって攻撃を加える。

だが想像以上にエキドナはタフだった。

この一瞬だけでは決められないかもしれない。

そう危惧した瞬間、エキドナは悲鳴を上げつつ飛び上がった。

「……くッ！」

攻撃の途中で突き飛ばされ、俺は地面に投げ出された。

エキドナはなおも悲痛な叫びを上げながら、上空をグルグルと回っている。

俺は設置されている小地獄門に眼を向けた。そこには前のふたつ同様の魔界へ続く穴が開いている。

そのうちに、エキドナが俺の方に向かって突進してきていた。だがそれが俺への攻撃目的でない事はすぐに分かった。微妙に軸がずれている。

予想通り、エキドナは俺の脇をすり抜けるように飛び、一心に小地獄門の穴に向かっていく。

「逃がすかよ！」

呟き、俺は悪魔の腕を逃げるエキドナに向かって突き出した。

俺の腕から放出された巨大な青白い腕が、逃げようとするエキドナの尾を掴み取る。

エキドナは何度も身を捩じらせながら、

「人間相手に……何たる恥辱……ッ！」

とぼやいた。

「逃げるくらいなら最初から出てくるんじゃねェよ。マナー違反だろ……！」

逃がすまいとエキドナを引き寄せる。じりじりと距離が詰まっていく。

だがあと一歩で剣のひとつも叩き込めるという段になって、エキドナは叫び声を上げながら自分の尾の一部を自ら切り捨ててしまった。

再度捕まえる間もなく、エキドナが吸い込まれるように穴の中に消えていく。

小地獄門に開いていた穴は収縮していった。ベリアルの時と同じだ。

「結局逃がしちまうのかよ……」

手応えはあった。閻魔刀による攻撃も、これまでの俺がもつ力とは比にならなかった。だが俺はまだその力をうまく扱えていない。それを実感する。

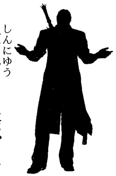
俺は右手を見つめた。

「何なんだよ……この力は……」

それも分からぬままで、俺はこの力を自分の物にする事などできるのだろうか。
受け入れがたい事実。しかし手放しがたい程の力。その矛盾を抱えたままで。
周囲の空気が変化していくのに気付き、俺は顔を上げた。
見ると、さっきまで生い茂っていた森の樹が、枯れ始めている。エキドナによって生み出されたグロテスクな樹は、奴の威光があって始めて隆盛を保てるものらしい。
「先には進める、か……」
呟くと俺は森を抜けた先にある教団本部の方に目を向けた。
ベリアル。バエル。エキドナ。
小地獄門というあの装置を作ったのがアグナスなのだとしたら、そこから現れたあの悪魔達も教団が呼び出したという事になる。
小地獄門は昨日まではあんな場所に存在しなかった。
唐突に大量の悪魔が出現したのは、奴が——ダンテがこの街に現れてからだ。
だから俺は最初、小地獄門はダンテの仕業だと思った。
だが全ては教団のせいだったとしたら……それは何のためだ？
アグナスは悪魔を呼び出し、捕らえるとか何とか、そんな事を言っていた気がする。
白い天使（ビアンコ・アンジェロ）を動かすために魂が必要なのだと。
しかし今、教団が悪魔を捕らえているような様子は一切ない。むしろ悪魔を野放しにしている。住民に被害が出る事さえ良しとしているようにすら見受けられる。

「ひょっとして、足止め、なのか……悪魔は……」
大量の悪魔が現れれば、その場所を素通りはできない。少なからず交戦に時間を費やす羽目になるからだ。仮に極力相手をしないとしても、それでも障害物のない場所を抜けるのに比べれば、一分一秒の単位で遅れは出るだろう。
事実、俺はそれで手を焼いている。
街から城へ、城から森へ、森から本部へ……さしたる距離でもないのに既に結構な時間が経過しているはずだ。
「奴を近付けたくないって事か……教団本部に……」
ダンテが現れた。奴は教皇を撃ち殺した。
目的が何かは分からない。しかしもしダンテの目的が教団に仇なす事だとしたら、奴は必ず教団本部にも足を向けるだろう。
そう考えたからこそ、教団は悪魔を放ったのではないのか。
そんな疑念が頭を離れなかった。
「何が起こってる……教団は、何を考えてる……？」
その問いをぶつけるべき相手に会うため、俺は歩調を速めた。

STAGE 08



ダンテが教団本部へと侵入した際、多数いるであろうと思われた警備の人間は、誰一人存在していなかった。まるでそこから離れる事を命じられていたかのように、誰もいなかったのである。

不審に思いつつも建物の内部に入り込み、最初に訪れた部屋で、ダンテは足を止めた。

「……また隠れんぼか？」

部屋には誰もいない。しかし気配だけはしっかりと存在している。それは相棒トリッシュのものだという事は、ダンテには分かっていた。彼女は部屋のどこかにいる。だが姿を見せようとはしないのだ。

「誰もいないのは、お前の手配か？　別に誰かいたって構やしねェんだがな……」

部屋の中央に置かれたテーブルに腰掛けながらダンテが呟くと、トリッシュは姿を見せぬまままで、

「半分正解。でも半分は不正解」

と言った。

「警備のほとんどは、住民が避難している大広間にいるわ。この建物全体に人員配置する程、人は残っていないのよ。入り口にはさすがに警備が付いていたから、彼らには一度持ち場を離れるように言ったわ。そろそろ貴方が来る頃だと思ったしね」

「ふうん……」

ダンテにとって、それは別段有り難い話ではなかった。教団を壊滅させるためにこんな場所にまで足を運んでいるのだ。今さら一度や二度の戦闘を避けたいなどと思ってもいない。

そんなダンテの心情を察したのか、トリッシュは苦笑した。

「他に理由があるのよ。別に貴方に楽をさせたいなんて考えじゃないわ」

「……他の理由？」

「さっき分かった事だけれど……閻魔刀が復活したそうよ」

フォルトゥナ城内でトリッシュと密会した際には、再生不可能だという話だった。それが僅かな間に覆されてしまったのだ。

だがダンテはトリッシュのその言葉に、驚きは感じなかった。むしろ当然のものと受け止めていた。城を出る前に感じた波動。血の共鳴。それが閻魔刀の復活によるものだと考えれば納得がいく。

「成る程ね……」
ダンテが呟くと、トリッシュは意外そうに尋ねてくる。
「驚かないの？」
「思い当たる節はあったんでな」
「閻魔刀を復活させたのは、ネロという教団騎士だそうよ。でも彼は教団の裏の顔までは知らないはず……どうやって復活させたのかまでは分からないけどね」
ネロというその名に、ダンテは覚えがあった。歌劇場で交戦した奇妙な若者だ。彼を、恋人らしき女性がそう呼んでいた。
「ネロってのは、アレか？　白髪頭の生意気な坊やの事か？」
「知ってるの？」
「二回会ってる。そう言えば、二回目に会った時に妙な感じだったな……」
今にして思えば、最初の邂逅の時にも、それは感じていたのだ。同じ血を引く者同士にしか気付き得ない感覚。だがその時感じたそれはとても小さく、断じるには微妙すぎた。
だが二回目、城を出た直後に遭遇した時はどうだったか。
もはや疑う余地もない程に、あのネロという青年は発していた。
同じ血を引く者の魂の波長を。
それでもダンテが見過ごしてしまったのは、その直前に閻魔刀の波動を感じていたからだ。

その強烈な感覚の残滓が未だ自分に残っているせいだろうとダンテは考えてしまったのだ。
「教団は閻魔刀を取り戻すために彼を捕らえるつもりよ。そのために騎士団長を差し向けたわ。入り口の警備を移動させたのは、貴方が警備と戦ってる間にその騎士団長と鉢合わせになるかもしれなかったから。わざわざ閻魔刀を取り戻しに行ってくれるっていうのを、こっちが邪魔する必要はないでしょう？」
トリッシュはそう言って笑った。
おそらく、彼女は気付いていないのだろう。ネロという少年と面識がないのかもしれない。もっとも、仮に面識があったとしても、同じ血を引くダンテにしか感じ得ない事なのだから彼女を責めるわけにもいかない。
「その坊や……たぶん俺の身内だな」
ダンテがどこにいるのかも定かでないトリッシュにそう告げると、彼女が息を呑む気配だけが伝わってくる。
「身内って……まさかスパーダにもう一人息子がいたって言いたいの？」
ダンテの父スパーダは、ある時を境にその姿を消してしまった。生きているのか、死んでいるのかすら定かではない。だがかつて領主を務めていたというこの街に、彼が再び訪れる理由はないように思える。
「どうかな……俺はたぶん、その線はないと思うぜ。あるとしたら……もうひとつの方だな」

ダンテのその言葉の意味が、トリッシュには分からぬようだった。
だがそれをくどくどと説明する気は、ダンテにはなかった。
「……どうするの？　坊やを助けに行く？　今ならまだ間に合うと思うけど」
一転して不安げなトリッシュの声に、ダンテは苦笑すると、テーブルの上に身を投げ出し仰向けになった。
「いや……しばらくここで待つぜ。騎士団長とやらに負けるなら、俺がそいつをブッ倒して閻魔刀を取り戻すし、勝ったら勝ったでいずれここには来るんだろう？　その時に俺がその坊やから閻魔刀を返してもらうさ」
あくびをしたダンテに、しばらく沈黙していたトリッシュが言った。
「……貴方の隠し子ってオチはないわよね？」
ダンテは目を閉じ、もう一度あくびをしてから、
「笑えねェジョークだな……」
と呟いた。



森を抜け、いくらか人の手の入った空間を歩くと、白い教団本部の建物が遠目に見えてくる。

もはや道に迷う事もない。ただ真っ直ぐ、その建物を目指して歩くだけだ。
本部前の広場に辿り着いたところで、俺は立ち止まった。
本部の方から、一人の男が歩いてくるのが目に入ったからだ。
まだ顔のはっきりしないうちから、歩き方でそれがクレドだと分かった。相変わらず姿勢正しく、神経質そうな歩き方をしている。
やがてクレドが近付いてくるにつれ、その表情が険しい事に気付いた。まるで決闘に赴くかのような形相で、ゆっくりと俺に向かって歩いてくる。
右腕をコートのポケットで隠しながら、俺は首を傾げた。
「……そんなに睨むなよ」
俺の眼前数メートルのところで立ち止まったクレドに、俺はそう告げた。クレドは何も言わぬまま、俺を睨み付けている。
「ひょっとして、アグナスって奴から何か言われたのか？　俺は俺であいつにいきなり喧嘩売られて頭に来てるんだ。俺だけが怒られる筋合いはないね」
冗談めかしてそう言ってみたが、クレドは何も言わなかった。少なくとも冗談で笑ってくれるような雰囲気じゃない。
俺は溜め息を吐き、会話を諦め、自分が問いたい事だけを口にする事を決めた。
「クレド……教団は何をしようとしてるんだ？　あのダンテって奴の事も知ってたんだろ？



悪魔の力がどうとか、地獄門がどうとか……一体何なんだよ？　隠れて何をやってんだよ？」

一歩詰め寄った俺に、クレドはゆっくりと右手を動かすと、その腰に帯びている剣の柄に手をかけた。

「……お前に答える必要はない」

ゆっくりと剣を抜き、クレドはその刃を俺に突き付ける。

「閻魔刀を渡せ、ネロ。お前などが持つべき物ではない」

閻魔刀が惜しいなんて気持ちはなかった。納得できさえすれば、別に渡したっていい。ただ、俺が気に入らなかったのは、こっちの質問にまるで答えもせず、強盗みたいに奪おうとするそのやり口だった。

「……質問に答えろクレド！」

俺の叫びと同時に、クレドが剣を振りかぶる。その一撃を後方に跳んでかわすと、すぐさま二の太刀が俺を薙ぎ払った。

レッドクイーンで防ぐには、その太刀筋はあまりに速い。俺は咄嗟にコートから右手を出し、悪魔の腕でクレドの剣を防いでいた。

それを見たクレドが顔をしかめる。

「……悪魔に取り憑かれたか」

クレドの剣を弾き、俺は身構えつつも首を振った。

「話を聞いてくれ。あんたと戦いたいわけじゃない。あんたを傷付けたら、キリエが悲しむ」
俺がそう口にすると、クレドは苦笑した。
「傷付ける、だと？　甘く見られたものだな……」
そしてゆっくりと剣を構えたクレドの身体を、淡い、金色の光が覆っていった。
「お前が悪魔に取り憑かれたというのなら、私も躊躇う事なくこの力を使える……」
クレドの身体が、変化していく。アグナスともまた違う、人ならざる姿に。
「あんたも、なのか……あんたも……」
後ずさりながら、俺は呟いた。
信じたくはなかった。
クレドは何も知らないんじゃないかと、アグナス達がやっている事に何ら関与していないんじゃないかと、心のどこかで期待していた。
兄弟のように育ってきた男が、あんな連中と一緒になって何かをやろうとしているなんて、思いたくもなかった。
まして、人間である事をやめているなんて。
全身に鎧を着込んだような姿に変じたクレドは、その金色に光る隻翼で、宙へと舞い上がった。
「これが、神に選ばれし者だけが辿り着ける進化の領域……天使の姿だ」

天使。アグナスもそう言っていた。
けれど。
「クレド……俺には……俺にはその姿は悪魔にしか見えない……」
呟いた俺に、クレドが剣を振りかざす。
突然、俺の周囲に無数の剣が出現していた。剣は全て俺の方にその先端を向けている。
クレドが剣を振り下ろすと、それを合図に一斉に、俺を囲んでいた剣が俺目掛けて射出された。
「……ッ！」
慌てて上空に跳ぶ。
だが跳んだ先にはクレドが待ち構えたように剣を振りかぶっていた。
レッドクイーンを手にし、その剣を受け止めると、俺の身体は大きく後方に弾き飛ばされた。
空中で身を翻し、着地する。クレドは悠々と飛翔したまま俺に剣を向け、
「私は騎士団長として、お前を捕らえねばならん……それが教皇の御意思である以上は」
と言った。
「そんなに教皇が大事なのか！　あいつの言いなりになって！　人間までやめちまって！　何か得する事でもあるってのかよ！」
俺が叫ぼうとも、もはやクレドは聞く耳持たぬという様子で、剣を構えて突進してくる。

「クレドォッ！」
レッドクイーンのイクシードをフル燃焼させ、俺はその一撃に立ち向かった。
刃と刃の衝突。火花が飛び散り、衝撃が腕を伝う。
鍔迫り合いの格好になりながら、俺は一歩も引かなかった。
クレドと剣を合わせるのは、果たしていつ以来か、もはや覚えてはいない。
俺に剣を教えてくれたのはクレドだった。
周囲の人間にほとんど馴染めず、母親も父親も分からぬというせいで周りから腫れ物のように扱われ、そのせいで俺はいろんな事に絶望していた。何にもやる気を見出せなかった。
そんな俺に、道を与えてくれたのがクレドだ。
剣を振っている間は、嫌な事も忘れられた。
クレドを追うように教団騎士になってからは、人から感謝される事だってあった。
この俺が、だ。はみ出し者で嫌われ者のこの俺でも、誰かの役に立てるって事を、クレドは教えてくれた。
クレドのように品行方正に振る舞う事は俺にはできなかったが、それでもクレドは俺の憧れだった。多少真面目すぎるところはあっても、誰からも尊敬され、誰からも愛される人間だと思っていた。
それなのに、俺は今、そのクレドと相対している。敵として。

「なんで……なんであんたと戦わなきゃいけない！」
刃を押し込もうとするクレドの力に抗いながら、俺は叫んでいた。
「それはこちらの台詞だ……お前に裏切られるとはな！」
クレドが俺の身体を突き放す。
よろめき、後退した俺に、クレドの追撃が迫った。避け切れず、脇腹を刃が掠める。
「ぐ……ッ！」
堪らずクレドの身体を蹴り飛ばそうとしたが、クレドは素早く後方に跳んでそれを回避した。
俺は右手でブルーローズを手に取る。
「裏切ってなんかない……俺はただ、本当の事が知りたいだけだ！」
魔力を込めた弾丸を発射すると、クレドは手にしている楯でそれを防いだ。巨大なエキドナにさえ通用した攻撃も、まるで通用していない。
「悪魔に憑かれた貴様に、真実など必要ない！」
声を張り上げたクレドは剣を地面に突き刺し、空いた手を上空に向かって掲げた。それに呼応するように、何もなかった空間に巨大な槍が生み出される。
その槍を手にしたクレドは、それを一気に俺に向かって投げ付けた。
凄まじい速度で飛んでくる槍を、転がってかわす。
起き上がり体勢を立て直すと、クレドは既に新しい槍を手に構えていた。

「やりたい放題やりやがって……！」
ぼやいたところに、再度、槍が投げられる。
今度は避けず、ギリギリまで引き付けてから悪魔の腕で掴み取った。
「お返しだッ！」
今度は俺がクレドに槍を投げ付ける。
予想外の行動だったのだろう、クレドはその槍をかわす事ができず、かろうじて楯で防いだだけだった。その隙に、俺は一気にクレドに向かって駆けていた。
距離を詰めながら右腕を突き出すと、腕から伸びた悪魔の腕がクレドの楯をがっちりと掴んだ。
「く……ッ！」
悪魔の腕を引き剥がそうとクレドが身を捩る。だが俺の力の方が僅かだが勝っていた。
「悪魔の力か……ッ！」
「人の事言えた義理かよ！」
悪魔の腕で掴んだ楯をクレドから奪い取る。
クレドがよろめいた隙に楯を捨て、そのまま右腕で殴り付けた。
「どっちが悪魔だってんだ！　俺と……あんたと！」
楯さえ奪えれば、俺の攻撃は十分クレドに通用した。顎先に拳がヒットすると、クレドが一瞬、膝を落とす。俺は構わず何度もクレドに拳を叩き付けた。

「目を……覚ませッ！」
拳の連打を受けてがっくりと項垂れるクレドの顎を、下から上へ打ち上げると、クレドの身体が大きく吹き飛んだ。
何度拳を打ち付けたか、自分でも分からない。右手はすっかり痺れてしまっている。
クレドはふらつきつつも立ち上がり、また剣を構えた。まだ戦意は失っていないらしい。
クレドを殺すわけにはいかない。しかし手加減をしていられるような相手でもない。
「……ネロォッ！」
俺が躊躇しているうちに、クレドが滑空し、高速度で迫ってくる。
二連続の斬り上げから跳び上がり、空中で身体を回転させての打ち下ろし。
人間離れした姿になっても、得意な攻撃は、生身のクレドの時と何も変わっていない。昔は見切る事もできなかった三連撃。練習用の木剣で、幾度となく青痣を作らされた。
だが今の俺には、かつて見切る事もできなかったその攻撃が、しっかりと見える。
斬り上げを上体の動きでかわし、最後の打ち下ろしをバックジャンプでやり過ごした俺は、着地と同時に右腕にレッドクイーンを手に取り、腰を落とした。
そして右腕に意識を集中させる。
「イチかバチか、だな……」

傷付けずに勝つなんて、そんな事は土台、無理な話だ。
だったら俺の全力を賭けて、クレドを止めるだけの攻撃を打つ。
レッドクイーンのイクシードをフル燃焼。右腕に魔力を集中。
俺の全身を青白い光が包む。
背後に、気配を感じた。もう一人の俺。青い悪魔。悪魔の腕の主。
「頼むぜ、相棒……！」
俺が何か仕掛けようとしているのを察してか、クレドが足を止め、身構える。間合いは随分開いている。剣を振り回したって当たるような距離じゃない。
だがそれに構わず、一歩踏み出しながら渾身の力でレッドクイーンを振り上げた。
「吹っ飛べッ！」
俺の斬撃と同時に、青い悪魔が閻魔刀を振り下ろす。
X字を描いたふたつの斬撃の軌跡に、レッドクイーンの炎と右腕から放出された魔力とが絡み合い、それは剣風に煽られるようにしてクレドに向かって飛んでいく。
「なに……ッ⁉」
クレドは剣を前面に構えてその一撃を防ごうとしたが、俺の放った渾身の攻撃は、防ぐにはあまりに巨大すぎた。炎と魔力の融合したエネルギーの塊が、クレドを包み込む。
「うおおおッ⁉」

叫びながら、それでもクレドは踏ん張り、かろうじて吹き飛ばされるのを堪えていた。
俺はゆっくりとクレドに近付いていく。
息が上がっていた。
たった一撃のために、こうも疲弊するとは思っていなかった。だがだからこそ、自信は揺るがなかった。その一撃がクレドを止める、と。
俺がクレドの目の前で足を止めた時、クレドは膝を突いていた。その姿は、悪魔から人間へと変わっている。俺の知る、いつものクレドの姿。
「これ程のものか……その力は……！」
俺はレッドクイーンをクレドに突き付けた。
「……話してもらうぜ、全部」
負けを認めさせるため、俺はクレドの喉元に刃を宛がう。練習試合で何度となくクレドにやられた行為だ。
クレドは跪いたままの体勢で、俺を見上げた。
その瞬間、
「……兄さん！」
と、背後から叫び声が聞こえた。女の声。聞き間違えようもない声。
慌てて振り向くと、そこにはキリエがいた。

「キリ、エ……？」

何故こんなところまでやって来たのか、分からない。だがはっきりしているのは、今の状況は傍から見れば俺がクレドを殺そうとしている絵面でしかないという事だ。

「ネロ……どうして……？」

危惧した通り、キリエは呟きながら後ずさる。

俺は事情を説明しようと数歩、キリエの方に歩み寄ったが、キリエは完全に怯え切ってしまっている。

「違う……これは……」

そう言いかけて、俺はキリエの視線が俺の右腕に注がれている事に気付いた。

「これは……違うんだ……」

思わず右腕を背中に回し、隠してしまう。そんな事をしたところで、もはや見られてしまった事実なんて変わらないのに。それでも、キリエにいつまでもこの腕を見られたくないという思いが俺の身体を動かしていた。

キリエは言葉を失い、ただ呆然と俺の方を、悲しそうな目で見つめている。

その背後から、満面の笑みを浮かべたアグナスが姿を現した。

「わ、私の言った通りだっただろう……？　あいつは悪魔なんだよ……」

アグナスは俺を見ながらキリエにそう囁く。

「てめェ……ッ！」

俺はアグナスに向けて駆け出そうとしたが、すぐに足を止めざるを得なかった。

アグナスはキリエの背後に回り、キリエの首元に、手にしていた巨大な剣を押し当てたのだ。

「動くなよ……動けばこの女を殺す……」

何もできぬ俺に代わり、クレドが俺を押し退けるようにして前に出ていく。

「アグナス……何の真似だ……！　これは私が賜った任……出しゃばるな！」

アグナスは悪びれもせず笑い、

「生憎だが、私も教皇様から御命令を賜ったのでな……」

と言った。

「……どういう意味だ」

クレドは明らかに動揺していた。俺は動く事もできない。キリエを見ると、キリエも事情が分からずただ怯えているようだった。

「教皇様はな、貴様では頼りないとお考えになったのだよ。様子を見に来れば案の定、貴様が負けている……だから教皇様の御命令通り、貴様の妹を利用してその小僧をおとなしくさせてもらったわけだ……」

嬉々とした様子で、アグナスがそう語ると、クレドはがっくりと膝を落とした。

「馬鹿な……！」

「く、く、く悔しいか？　だが残念ながら事実だ。貴様はそこでおとなしくしていろ！」

クレドにそう罵り、アグナスは俺を見やった。下卑た笑いを浮かべて。

「しかし……こんな女一人でこうも簡単におとなしくなるとはな……そんなに大事か？」

「キリエを離せ……殺すぞ……！」

凄んだところで優位になるわけでもない。キリエという人質は、俺にはあまりに重すぎる。

俺が守るべき存在。守りたい人。それを失ったら、俺の存在価値が失われる。俺がここまで力を付けた意味も、何もかも。

「まだ状況が分かってないのか？　ん？」

アグナスは首を傾げながら、キリエの首に押し当てた刃をほんの僅かに食い込ませた。キリエの白い肌に、うっすらと血が滲む。

「……やめろ！」

咄嗟に声が出た。自分でも情けなくなるような、弱弱しい声だった。それを聞き、アグナスはまた笑った。

「ならばどうすればいい？　うん？　人に物を頼む時は？　そ、そそんな態度ではいかんだろう？」

俺はクレドと同じように、力なく地面に膝を突いた。

「頼む……キリエを、離してくれ……」

そう懇願する。

「だったら閻魔刀を渡せ……余計な事はするな……目の前に置くんだ……」

言われるままに、俺は閻魔刀を発現させ、その場に置いた。

アグナスはクレドに目を向ける。

「クレド……閻魔刀をこっちに持って来い……」

項垂れていたクレドは、アグナスのその言葉を受けて立ち上がり、閻魔刀を手に取った。

そして俺とアグナスとを交互に見た後で、ゆっくりとアグナスの方に歩いていく。

アグナスは勝ち誇った顔をしていた。

「……アグナスッ！」

叫んだのはクレドだった。

クレドはアグナスの不意を突き、アグナスに身体ごとブチ当たる。その衝撃でキリエがアグナスの身体から離れた。俺はすぐさまキリエに駆け寄り、彼女の身体を抱きかかえようとした。

だが突然、凄まじい力の波に身体を押し返される。

「ぐ……ッ！」

転倒し、何が起こったのかを見ると、アグナスが悪魔へと姿を変えている。俺の身体を吹き飛ばしたのは、その変身の際に起こる魔力の放出だった。

キリエに目を向けると、先程の魔力のせいだろう、気を失って倒れている。だが怪我をした

という様子はない。
「ク、ク、クレド……貴様、何の真似だ……？」
　クレドもまた俺と同じように転倒していた。だがクレドの倒れている場所はアグナスのすぐ傍(そば)だ。アグナスは倒れているクレドに近付くと、クレドの頭を踏(ふ)みにじった。
「う、裏切る気か……き、教皇様を……」
　クレドはアグナスの足を払(はら)い除け、震(ふる)えながら立ち上がろうとする。だがすぐにアグナスにその足を蹴(け)り払われ、また這(は)うような格好になった。疲弊(ひへい)しているのは、アグナスの魔力を受けたせいではなく俺との戦いのせいだろう。
「教皇様がキリエを利用するなどと……あり得るはずがない……私を謀(たばか)るな……」
「き、き貴様が何と思おうと、教皇様の御心は、ひ、ひとつだ！　まま負け犬がッ！」
　アグナスは叫びながら何度もクレドを踏み付けた。
　二人のやり取りの隙(すき)に、俺は再びキリエの方に駆け寄ろうとする。だがそれに気付いたアグナスの動きの方が速かった。アグナスはクレドを蹴り飛ばし、キリエを抱きかかえてしまう。
「……クレド！　貴様の行動は教皇様に報告しておくぞ……」
　そう呟(つぶや)き、アグナスは昆虫(こんちゅう)のような翅(はね)を羽ばたかせ、飛び上がった。
　そして俺を見下ろす。
「できればこの場で閻魔刀は確保しておきたかったが……き、き貴様ら二人が相手では分が悪

い……ここは退かせてもらう……！」
　言い残して飛び去ろうとするアグナスを追おうと、俺は地面を蹴った。
　キリエだけは取り返す。そう思いながら、右手を伸(の)ばす。
「キリエッ！」
　だがそんな俺を前に、アグナスは動じる様子すら見せなかった。俺の指が、キリエの首から垂れ下がっているネックレスに掛(か)かる。その瞬間(しゅんかん)、俺の周囲を白い天使(ビアンコ・アンジェロ)達が取り囲んでいた。
「ぐうッ!?」
　白い天使(ビアンコ・アンジェロ)達が一斉(いっせい)に俺をアグナスから引き離すように身体ごとぶつかってくる。そのまま俺は、一気に地面に叩(たた)き付けられた。
「小僧(こぞう)！　女を返して欲しければ閻魔刀を持って降臨の間に来るがいい！」
　アグナスが白い天使を引き連れ、高笑いと共に俺の視界から消えていく。
　俺は愕然(がくぜん)としながらそれを見送るしかなかった。
　俺の手の中には、引きちぎれたネックレスだけが残されていた。
「クレド……生きてるか……？」
　起き上がりながら、クレドに問うと、クレドはうつ伏(ぶ)せから仰向(あおむ)けになるのが精一杯(せいいっぱい)らしく、寝転(ねころ)がったままで、
「……どうにかな」

と答えた。

「奴は……奴は、どこに行った？　降臨の間ってのはどこにある？」

「本部の最下層……幹部しか立ち入れぬ部屋だ……」

　そう口にして、クレドはようやく震えながらも身を起こした。

「何故、教皇様がお前を捕らえようとしたのか分かった……おそらく教皇様は、お前をスパーダの血を引く人間だと、考えておられる……」

　手にしている閻魔刀を見つめながら、クレドは言った。

「スパーダの……？　何だよ、そりゃ……」

「降臨の間は、教団が建造中の神が安置されている場所だ……そしてその神を完成させるには、ふたつの物を必要とする……ひとつは魔剣スパーダ……そしてもうひとつは、魔剣士スパーダの血を引く者……」

　神だのスパーダだの、わけが分からない。

「それがなんで俺がスパーダの子孫みたいな話になるんだよ……」

　俺の問いに、クレドは答えず、手にしていた閻魔刀を俺に投げて寄越した。

「細かく説明をしている時間はない……キリエが心配だ。お前は先に行け。私もすぐに追う……教皇様の真意を、確かめねばならんからな……」

「分かった」

　俺は頷き、教団本部に向けて歩き始めた。

　背中越しに、クレドの声が飛んでくる。

「お前が悪魔じゃないと認めたわけじゃない……決着はいずれ付ける……」

「……楽しみにしてるよ」

　クレドの方を振り向かぬままで、俺は答えた。



STAGE 09



教団本部には、人一人、悪魔一匹すら見当たらなかった。
だが何者かが交戦したらしい痕跡は、訪れる部屋の様々な場所に残されている。そして先へ進むにつれ、俺の右腕が疼き始めていた。その疼きが、次第に大きくなっていく。
奴がいるのだ。この建物の中、おそらくは俺が向かおうとしている先のどこかに。
皮肉なものだと思った。
奴を追っていた時には殆ど手掛かりらしいものは何ひとつ見付けられなかったのに、今こうして奴を追う事を諦め、他にやらねばならぬ事ができてから、奴の所在がはっきりと分かる。
ひょっとすると、奴は俺を待っているのかもしれなかった。
何のために？
分からない。
分からないが、それについてあれこれ考えている暇もないし、降臨の間という部屋に行く道

がひとつしかない以上、奴を避けて通るのは無理な話だった。
「……遅かったな」
これまでに訪れた事のない、広大な部屋の片隅で、ダンテはやはり俺を待っていた。
俺の姿を見るや、肩を竦めて近付いてくる。
「悪いがもうあんたに用はない」
口を開きかけていたダンテを押し退け、先へ進もうとした俺の肩を、背後からダンテが摑んだ。抗えない程の力で、無理矢理ダンテの方を振り向かされる。
「ところがこっちはお前に用があるんだな……」
勝手な男だと思った。
全てを知っているような口ぶり、余裕たっぷりって感じの態度、いつでもふざけているその調子、何もかも腹立たしい。
「俺に触るな！」
俺がその手を払いのけると、ダンテは苦笑しながら、
「何だよ……ご機嫌ナナメだな……嫌な事でもあったか？　相談なら乗ってやるぜ？」
とおどけたように言う。
俺は思わず右の拳を握り締めた。
ダンテは俺の右腕に視線を送り、頭を掻く。

「まあいい……とりあえず俺の用事は、その刀を返してもらう事だけだ」
そう告げられて、俺は思わず右手を庇うように左手で覆った。
刀というのが、閻魔刀の事を指しているのだろう事は分かる。だが何故ダンテがそれを知っているのか。教団の人間なら分かる。アグナスに見られた以上、それを知っていてもおかしくはない。だがこの男はおそらく教団とは敵対する立場のはずだ。その情報をどこから手に入れたのか。
しかもダンテは俺の右腕を見て、刀を返せ、と言った。
こいつには分かっているのだ。閻魔刀は俺の右腕が取り込んでいるという事を。
「何で、それを知ってる……閻魔刀の事を……」
思わず後ずさっていた。
最初から、ダンテという男は得体の知れない存在だった。だが今、閻魔刀を手に入れ、力を手にしたからこそ、俺はより一層、この男に底の知れなさを感じてしまっている。
「その刀は元々俺の兄貴の物だ。それをお前なんかが持ってる方が、何で？　って話だと思わねェか？」
「兄貴……？」
何となく、意外な感じがした。
この男に家族がいるという事そのものが、あまりしっくりと来ない。

ダンテは気だるそうに部屋の中心にそびえる柱に背を預けると、背中の大剣で俺の右腕を指し示す。
「兄貴が死んで、その刀は行方知れずになってた。それがひょんな事からこの街に流れ着いたらしくてな……だが、馬鹿な連中に預けとくにはちょっとばかりヤバい代物だ。だから家族の俺が責任持って管理する。そういう事さ」
閻魔刀。強大な力を持った刀。
かつてそんなものを持っていた男がこの世界のどこかにいて、今俺の目の前にいるのはその弟で、俺が手に入れた閻魔刀を返せと言う。
他の人間が相手なら、馬鹿げた話と鼻で笑ったかもしれない。だが、この男が口にすると、そんな馬鹿げた話が真実に聞こえてしまう。
だがそれでも、閻魔刀を渡すわけにはいかなかった。
ダンテが話す事が真実だったとしても。
今の俺には閻魔刀が必要だ。
これがなければ、キリエを救えない。教団の連中が求めているのは閻魔刀なのだ。俺がこれを持っていなければ、奴らは俺の事など相手にもしないだろう。
そしてそうでなくとも、奴らと戦うためにこの力は不可欠だ。
だが閻魔刀を渡さぬまま、ダンテが俺を見逃すとは思えない。

だったら俺に採る事のできる選択肢は、ひとつしかない。
全力でこの男を退けてから、先に進む。
「悪いが……こいつは渡せない」
そう口にして、俺は右腕に意識を集中させた。閻魔刀を発現、それを手に取る。
それを見たダンテの表情が、僅かに強張った。
「おとなしく渡すなら、見逃してやるつもりだったんだがな……」
ダンテはそう呟き、手にした大剣を担いだ。
そして俺の方に手を差し出し、ゆっくりと手招きをする。
「……来いよ、坊や。力ずく、ってのもそれ程嫌いじゃない」
人を見下したその態度に、俺は舌打ちをし、閻魔刀を構えた。
「坊や扱いか……甘く見られたもんだ！」
叫んで一気に間合いを詰める。
ブルーローズを左手で取り、牽制に数発撃った。
身を翻してそれをかわすダンテに、閻魔刀の一閃をぶつける。
ダンテは悠々と閻魔刀を大剣で受け止め、すぐに弾き上げてきた。予想はしていたが、さすがにこうも簡単にあしらわれると我ながら自信を失いそうになる。
「どんだけ成長してるかと思えば、大して進歩がねェな！」

そう言いながら跳躍したダンテは、既に剣を背負い、両の手に二丁の銃を構えている。その銃から、マシンガンを思わせるような速度で弾丸が発射された。
「……ッ！」
後ろに跳びつつそれをかわしたが、銃弾の雨は途切れる事なく俺を追従してくる。
空中では回避しようがないと感じ、俺は閻魔刀を体の前で大きく回転させた。
高速度の刃が、銃弾を弾き落としていく。
そのまま着地すると、同じように着地したダンテは何故か次の行動を取らず、おかしそうに笑っていた。
「……何がおかしい！」
思わず尋ねると、ダンテは首を横に振り、
「いや……懐かしい光景に思わず笑っちまっただけだ」
と言った。まるで意味が分からない。
俺は右腕に魔力を充填させた。
「食らえッ！」
右手を銃に添え、魔力を込めた弾丸を撃ち放つ。ダンテはそれを受けて身構えたが、俺の狙いはそもそもダンテではなかった。
狙ったのはダンテのすぐ傍の柱。

弾丸が柱に命中する。だが、それだけで終わった。何も起こらない。

「……狙いが雑だな」

呆れたように言いながら、ダンテがゆっくりと柱に目を向ける。

俺はほくそ笑んだ。

「離れた方がいいぜ」

敢えてそう告げる。奴の性格からして、そう告げた方が確実に、その場を離れないと思った。

俺の期待通り、ダンテは柱を覗き込んだ。

その直後、柱に埋まった弾丸が大きく爆ぜる。

「うお……ッ!?」

魔力による爆発に時間差を付けてやったのだ。思い付きだったが、うまくいった。大したダメージを与えられるとは思っていないが、一瞬の隙を作れればそれでいい。

レッドクイーンのイクシードを燃焼させながら、俺はダンテに向かって走っていた。

一撃目は、レッドクイーンを叩き下ろす。

ダンテは当然のように、それを大剣で受け止めた。

そのガラ空きの胴に、今度は閻魔刀で横薙ぎに斬り込むと、確かな手応えと共に、刃がダンテの身体に食い込む。

はずだった。

だがダンテは、閻魔刀を片手で受け止めてしまっている。

無傷ではない。奴の掌からは血が滴り落ちてはいる。

しかし優位に立てるかと思ったこの状況で、気圧されているのは俺の方だった。閻魔刀を引き戻そうとするが、ダンテは刃ごとしっかりと閻魔刀を掴んでいる。並の人間なら、いくら刀を掴んだところで、俺が刀を引けば指が落ちてしまうだろう。だがダンテの握力は、閻魔刀を微動だにさせない。

「……前言撤回だ。ちょっとはやるようになったな、坊や」

そしてこんな状況でさえ、ダンテは笑っていられるのだ。俺がいくら必死に腕に力を込めても、この男のこの笑顔を、俺は崩せない。

「坊やじゃねェ！」

ダンテの身体を引き離そうと腹を蹴り付けると、閻魔刀を掴む力が一瞬、弱まる。だがダンテ自身はよろめきもしない。結局、俺の方が後ろに下がるしかなかった。

「……キックは今イチだな。最初にもらったドロップキックの方がもうちょっと気合いが入ってた。何ならカンフーでも教えてやろうか？」

堪えた様子もなく、ダンテは言いながらふざけ半分にカンフーの真似事をし始める。

本当にこの男を倒して先に進めるのか、不安に駆られた。

力が欲しいと願って。力を手に入れて。人間じゃなくなって。

それでもかなわない相手がいるのだとしたら、どうするべきなのか。
負けを認めるのか。負けると分かっていても戦うのか。
力が欲しい。
もっとだ。
まだ、足りない。
今のままじゃ、まだ足りない。
「もっと力が……！」
右手を硬く握る。青白い光が俺を包み込む。
もう一人の俺。俺の中の悪魔。
「やってやる……ッ！」
ダンテに向けて銃を撃ちまくると、それに呼応するように、背後の悪魔が無数の剣を発現させた。その剣が、ダンテに向けて一斉に飛んでいく。
「……それも使えるのか。こいつは驚きだ！」
俺の中で新たに生まれたその力さえ、ダンテはまるで既に知っていたかのように容易く回避してみせた。
それでも諦めるわけにはいかない。
クレドとの戦いで使った剣風も繰り出す。

だがそのどれもが、ダンテには通用しない。多少怯ませる事はできても、奴を足止めする程の傷は与えられない。
やがて俺は、そんな小手先の技を使う事もできなくなり、ただただ遮二無二ダンテ目掛けて突進し、力任せに閻魔刀を振り続けた。
最後に放った渾身の突きを、ダンテは闘牛士のようにかわし、俺は勢いのままに転倒する羽目になった。慌てて起き上がろうとしたところを、ダンテの足で押さえ付けられ、首筋に刃を当てられる。
俺は抵抗せず、ただダンテを見つめた。
ダンテは不思議そうに首を傾げる。
「……何て顔してやがる。言いたい事があるならはっきり言えよ」
俺はダンテから目を逸らせ、
「……あんた、本気を出してないだろ」
と告げた。認めたくはない。認めたくはないが、いくら俺でも分かる。
ダンテは剣を引くと、その剣を杖のようにして体重を預けた。
「その通りだ……って言いたいところだがな、案外本気でやってるぜ？　息切れしたのは久しぶりだ」
「俺はあんたを殺すつもりでやった……だがあんたは違う」

身を起こしながら俺がそう言うと、ダンテは天井を仰いだ。

「年季の差だろ……俺もこの稼業、長いもんでね」

近くにあった台に腰を下ろしたダンテは、俺の手の閻魔刀を顎で示した。

「その刀……人と魔を分かつ力があるとかいういわく付きでな。さっきも言ったが、信用できない連中の手には渡せねぇんだ。ま、家族の形見だってのもあるんだがな……」

俺はダンテには勝てない。それを認めてしまった以上、もはや俺が何を言ったところで閻魔刀はダンテに返すべきなのかもしれない。俺が手に入れたこの力さえ、この男には通用しない以上は。

けれどそれでも、それを認めたとしても、俺は手に入れた力を手放したくはなかった。それを失う事に強い不安感があった。

キリエを守るため。それもひとつの理由ではある。

しかし何より、俺はもう、閻魔刀の力に魅入られてしまっていた。閻魔刀を失えば、自分が自分ではなくなってしまうような予感が、俺を支配している。

「それでも……これが必要なんだ……俺には……」

俺が呟くと、ダンテは苦笑混じりに、

「……いいぜ。持ってけよ」

と言った。

思わずダンテを振り返る。

「持ってけ、って……」

「言ったろ？　信用できねぇ連中には渡せねぇ。だが坊やになら、ちょっとくらい預けてやってもいい」

何か返そうとしたが、うまく言葉が出てこない。ダンテは部屋の出口の方を見やる。

「行けよ。用事があるんだろ？」

言われるがままに俺が歩き出そうとすると、ダンテは剣を差し出して俺の進路を阻んだ。

「……やっぱり返せってのか？」

俺が尋ねると、ダンテは首を振る。

「閻魔刀の代金だ。名前くらい言ってから行けよ。何となく察しは付いてるんだが、こういうもんは本人の口から聞くもんだからな」

そんな事を言われるとは思ってもいなかった。何となく気恥ずかしさがある。

「……ネロ」

俺が名乗ると、ダンテは、

「そうか。俺はダンテだ。よろしくな、坊や」

と笑った。釣られて俺も笑う。

「知ってるよ……あんたの名前、嫌いじゃないぜ」

そう告げて歩き出した俺の背後で、ダンテが、
「そりゃどうも」
と呟くのが聞こえた。



ネロがその部屋から去るのを待っていたかのように、グロリアは姿を現した。
気配を殺す事もなくダンテの背後まで歩み寄った彼女は、そこで足を止める。
ダンテはゆっくりと振り向いた。
そしてグロリアの姿を見、呆気に取られた表情を浮かべる。
「……初めまして」
とグロリアは告げた。
ダンテは真顔でそれに答えようとしたが、結局吹き出してしまった。
「さんざん焦らすからどんな格好してるかと思えば……傑作だな」
グロリアのその姿は、およそその正体――トリッシュとは似ても似つかぬものだった。変装なのだから当然と言えば当然かもしれない。だが敬虔で真面目な人間が多い土地だというフォルトゥナに潜入するには、その姿はあまりに扇情的で滑稽過ぎる。

笑いを止めぬダンテに、グロリアの姿をしていたトリッシュは、一瞬でその姿を元の姿に変じさせた。
そして呆れたようにダンテを見据える。
「……焦らしたわけじゃないわ。解くのは簡単だけど、変装し直すには時間が掛かるのよ。万が一、あの姿で貴方と接触しているのを見られたらマズいでしょう？　最悪の事態を考えてそうしてただけ」
トリッシュはそう説明したが、実際にはただ面白半分に焦らしていたのであった。だがそれを認めるのもつまらないから建前を口にしているだけなのだ。
「……ところであの坊や、行かせていいの？」
なおも苦笑し続けていたダンテの腹を小突き、トリッシュは尋ねた。
ダンテがこの場で待ち続けていたのは、閻魔刀を取り戻すために他ならない。ネロを行かせてしまっては、その目的が達せられぬだけでなく、閻魔刀が教団の手に渡ってしまう可能性すらある。
ネロが現在教団と敵対しつつある存在である事は、トリッシュが調べていた。彼は今、アグナスによって連れ去られた恋人と思しき女性を助けるために動いている。
ようやく落ち着いたらしいダンテは、ネロの去った方向に目を向けながら言った。
「……いいんじゃねェの？　思ったより見所のある坊やだ。とりあえず任せてみるさ」

それを聞いてもなお、トリッシュは不安であった。
もしもネロが教団に敗れれば、閻魔刀は確実に教団の手に渡る。
それだけならばまだ良い。
問題は、神の存在だ。
神、と呼ばれる兵器。それが今密かに教団本部で建造されている事を、トリッシュは知っている。だがその詳細までは分からない。グロリアとして幹部の座にまで収まった彼女にすら、神の詳細までは明らかにされなかった。おそらく教皇は自分を心からは信用していなかったのだろうとトリッシュは思う。
だからこそ、神をグロリアに見せようとはしなかったのだ。
それこそが彼らにとっての切り札だから。
それでも、神について少しだけ分かっている事がある。
魔剣スパーダ。そして魔剣士スパーダの血を引く者。
そのふたつが、神の完成には必要だという事だ。
「もしあの子が貴方が言う通り、貴方の身内なのだとしたら……マズい事になるかもよ？」
トリッシュがそう告げると、ダンテは鼻で笑った。
「その時は、俺が坊やのケツを拭くさ。坊やが俺の身内なら、尚更な」
ダンテの言葉に、トリッシュは肩を竦めた。



STAGE 10



教団本部の最下層は、俺のような末端の人間には立ち入る事すら許されぬ場所だ。
以前から、その事を不思議に思っていた。
そこには入るな、あれより先へは進むななどと、立ち入る場所に制限を設ける意味が分からなかったのだ。幹部なら入っていいが、そうでなければ駄目だという理由なんて、何もないはずだ。
だから大方、教団のお偉方は少なからずやましい部分を持っているのだろうと勝手に思っていた。禁欲を説きながらその実、淫欲にまみれた生活をしているとか、お布施を下らない事に使っているとか、そんな風に。
だが俺のその思い込みは真実だったという事になるのだろう。
いや、むしろ俺が思っていたような悪事の方がいくらかマシだったのかもしれない。
道中、俺は様々な物を目にした。

特に酷かったのは、無数の檻が並べられた部屋だった。

番号札の付けられた檻の中には、まるで実験動物のように様々な悪魔達が収容されていた。

そしてその中には、身体の半分が人間で、半分が悪魔というような者も含まれている。

「悪魔じゃ、ないのか……ひょっとして……」

俺はクレドの言葉を思い出していた。神に選ばれし者だけが、天使として進化する事ができるのだ、と。

ではもしも神に選ばれなかったら、その人間はどうなるのか。

檻の中に閉じ込められた彼らがその問いに対する答えなのは明らかだった。

俺が檻の前を通っても、彼らは何も言おうとはしない。何か言ったところで無駄だと思っているのか、それとももはや言葉を発する事すらできないのか。

暗澹とした気持ちになりながらその部屋を足早に抜け出そうとしたが、俺は出口のすぐ傍に置かれた檻の前で足を止めた。

「お前、トニオか……？」

身体の左半分が獣のような見た目に変化してしまっているが、それは間違いなくトニオだった。檻の方に顔を突き出し、トニオを見つめると、トニオは脅えたように檻の隅の方に逃げてしまう。

俺を見れば毎度のように舌打ちして文句のひとつも口にしていたような男が、まるで小動物

のように身体を震わせていた。

隣の番号続きの檻を見ると、そちらの中にはもはや人としての原形すら留めてはいない何かが収容されている。

「まさか、こっちはサガンだとか言うんじゃないだろうな……」

トニオもサガンも、一カ月前の事件を機に修行に励んでいた。おそらくあの時点では、二人とも普通の人間だったはずだ。事件の後、俺は二人と何度か顔を合わせている。だがその時に俺の右腕が反応したりはしなかったし、彼らに何も変わった様子はなかった。

「それが……何でこんな事になってやがんだよ……！」

苛立ち、思わず檻を殴り付けると、檻に入れられたトニオは何とも言えない叫び声を上げた。

それはもう俺の知るトニオではなくなってしまっているのだと俺は痛感せざるを得なかった。

どんな経緯があったのかなんて知らない。

てっとり早く力を手に入れるためにトニオ自ら志願したのかもしれないし、アグナスの奴が言葉巧みに騙したのかもしれない。それとも何も知らずわけも分からないまま妙な術みたいなものを施されてこうなってしまったのかもしれない。

だが俺の中で、教団へのより強い憤りが湧いていたのは確かだ。

トニオやサガンの事を、俺は別段好きじゃなかった。

あいつらだって俺の事が好きではなかったと思う。

俺は規律にも従わずにいい加減に過ごしていたが、クレドと幼い頃からの付き合いがあったので必要以上に咎められる事はなかった。トニオやサガンにはそれが面白くはなかったろう。
俺がキリエと近しい間柄にある事もそうだ。
あいつらがキリエに特別な感情を抱いていた事くらい傍から見ていても分かった。
俺がキリエと親しいのなんて、たまたまキリエの両親に気に入られて家族同然に育ってきたからだってだけに過ぎない。そして俺が無茶ばかりしてるものだから、心配性のキリエがすぐに構ってくる、それだけの話なのに。
そこまで考えて、俺は一人笑った。
「いや、そうじゃない……そうじゃないな……」
呟く俺を、トニオが不思議そうに見つめている。何も言わぬまま。
「家族みたいに育ってきたからとか、そういう言い訳してちゃ駄目なんだろうな……キリエの両親には本当に優しくしてもらった……でもそうじゃなくても、たぶん俺はキリエが大事なんだ……お前らと同じように……」
俺は今からキリエを助けに行こうとしている。
彼女が大切だから。
彼女の両親に恩があるとか、家族みたいに育ってきたからとか、そういう理由じゃない。俺は彼女を一人の女性として愛しているからだ。

彼女にそれを伝えた事はない。自分自身それを認める事すら、ずっと躊躇っていた。俺なんかが彼女にそんな感情を抱く事が、悪い気がして。
けれど彼女を助けに行く前に、その気持ちだけは、はっきりとさせておくべきだ。
変わり果てたかつての仲間を見て、何故だか俺はそう思った。
「大丈夫だ……キリエは助けるさ……お前らをそんな風にしたあいつらをブチのめしてな」
俺がそう告げると、かつてトニオだった者が笑ったような気がした。
こいつだってきっと、彼女を守りたかったに違いないのだ。だから力を欲したはずなのだ。
俺はたまたま力を手に入れた。それだけの話で。
「だからせめてそこで応援しててくれよ……」
小さく微笑み、俺はその部屋を後にした。
他にできる事なんてない。檻を破ったところで、あの様子では逃げ出す事すらできないだろう。元に戻す方法も分からない。
そういう意味では、俺は無力だ。
けれど俺はキリエを助けねばならない。
そしてそれをできるぐらいの力はあるはずだ。
そう自分に言い聞かせながら、俺は最下層へと繋がる階段を下って行った。

アグナスは、神の胎内にいた。

教団が世界を楽園へと作り変えるための力。その象徴として生み出された巨大兵器。

人工的に作り上げた外殻(がいかく)に魔力(まりょく)を封じ込め、動力とする。その点は白い天使(ビアンコ・アンジェロ)と変わりはない。

だが白い天使(ビアンコ・アンジェロ)が単一の悪魔から抽出した外殻を用い、かつ悪魔の魂(たましい)そのものを動力として内包しているのに対し、神はより複雑な構造を有している。これは白い天使(ビアンコ・アンジェロ)が量産を目的とした兵器であるのに対し、神は唯一(ゆいいつ)絶対の存在でなくてはならぬためだ。

そのために、アグナスは神の外殻を様々な悪魔の細胞(さいぼう)を培養(ばいよう)する事で作り上げた。強度は勿論(もちろん)の事、高い展性と再生力を持ち、魔力の伝導率にも優(すぐ)れている。

そして魔心炉(ましんろ)と呼ばれる内燃機関。

白い天使(ビアンコ・アンジェロ)には存在しないこの機関は、人の心臓が血液を全身に廻(めぐ)らせるように、数百万の悪魔から抽出された魔力を神の巨大(きょだい)な体躯(たいく)の隅々(すみずみ)にまで行き渡(わた)らせる。

その優れた外殻と内燃機関を有するからこそ、巨大でありながら敏捷性(びんしょう)を失わず、また力強さの点でも他を圧倒(あっとう)する最強の兵器たり得るのだ。

神はアグナスの行ってきた研究の集大成であり、また最高傑作(けっさく)と呼んでも差し支(つか)えない存在であった。

しかし、それも未(いま)だ不完全である事をアグナスは自覚している。

どれだけ魔心炉に魔力を充填(じゅうてん)させようと、その絶対量が圧倒的に不足しているのだ。

今のままでも動かす事はできる。そしてそれだけでも大概(たいがい)の悪魔が相手なら、まず負ける事はないだろう。

だが理論上発揮し得る最大のスペックには至らない。

それはひとえに神が巨大過ぎるが故(ゆえ)であった。数百万程度の悪魔では足りぬのだ。

その事に気付いた時、アグナスは神の完成を一度は諦(あきら)めた。

しかしそこに現れたのがグロリアだった。

彼女はアグナスが焦(こ)がれていた魔剣スパーダを教団に寄進したのである。

魔界の王すら討(う)ったという魔剣士スパーダ。その愛剣であり、彼の魔力そのものの顕現(けんげん)でもある魔剣スパーダから魔力を抽出すれば、巨大な神に十二分に魔力を行き渡らせる事ができる。

アグナスはそう考えた。

だがそこにも問題があったのだ。

魔剣スパーダは確かに恐(おそ)ろしい程(ほど)の魔力を秘(ひ)めている。それは確かな事だった。

問題は、その魔力はスパーダ本人にしか完全には引き出せぬという事実である。

そもそも神は、もはやその行方(ゆくえ)も知れぬ魔剣士スパーダを教団の手で新たに生み出そうとい

う目的の下に作り出されたものだ。それを完成させるために魔剣士スパーダを見付け出さねばならぬというのでは本末転倒（ほんまつてんとう）も甚（はなは）だしい。

　しかし、アグナスのその報告を受けた教皇サンクトゥスは、迷う事もなくこう告げたのだ。

「スパーダの息子（むすこ）ならば、どうか」

と。

　スパーダの息子。

　それがこの世に存在している事は、かねて分かっていた。彼が復活を遂（と）げようとしていた魔界の王を再度封印（ふういん）した事も、その後様々な場所で悪魔達を狩（か）り続けている事も。

　教団は彼を監視（かんし）し続けていたからだ。

　彼の存在を知った時、教団幹部の中には彼をフォルトゥナの地に招き、生ける神として祀（まつ）り上げるべきだと主張する者もいた。

　だが密（ひそ）やかに彼を監視し続けているうちに、その主張の声は小さくなっていった。

　彼はあまりに人間的過ぎたのである。

　うらぶれた町で小さな事務所を営み、ロックミュージックなどを好んで聞き、昼間からワインを飲みピザを食べているような男なのである。そしてあろう事か剣の他に拳銃（けんじゅう）までをも武器として使う。

　魔剣教団の教義とはかけ離（はな）れた存在。

　それがスパーダの息子、ダンテという存在だった。

　しかし彼がスパーダの血を引いている事には変わりない。そして確かに彼ならば、父スパーダに限りなく近い領域で、魔剣スパーダの魔力を引き出す事ができるだろう。

　その日から、教団はダンテを捕（とら）え神の核（かく）とする事を前提に計画を修正し始めたのだ。

　全（すべ）ては神の世のために。

　そして今、計画はさらなる修正を施（ほどこ）され、最終段階に移行しようとしている。

　ダンテではないもう一人のスパーダの血族。

　あの、ネロという若者。

　アグナスにさえ不可能だった閻魔刀の復活を、彼はいとも簡単に成し遂げた。

　それは何故（なぜ）か。

　彼の中にスパーダの因子が入っているからに他（ほか）ならない。

　そうでなければ、あり得るはずがないのだ。

　彼が何故スパーダの因子を持つのかは分からない。

　だがフォルトゥナの地にはかつてスパーダが存在していた以上、彼が何らかの形で子孫を残していてもおかしくはないだろうとアグナスは考える。

　正直を言えば、ダンテは想像を超（こ）えて手に余る存在だったのだ。

　彼を捕え、神に取り込む事は不可能に近いと言わざるを得ない。

だがネロならどうか。

彼の力も決して弱くはない。だがダンテ程ではないのも事実だ。

そして彼には、キリエという明確な弱みがある。

であれば、十分に、御し切れる。

ネロが引き出せる魔力は、ダンテ程ではないかもしれない。

だがネロを取り込み神が完成すれば、あのダンテとも渡り合う事ができるだろう。

そうなればダンテを取り込む事もまた容易い事だ。

魔心炉の置かれた部屋で細かな調整を行いながら、アグナスはほくそ笑んでいた。



最下層に辿り着いてすぐに、俺は目を疑った。

そこには巨大な石像のような物が置かれていたからだ。

百メートル、ひょっとしたらもっと巨大かもしれない。歌劇場にあったスパーダの石像に少しだけ似ている気がしたが、全く同じというわけでもない。ただいずれにせよ、俺にとっては趣味の悪いデザインというのが本音だった。

石像の周囲を囲むように設置されている螺旋階段を下っていくと、途中開かれたスペースが

あり、そこで足を止める。石像の真正面、胸のあたりの場所だった。

右腕がしきりに疼く。

すぐ間近に悪魔がいる証拠だ。

そう感じ、周囲を振り返り、それから石像の頭部を見上げた。

そこに教皇が立っていた。階段を下る途中にはそんな場所にはいなかったはずだ。どこから現れたのか、それとも最初からそこにいたのかは定かではなかったが、少なくとも俺が感じた悪魔の正体が教皇だった事は理解した。

ダンテに頭をブチ抜かれた死んだはずの男が目の前に立っている。それだけでも奴が人間じゃない事は明らかだ。アグナスも、教皇が天使として復活したと言っていた。この男が既に人でないのは間違いない。

「……何とも神々しい姿だと思わぬかね？　この神の様は」

教皇は自分が足場にしている石像を見ながらそう言った。言葉から察するに、この石像が神という事なんだろう。

俺は思わず鼻で笑っていた。

「あんたとはセンスが合いそうにないな……それに俺なら神様のオツムにゃ乗れないよ。畏れ多くてね」

教皇は冷たい目で俺を見下ろしている。これまで間近で話した事なんかない。せいぜい遠目

に眺めているだけだった男だが、少なくとも俺が知る限りそんな眼差しで人を見ているのをこれまで目にした事はない。

だがその冷徹な目付きの方が、この男には似合って見えた。おそらくこちらの方が本性だという事なんだろう。

俺はゆっくりとブルーローズを構え、その銃口を教皇に向けた。

「キリエはどこだ……」

俺の問いに教皇は薄い笑みを浮かべ、右手を掲げた。

攻撃を仕掛けてくるのかと思い、身構えると、神と呼ばれた石像の額に嵌め込まれた青い宝石のような箇所から、ゆっくりとキリエの身体がせり出してくる。

「……キリエ！」

呼び掛けたが、意識はないらしかった。磔にされたような恰好の彼女は、ずっと物言わず俯いたままだった。

「彼女とひとつになりたくないかね？」

教皇が唐突にそんな言葉を吐き出す。

意味が分からず首を傾げると、教皇は続けた。

「この神の中で溶け合えば、彼女と真の意味でひとつになれる……素晴らしいだろう？　お前が彼女を愛するならば……迷わずその道を選ぶべきだ。そうすれば、永遠の愛を証明できる」

そんなにも下らない妄言を聞いた事はなかった。

思わず引鉄にかけた指に力を込める。だがキリエに当たるかもしれないという思いが、あと一歩のところで俺を踏み止まらせた。

弾丸の代わりに、俺は唾を吐き捨て教皇に告げた。

「オナニーでもしてな、爺さん……これ以上てめェの戯言に付き合ってる暇はねェよ」

教皇は僅かに顔を歪ませると、再び右手を掲げた。

キリエがゆっくりと神の中に飲み込まれていく。

その瞬間、彼女は意識を取り戻したのか、一瞬俺の方を見やった。

「……キリエ！　必ず助ける！　だから……信じてくれ！　俺は――」

俺が全てを伝えるよりも先に、キリエの身体は完全に神に飲み込まれてしまっていた。

「良かろう。ならば少々、手荒にいこう。未完成とは言え、この神の力を測るには良き相手だ……」

微笑む教皇に、俺はブルーローズをブッ放していた。

だが教皇の前に現れた光の壁が、弾丸を全て弾いてしまう。

「そんな玩具でどう戦う？　わしに勝ちたいのなら閻魔刀を使うしかあるまい？」

おそらくそれが奴の狙いなのだろう。それは分かった上で、俺は閻魔刀を発現させていた。

「だったらお望み通りやってやるよ……！」



すぐさま右腕に魔力を集中させ、闇魔刀を振り上げた。
魔力で形成された刃が教皇に向かって飛んでいく。
それを見た教皇は笑いながら神の中に飲み込まれていった。
理屈は分からないが、神の中に自由に出入りできるらしい。キリエを取り込んでいるのもその力なのだろう。
俺が放った魔力は神の頭部に命中して弾けた。
だが神の頭部には傷ひとつできてない。
「こいつ……！」
その頑強さに驚嘆していると、神が小刻みに震え始めた。その震動がやがて部屋中を覆い、まるで地震のような揺れを生み出す。
「まさか、動くのか……！」
そう呟いた直後、神は右腕を高々と上げ、そのまま俺に向かってそれを叩き付けてきた。
予想以上に速い。
かろうじて後方に飛んでかわしたが、衝撃で足場が崩れそうだった。
再度、今度は左手が俺を捕えるように振り払われる。
上空に跳ぼうとした瞬間、右腕の方が既にもう一撃を繰り出そうと動いていた。うかつに跳べば空中でその直撃を食う事になると分かり、俺は左手の一撃に対して闇魔刀を構えていた。

「この……ッ！」

抉るように突き出した刃と、神の左手とが衝突する。衝撃で吹き飛ばされそうになるのをどうにか堪えた。凄まじい力だが、どうにか対抗はできるという事だ。

そのまま左手を後方に突き飛ばし、次いで上から叩き付けられた右腕を転がってかわすと、神の顔面に向けて走った。

通用するかは分からないが、それでもこいつを破壊しない事にはおそらくキリエも救えない。

「喰らえッ！」

跳躍し、閻魔刀を真っ向から思い切り振り下ろす。閻魔刀の刃が深々と神の脳天に食い込んだ。だがやはり相手が巨大過ぎる。閻魔刀の刃がどれ程深く刺さろうと、この神にとっては小さな針で付けたような傷でしかない。

そしてそんな小さな傷も、俺が刀を引いて着地すると瞬時に修復されてしまっていた。

舌打ちし次の手を考えていると、神の頭部から姿を現した教皇が、勝ち誇ったように俺を見下ろした。

「無駄だと分かったか？　この神の前にはその程度の些細な力など何の意味も持たないと」

「……確かにな」

そう呟き、俺は溜め息を吐いた。

このデカブツを破壊するのは難しいかもしれない。

神は今、動きを止めている。

教皇が神の中に入らなければ神は動かないんじゃないかという仮定が俺の頭に浮かんだ。だとしたら、教皇をブチ殺せば神は無力化する。そういう事だ。

だが奴だってそれは分かっているだろう。それでも今俺の目の前に姿を現しているのは、そこに油断があるからだ。その油断を突ければ、どうにかなるかもしれない。

右腕に魔力を集中させながら、俺は教皇を見上げた。

「……どうした？　もう終わりか？」

そう口にした教皇に向かって、俺は魔力と一緒に銃弾を放つ。教皇はすぐに光の壁を展開させたが、俺の銃弾は教皇の足元に命中した。

ダンテにも使った手口だが、他に方法が思い付かなかった。

教皇が足元を見やる。

３、２、１……。

頭で数えながら、じりじりと距離を詰めた。

カウントゼロと共に、俺は閻魔刀を振り上げて跳躍していた。同時に、教皇の足元で魔力が爆発を生む。教皇が一瞬怯んだその隙に、渾身の力で閻魔刀を振り下ろした。

「クソ野郎！」

閻魔刀を通じて硬質な手応えが伝わってくる。

教皇の眼前に展開された光の壁が、閻魔刀の刃を食い止めていた。

だが教皇のその表情には先程までの余裕は感じられない。ブルーローズの銃弾は容易く防げても、閻魔刀の一撃に対してはそうもいかないらしい。

「むぅ……ッ！」

教皇が必死の形相で声を漏らす。ゆっくりとではあるが、閻魔刀の刃は光の壁に食い込んでいった。あと一押し、それでこの光の壁をブチ砕いて教皇を叩き斬れる。

「いい気になるなよ、悪魔めが……」

その言葉もはや強がりとしか思えない。奴にできるのはもはや必死で光の壁を展開し続け、少しでも永く生き永らえる事だけだ。

「悪魔はてめェの方だろうが！」

閻魔刀を握る手にさらに力を込めた瞬間、俺の視界の端に、神の肩の上からせり出すようにキリエの身体が現れるのが見えた。

教皇がほくそ笑む。

「あのままでは落ちてしまうが……どうする？　今すぐ彼女の元に飛び込めばまだ間に合うかもしれん……」

その言葉通り、キリエの上半身は既に力なく地面に向けて垂れ下がっている。完全に身体が神から押し出されてしまえば、地面に向けて落下するのは明白だった。

「……くそッ！」

迷っている時間はなかった。俺は閻魔刀を引き、すぐさまキリエに向かって飛んでいた。まだ間に合う。そう信じて彼女に向かって手を伸ばす。

その俺の身体を、神の右手が掴み上げた。

「ぐッ……！」

凄まじい力で全身を圧迫される。逃れようと身を捩ったが、その力の前には無力だった。

「愛のために勝利を捨てるとは、愚かな事だ……」

落下するギリギリのところで留められているキリエのすぐ傍に、教皇が姿を現した。

「正直、肝を冷やしたぞ……まがりなりにもスパーダの血族という事か……」

教皇が俺を指差すと、俺の手から無理矢理閻魔刀が引き剥がされ、教皇の下へと飛んでいく。

それを手に取った教皇は、苦笑しながら、

「しかしせめてもの慈悲だ。愛する者と共に神の核の中に封じてやろう。二度と離れぬようにな……」

と言った。

「スパーダだの何だの……わけ分からねェ事ばっかりぬかしやがって……覚えがねェんだよ！　こっちには！」

必死で俺を掴む神の掌中から脱しようともがきながら叫ぶ。教皇は長い髭を撫でながら口を

開いた。
「そうか……だがわしには覚えがある。貴様の年齢（ねんれい）は十六、七といったところだろう……十七年前と言えば、わしが教皇となった年だ……そしてその年、わしは一人の男を眼（め）にした。このフォルトゥナの地でな……」

十七年前、病に倒れた先代教皇ソレムニスの後を継ぐ形で、サンクトゥスは教皇となった。
長い道のりの果て、ようやく辿り着いた教団の最高位。
若かりし頃は教団騎士として人々を守るため戦い、その後、騎士長として騎士団を統率（とうそつ）した彼も、もはや剣（けん）を振（ふ）る事にすら労苦を感じる年齢にまで老いていた。
教皇の地位は原則、死をもってしか失われる事はない。先代教皇ソレムニスは彼とさして年齢の変わらぬ男であった。
彼が死す時が早いか、己（おのれ）が死す時が早いか。
だからこそ、一時は教皇の座を諦（あきら）めようともしたのである。
しかし諦め切れなかった。
サンクトゥスには成さねばならぬ事があった。それはこの世を己が信じる楽園へと変える事

であった。今の世界は汚（けが）れ切っている。愚かな人間ばかりが増え、神への感謝を忘れ、享楽（きょうらく）を貪（むさぼ）り続けている。
誰（だれ）かがその世界を変えねばならない。
サンクトゥスはそれこそが己に与（あた）えられた使命であると考えていた。
そのためには、自分が教皇とならねばならない。
ソレムニスは凡庸（ぼんよう）で無能な男だと、サンクトゥスは信じていた。あの男に自分の計画を告げたところで、彼にはそれを実現する事はできないだろう。そもそもその理念すら理解し得ないかもしれない。
だからこそ、教皇の座に即（つ）かねばならぬ。教皇として人心を掴み、信頼（しんらい）できる腹心を作り、彼らと共に、神の使命を果たしていく。
サンクトゥスはソレムニスを殺害する事を決意した。
そしてそれから二年の時を費（つい）やした。
殺害すると言っても、剣や銃（じゅう）などで堂々と殺（あや）めるわけにはいかない。
誰にも悟（さと）られず、自然に命を奪（うば）わねばならない。
そのための手段は、毒しかなかった。
司教であったサンクトゥスは、教皇と食事を共にする機会に度々（たびたび）恵（めぐ）まれた。その際に、教皇の食事に少しずつ、毒を混ぜた。サンクトゥス自身が様々な野草から抽出（ちゅうしゅつ）した毒物だった。食

事の内容を調べられたところで、そう簡単には判明しない、そして判明したとしてもそれをサンクトゥスと結び付ける証拠など何もない。

サンクトゥスの仕掛けた毒は、ゆっくりと教皇ソレムニスの身体を蝕んだ。

そして二年。

誰にもその死の理由を疑われる事なく、ソレムニスは天に召された。

彼の右腕として活躍し、最高齢の司教であるサンクトゥスが次の教皇となる事に異論を挟む者は、一人としていなかった。

「長かった……」

教皇を襲名したその日、サンクトゥスはフォルトゥナ城最上階の一室に身体を横たえ、そう呟いていた。そこは、かつて城主であったスパーダの私室と伝えられている部屋だった。教皇となった者はその夜その一室で眠り、スパーダの崇高なる魂を受け継ぐ。それが魔剣教団に古くから伝わる慣習であった。

「これでようやく……使命を果たせる……」

まどろみながら生み出すべき楽園の姿をサンクトゥスが思い描いたその時、扉がゆっくりと開けられる微かな音と共に、何者かが部屋に入り込んでくる気配がした。

初めは、警備の者だろうとサンクトゥスは考えた。

だが彼らならば扉を開ける前にノックをするだろう。そして足音を潜めて部屋に入り込む事

もない。

そう気付いたサンクトゥスは、用心のために寝床に忍ばせていた剣を手に跳ね起きた。老いたとは言え、かつては教団騎士の長であったという自負が、彼に助けを呼ぶという行動を取らせなかった。

そしてサンクトゥスは目にした。

一人の男が身構えもせず自分を見つめている様を。

窓から差し込む月明かりが、男の銀色がかった頭髪を艶かしく照らしていた。まるで中世から時空を超えて現れたような服装に、不似合いなデザインの刀を帯びている。

「……何者だ」

男に剣を突き付け、サンクトゥスは言った。男はその状況に慌てる事もなく、サンクトゥスから目を逸らせ、部屋を見渡し、

「お前に用はない……気にするな」

と告げる。

唖然とするサンクトゥスをよそに、男は勝手に部屋の中を歩き始め、そこに置かれた家具や調度品を物色し始めた。

ふざけた男と思い、サンクトゥスは男の背後で剣を振りかぶった。

「……やめておけ」

男はサンクトゥスを振り返らぬままそう呟いた。
「黙っておとなしくしていれば、命は取らん。俺はただスパーダの足跡を追いたいだけだ」
背後から斬りかかったところでこの男には勝てないであろう事を、サンクトゥスの身体は感じ始めていた。
サンクトゥスが剣を振り上げた瞬間、研ぎ澄まされた刃のような殺気が襲ってきたからだ。
それは人間に持ち得ぬような純粋な殺意だった。
「貴様は、まさか……人ではないのか……」
サンクトゥスが思わずそう尋ねると、男はゆっくりと振り返り、薄い笑みをその顔に浮かべて口を開く。
「人ではないなら何だと言うのだ？」
悪魔か。
フォルトゥナの地には時折、悪魔が現れる。おそらくはフォルトゥナの地が強大な魔力を帯びているためだろう。騎士団という、他国では形骸化している存在が今の時代になお必要とされるのは、現れる悪魔から人々を守るために他ならない。
かつては騎士長であったサンクトゥスもまた、幾度となく悪魔と対してきた。
だからこそ、男がただ悪魔と呼ぶべき存在でない事は分かった。
男はサンクトゥスが目にしてきたどんな悪魔とも違う。

「悪魔でもない……だとしたら……神だとでも……」
サンクトゥスがそう口にした直後、部屋の外から慌ただしく人の走る音が聞こえてきた。
「教皇様！　御無事ですか！」
警備の者の声が響く。城内で、何らかの異変を感じ取ったのかもしれない。
ふと気付くと、目の前にいた男は窓際にその身を移していた。
「ま、待て……！」
男の正体を知りたいという思いで、サンクトゥスは男の方に駆け寄る。
男は窓を開けてからサンクトゥスを見やると、小さく笑った。
「スパーダを神と崇めるその殊勝な心掛けは嫌いではない。だが覚えておくがいい。俺はいずれその神を超える。その時、貴様らはどちらを崇めるか、せいぜい考えておくがいい。かつての神か、それを超えた神の子かをな……」
そう言い残し、男は開け放した窓から夜の空へと消えた。
遅れて警備の者が部屋に飛び込んできた。場内で数名の人間が、何者かによって昏倒させられていたのだという。
サンクトゥスは自分が目にした事を彼らには告げず、何も問題はないと伝えた。
神の子とはどういう意味か。
その意味にサンクトゥスが気付いたのは、それからさらに年月が経ち、スパーダにダンテと

いう名の息子がいる事を知った時であった。



「今だからこそ言える。あの男もまた、スパーダの血を引く者だったに違いない、と。そしてあの男がおそらくこの地で女を孕ませ……貴様が生まれた」

　べらべらと喋り続けた後、教皇は俺を指差しそう言った。

「知るかよ……！」

　下らない妄想としか思えない。

　大体そんな話をされたところで、俺は父親の顔も母親の顔も覚えてはいないのだ。

「貴様がいて助かったぞ……最初はダンテを神の核とするつもりだったが、あの男の力は想像以上だったからな。だが貴様もまたスパーダの血を引くならば、貴様を捕らえれば事は足りる」

「ダンテを……？」

　うまく事情が把握できなかった。神の核にスパーダの血。ダンテの名前。ダンテがスパーダの血を引いているという事なのか。

　教皇はゆっくりと閻魔刀をかざし、それを見つめた。

「この閻魔刀の力と、スパーダの血……これで全てが揃った……これでようやく、夢に描いた楽園が現実の物となる……」

　陶酔したように教皇が目を細めたその時、上空から白い何かが凄まじい速度で教皇の眼前に降り立った。

　思わず息を呑む。

　クレドだった。羽の生えた悪魔の姿。

　クレドは一瞬で教皇を斬り払う。教皇の身体が大きく吹き飛ばされる。その拍子に、俺を拘束する神の手が僅かに緩んだ。

「ネロ！　逃げろ！」

　クレドが俺を見て叫んだ。

　俺はどうにか右手を抜き出す事に成功していた。

　だがその直後にまた神の手が俺を強く締め付ける。

　俺がうめきを上げると、クレドもまた悲痛な叫びを上げていた。

　はっとしてクレドの方に目を向ける。

　教皇が、クレドの胸に深々と閻魔刀を突き刺していた。

「……クレドッ！」

　クレドは震えながら教皇の首に手を掛けた。教皇はそれを振り払いもせず、クレドに突き刺

した閻魔刀をさらに深く押し込む。
「があ……ッ！」
　仰け反ったクレドは悪魔から人へとその姿を変えていた。
「アグナスから報告は受けていたが……貴様が裏切るとは思っていなかった……何故だ？　貴様こそが最も忠実な男と思っていたのだがな……」
　教皇の問いに、クレドは血を吐きながら自分の足元、神の身体から垂れ下がるように上半身を曝け出しているキリエに目を落とした。
「貴方の信じる楽園のために、私は何でもやってきた……それでより多くの人が救われるのなら、時には手を汚す事も厭わなかった……だが、貴方はキリエを、キリエまでをも利用した……
……私の、妹を……誰よりも救われるべき無垢な心を……！　そんな楽園に、何の意味がある……
……！　キリエのような人間が住まえぬ楽園などに……何の意味が……ッ！」
　再びクレドが教皇の首に手を掛けようとしたが、もはやクレドにそんな力は残っていなかった。すぐさま教皇に手を払われ、クレドはがっくりと項垂れてしまう。
「クレド！」
　教皇は鼻で笑うと、
「つまり……家族への愛ゆえに、という事か……？　下らん思想だ……我らが信ずるべきは、絶対的な力、ただそれだけだ……」

　そう告げてクレドの身体を引き剝がした。
　もはやクレドに抵抗するだけの力も残されていない。そのまま教皇に押しやられ、クレドの身体が落下していく。
「クレド！　手を伸ばせ！」
　落下するクレドに悪魔の腕を伸ばす。だがあと僅かのところで届かなかった。
　あとはもう、無残に地面に叩き付けられてしまうだけだ。そう思い顔を背けようとした瞬間、突然現れたダンテが跳び上がり、落下するクレドの身体を抱き止めていた。
「……ダンテ！」
　クレドを抱きかかえたまま着地したダンテは、俺の声に微笑み、クレドの身体をすぐ傍に横たえさせる。そのダンテの隣には、長いブロンドの髪の女がいた。見知らぬ女だった。しかしどこかで、この女に似た雰囲気を感じ取った事があるような気もしていた。
　教皇は女の方に目をやり、ゆっくりと息を吐く。
「ようやく変装を解いたか……グロリア」
「やっぱりバレてたのね……もっと地味な格好にしておけば良かった？」
　グロリアと呼ばれた女は、そう言って肩を竦めた。グロリア。俺がフォルトゥナ城の前で出会った女だ。教皇の言葉からして、グロリアの正体がブロンドの女だったという事らしい。よく分からないが、彼女はダンテの仲間なのだろう。変装して教団に潜入していたという事なの

だろうか。

教皇は、ダンテとグロリア二人を見下ろし、勝ち誇ったように笑った。

「今さらのこのこ二人で現れたところでもう遅い……貴様らとて予想していなかっただろう！　この地にもう一人のスパーダの血族がいるなどとは！　残念だったな！　もはや神の完成は誰にも止められぬ！」

俺はゆっくりと右腕に力を込めていた。教皇に気付かれぬよう、ひっそりと。チャンスは一回しかない。奴がダンテの方に注意を向けている今しか、奴の隙を突ける機会はない。何より神に締め上げられている俺には、もうあまり力が残されていなかった。

教皇が俺の方に視線を向けようとする。

まだ駄目だ。

今こちらを見られてはまだ早い。俺の方に十分な力が戻っていない。

歯噛みした瞬間、ダンテが苦笑し、教皇はダンテに視線を向け直した。

「……どうかな？　坊やはまだやる気みたいだぜ？」

ほんの一瞬、教皇の身体が硬直した。

「砕けやがれ（Break down!）！」

悪魔の腕（デビルブリンガー）を巨大化させながら身体を伸ばし、俺が神にそうされていたように教皇の身体を掴み上げる。今の体勢では、締め上げるだけの時間はない。そのまま叩き付けるしかない。

イチかバチか神の巨体に教皇の身体を叩き付ける。

衝撃で、神の身体が大きく揺れる。

だが悪魔の腕（デビルブリンガー）の中から、教皇の姿は消えていた。

息を呑んだ瞬間、俺の右腕に鋭い痛みが走る。

「ぐあ……ッ!?」

見上げると、俺を拘束する神の手の上に、教皇が立っていた。そして俺の右腕に閻魔刀を突き立てている。

「無駄な事を……諦めろ！　もはや脱出などできん！　貴様は神の一部となるのだ……」

教皇が神の体内に自由に出入りできるのを忘れていたわけじゃない。今の俺の力では、他にこいつを叩き付ける場所はなかった。それだけの事だ。ダンテの足元にでも落としてやれば、奴が何とかしてくれたかもしれないが……できなかった。奴に頼りたくなかったのだ。

俺は、俺の力で教皇を、ブチのめしてやりたかった。

そうでなければ、俺がキリエを守ったなんて言えやしない。

高笑いしながら教皇が神の中へと消えていく。同時に、キリエが神に吸い込まれていった。俺の身体も神の掌に呑み込まれていくのが分かった。もうそれに抗う力も残されてはいない。

「何だよ坊や……ギブアップか？」

ダンテが笑いながら尋ねてくる。

何でこんな時にでも笑っていられるのか、正直その神経を疑うしかない。
だがそんな奴だからこそ、信じられる気もする。どんな状況になっても、こいつなら何とかしてくれるんだろうと。
「悪いがガス欠でね……少し眠らせてくれよ……」
呑み込まれながら、俺は答えた。
助けて、なんて口が裂けても言えやしない。
「そいつは坊やの勝手だが、閻魔刀は返せよ？　貸してるだけなんだからな」
返してやりたいのはヤマヤマだが、生憎それはもう教皇の手に渡ってしまった。こいつだってそれを分かっているくせにそんな事を言いやがるのだ。
俺は笑った。それがどうにかかろうじて貫ける、安っぽいプライドだった。
「……だったらてめェで取りに来な」
身体が呑み込まれていく中で、俺は高々と右手を上げた。
そしてその中指を突き立てる。
ダンテの苦笑を聞きながら、俺は完全に神に呑み込まれた。



STAGE 11



夢なのか、現実なのか分からない。
ただ、気が付けば俺の前にはキリエが立っていた。
「ごめん……君を、守れなかった……」
目を伏せて、そう告げる。
偉そうにしておいて、このザマだ。彼女を守るためになら何でもすると誓って、力を追い求めても、結局、俺はキリエを守れなかった。ただその事を恥じた。
「ネロ……」
キリエがゆっくりと俺に向けて手を差し出してくる。
躊躇いながら、俺はその手を取ろうとした。
だが彼女に手が触れる寸前で、キリエの身体は末端から光の粒になって消えていく。
「……キリエ！」

消え行く中で、キリエは小さく微笑んだ。
「私こそ、ごめんなさい……私のせいで――」
言葉を言い切るよりも前に、キリエの姿は霧消する。
後にはただ暗闇だけが残された。
「キリエッ！」
周囲を振り返りながら、俺は叫んだ。
「約束だ！　絶対にここから抜け出す！　君と二人で！」
俺の身体もまた、キリエと同じように消え始めていた。
溶け合い神の核になるというサンクトゥスの言葉を思い出す。
だが、それはたぶん、俺の死を意味するわけじゃない。そんな気がした。
だとしたら、まだ可能性はある。
死ぬわけじゃないのなら、俺にはまだキリエを救う事ができるかもしれない。
その僅かな可能性を信じ、俺はゆっくりと目を閉じた。
俺の意識は、そこで途絶えた。

To be continued to DMC4DF2…

あとがき

大学4年の春の事である。
一応人並みに就職活動なんてものをしようとしていたボクに、知人が言った。
「カプコンって、スーツ着てくるような奴は落とすらしいよ」
ボクはその時、ちょうどカプコンの1次面接を控えていたのであった。
そしてその知人の言葉を真に受け、いざ面接に普段着の甚平を着て行ったところ、その日面接を受ける人間の中で私服なのはボク1人であった。
騙された！　と思った。
面接官は明らかに「あーあ、アホが来た」という顔でボクを見ていたが、最終的にそんな阿呆が採用されてしまうんだから人生は不思議なもんである。
後日、ボクの面接をした上司に何故自分を採用したのかを問うたところ、
「お前はなあ……凄いアホか凄い天才のどっちかのような気がしたから宝くじのつもりで採用してみてん」
という事であった。
実際、ボクが初出社する前、ボクの所属する部署では、

「今度の新人は恐ろしくアホな恐れがあるので注意されたし」
といった警告が飛び交っていたらしい。
しかしながら入社したボクは若干人見知りの激しいただのシャイなヤングガイだったので、会社の先輩方からは落胆したように、
「……案外普通やん」
と言われるのが常であった。無論、天才などでもないのである。
「アテが外れたわ」
上司にはそう言われた。
しかしこれもまた人生の不思議なところで、ボクの配属された部署には同期がもう1人いた。
そっちの彼は「すっごい普通」という触れ込みで入社してきたにもかかわらず、蓋を開けてみると大層な変わり者だったのだ。
つまり「変な子担当」と「普通の子担当」として入社した2人の役割が、奇しくもうまい具合に入れ替わって丸く収まったのである。
その「一見普通だけど実は変な子」というのが、『デビルメイクライ』シリーズの熱心なファンの中には御存じの方もおられるだろう「さんこ」という男である。
そんでもってボクとさんこを採用した上司、ってのが『デビルメイクライ4』のディレクターの伊津野さんだったりする。

あの頃は、まさかみんながみんな『デビルメイクライ』を一緒に作るなんて想像すらしていなかったのに、気が付けば同じ開発チームであれこれやってたんだから本当に人生は不思議だ。
しかもボクは結局「変な子」になっちゃって会社を辞めちゃったりするし、「変な子」だったはずのさんこは「普通の子」になっちゃって今新婚でラブラブでやがったりするし、もう何が何だか分からないのが人生なんだな、と最近とみに思う。
でもだからこそ人生って面白いわけでね。
と、そんな話はさておき、こうして会社を辞めた後になっても『デビルメイクライ』に関わるお仕事を頂けるのは本当に嬉しい事だ。
ノベライズにあたって、これまでのデビルシリーズのノベライズのように完全にオリジナルの内容を構築するという案もなかったわけではないのだけれど、『デビルメイクライ4』はネロという新主人公の物語であるという事もあって、最終的にはゲーム本編に即した内容を取る事に決めた。
とは言え、4のシナリオにはどうしても表現しきれなかった箇所や、様々な事情でカットせざるを得なかったエピソードもあったので、そういった部分を再度組み込んで編集し直している。だから既にゲーム本編を遊んだという方にも、楽しめる内容になっている、と思う。
この再編集の作業はゲーム本編の制作に関わっていない人間の視点が必要だと思い、安井健太郎さんに協力して頂いた。

他にも様々な方の協力なくしてはなしえなかった仕事なのだけれど、1人1人名前を挙げていくとそれだけでもうちょっとした人名録みたいになってしまうので、失礼ながらかいつまんで主だった方だけに謝辞を送らせて下さい。

カプコンの伊津野ディレクター、小林プロデューサー、それから『デビルメイクライ4』の開発スタッフの方々。

挿絵を担当して下さったTHORES柴本さん。

エピソードの再編集を担当して下さった安井健太郎さん。

スニーカー文庫の編集部の方々。

それからこの本を手に取って下さった読者の方々。

「アホの子」のビンゴがこうして生きていられるのは皆様のおかげです。

本当にありがとうございます。

今回の本は一応「上巻」という扱いになっているので、かなり中途半端な形での結末になっていると思われるかもしれないけれど、そこはひとつ、近いうちに刊行される「下巻」の方を心待ちにして頂ければ幸いです。

それではまた「下巻」でお会いできますように。

ありがとう、さようなら。

森橋　ビンゴ

デビルメイクライ4
-Deadly Fortune-1

著/森橋ビンゴ
原作/カプコン
小説ストーリー協力/安井健太郎

角川文庫 15646

平成二十一年四月一日　初版発行

発行者—井上伸一郎
発行所—株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話・編集（〇三）三二三八—八六九四
〒一〇二—八〇七八

発売元—株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話・営業（〇三）三二三八—八五二一
〒一〇二—八一七七
http://www.kadokawa.co.jp

印刷所—旭印刷　製本所—BBC
装幀者—杉浦康平

定価はカバーに明記してあります。

S 211-1　ISBN978-4-04-419222-8　C0193